

きみにとどくまでシリーズ

田村くんの

うるわしきスクールデイズ

— 1 —

夜颯竹笹

登場人物紹介

＊はじめに＊

この小説は、2003年から2011年までウェブサイトで公開されていたものを一部改稿したものです。（2011年4月にウェブサイトは閉鎖）

あらかじめご了承くださいませ。

2013 秋 笹竹颯夜

＊登場人物紹介＊

◆田村優作...本編の主人公。外見は派手だが基本的にマジメな性格。自称元祖非モテ。

◆風間 響（きょう）...田村の親友。金髪長髪で校則破りの常習犯。

◆松山太郎...バンド仲間。双子の松山兄弟の兄。やんちゃで軟派な女好き。

◆松山次郎...バンド仲間。双子の松山兄弟の弟。体育会系の硬派のはずが...

◆柏木直弥...普段は読書が趣味な知的な少年だがドラムを叩くと背中に稲妻が走る。

◆小早川 環（たまき）...クラスメート。田村の喧嘩友達？

◆大島雪乃...クラスメート。容姿端麗。

1 うるわしき春！

春のうららの隅田川。

小鳥のさえずりと菜の花の薫り。

柔らかな陽射しと、透き通るような....

「.....くん」

透き通るような...？

「...田村くん！」

...透き通るっていうよりは鋭く尖がってる声で俺の名を呼ぶのは――。

「田村くんってば！」

「痛ってえ！」

いきなり投げ出していた足をガツンと踏みつけられ、全身で跳ね上がり、周りを見回すところは教室。

でもって、目の前には足を踏んづけた人物が腕組をしながら俺を睨みつけている。

キンキン声で俺の名を呼んだ、小早川環だ。

「風間くんたちは?!」

小早川の眉が見事に吊り上がっている。かなり怒っているらしい。

「風間たち？」

だが俺は状況が把握出来ないでいる。確か今は昼休みのはず。

あまりにも春の空気がうららかで心地よかったもので、弁当の後についてとうとしちまった、ってところだが、そのどこがいけない？

黒板横の時計を見ると1時。5時間目が始まるまではまだ35分もあるぜ？何で小早川はこんなに不機嫌に怒っているんだろう。

「風間たち？」

もう一回オウムのように繰り返し、ついでに欠伸も出すと小早川はますます眉を吊り上げた。

「.....外でバスケでもやってんじゃねえの？」

「いないから訊いてるの！今日の昼休みはホームルーム合宿の予定を話し合う約束だったでしょ。なのに田村くんは大口開けて寝てるし、風間くんたちはいないし、うちの班だけだよ、予定が決まってないの！」

小早川は可愛くて優しい女の子、って印象だったんだが、どうやらそれは入学したばかりの新しいクラスの中で被ってた猫だったようだ。本性は気持ちよく眠っている人間の足を思いっきり踏みつけるようなキツイ女の子。

ほんの少し、狙ってみよっかなって思ってたりもしたが、たった今、俺は小早川に対してそういう興味がなくなった。キツイ女の子は苦手だ。

「ホームルーム合宿は来週なんだよ？他の班はみんな予定表を提出してるんだよ？うちも早く出せてさっき先生にも言われたの！班長になってるあたしの身にもなってよ！」

「俺にばかり言うなよ。たまたま教室で居眠りしてたっただけで……、」

……小早川サンの怒りを俺が風間たちの分まで全部ひとりで受け止めなきゃならないわけ？

「とにかく、風間くんたちを探してきて！今すぐ！」

「へいへい…」

班長さんに命令されて俺は仕方なく立ち上がった。また大きな欠伸が出た。

「急いでね、時間がないんだから！」

さらに背中を押されて渋々と教室を出る。

昼休みのひととき。

うららかで清々しい本城高校一年生の回廊――。

4月に入学してようやく落ち着いたって感じの今日この頃。

俺、田村優作は風間 響（きょう）と双子の松山太郎次郎兄弟と共に江戸川沿いにあった北山中学ってところから隅田川の側の本城高校に来た。

風間とは中三の時から付き合いだ。ヤツは天然の輝く金髪を肩の下まで伸ばし、校則では認められていない色付きの開襟シャツを入学式の時から着て来たもんだから、一ヶ月も経ってないうちから校則破りの常習犯として先生たちからも睨まれてるし、女子からも恐れられてるようだ。

双子の松山兄弟は見かけはまるで同じ。髪型が違っていなければ見分けがつかない。だが性格はほとんど正反対だ。兄の太郎は軟派で不真面目な女好き。弟の次郎は体育会系の硬派。頭の悪さは同じだか、互いに互いを否定し合ってる兄弟だ。たまにふたりを間違えたりすると、マジで怒られる。

何でも、本城高校ではクラスの親睦をはかるためのホームルーム合宿ってやつがあるらしい。行き先は福島県の猪苗代で、一泊合宿の行動予定は全て生徒達で決めるっていう、昔からのしきたりなんだそう。適当に班分けがあり、運がいいのか悪いのか俺と風間たちは同じ班。さっきの小早川環と大島雪乃、吉岡桂子って女子の計7人が俺達の7班だ。

探してくるって言ったって、奴らどこにいるんだよ？校庭にいなきゃ体育館か？じゃなきゃ学校にいないか、だ。

中学の時はよく昼休みに抜け出したけど、まさか入学したばかりでそれはやらないだろう、とは思いながらも、風間だしなあ…、とも思う。

あいつは思い立ったらすぐに何でも行動する奴だから、もしかしたら今日の昼休みに思い立ったのかもしれないし。

しかし、よりによって7班の男子は俺たち4人だけ？いいのかよ？ってメンバーだ。HR合宿の予定なんてマジメに考える奴らじゃないし、たとえこれから集まったとしても決まるわけがない。

だいたい実行委員がいるんだから、奴らがもっとしっかり企画を練って打ち出してくれればいいんだ。何もかも各班で決めろって、実行委員の仕事やってねえじゃん、それ。

...なんてことを、ひとりでぶつぶつ言いながら廊下を歩いていると、

「よお、田村！」

手を上げながら前から歩いて来たのは二年生の里中先輩だった。里中先輩も北山中出身で、俺は昔からこの人とつるんでなんだかんだ...良い子の行いをしてきた。

「先輩、風間たち見ませんでした？」

「今、お前を呼びに行くところだったんだよ。風間たち、音楽室にいるぜ」

「音楽室？」

何でそんなところにいるんだ？

「お前たち、バンドやりたいって言ってたよな？」

里中先輩はニヤリと笑う。

確かに俺と風間、松山兄弟たちとでバンドやりて一って話を中学の時からしていた。理由は女の子にキャーキャー言われたいから、ただそれだけ。

だが、練習をする場所もなければ、パートも揃わないし話だけで終わっていた。

「とにかく田村も来いよ、音楽室！」

妙にテンションがあがってる里中先輩の言葉に従ってとりあえず音楽室へ行ってみると、いたいた。風間と松山ブラザーズ。

里中先輩の仲間たちもそこにいて、何やら盛り上がっている。

「風間あ、探したぜ」

俺はそんな風間や先輩たちの間に割って入った。

「おお、田村！」

風間が、その金色の髪と同じくらいに顔をキラキラ輝かせて俺を見た。

「今、里中先輩たちからいい話を聞いたんだ。バンドができるかもしれないぜ」

本城高校には軽音楽部ってのがあるらしい。

この軽音楽部、現在は名前だけの部活で、部員は里中先輩を含めた幽霊部員の先輩たちが三人だけ。活動らしい活動もしていないらしい。ここに俺たちが入部して部員数が7名以上になれば、今度の生徒会予算委員会で予算が取れる。軽音楽部として部活日を決めて活動すれば、予算をもらい練習場として音楽室を提供してもらった上で堂々とバンド活動ができる、って話だった。

「美味しい話じゃん、それ！」

部活でバンドっていうのは健全でいいし、練習場を確保できるってのがありがたい。

スタジオを借りる金なんてない俺たちは、これが一番のネックになってこれまでバンド結成が出来なかったわけだし。

「ただ、学校だから派手なロック系ヘビメタ系は無理。地味におとなしめに、が第一条件になっちゃうけど」

と、里中先輩は言う。

「問題なし！もともと煩い音楽は好きじゃないし」

と、風間。

風間はその外見に似合わず、音楽に関しちゃわりとナイーブで静かな優しい曲を好んで聴く。ま、中学からの付き合いで、俺は奴のそんな雰囲気ぐがだいたい理解できている。俺は別にロック系ヘビメタ系は嫌いじゃないけど、里中先輩の言うことに不満もなかった。

「んじゃ、お前たちに軽音楽部はまかせていいな？」

里中先輩はまたニヤリと笑った。

「へ？」

「俺たち、この部をどーしようか考えててさあ。先輩達の手前、廃部ってのはマズイし、かといって、もともと幽霊部員として入った部だからマジメに部活やっていく気もないし…。で、そーういや田村たちがバンドやりたいとかなんとか言ってたな、と思い出してさっき風間をつかまえたってわけ」

「ってことは…」

「俺たちも今年一杯は一応名前は残すけど、生徒会との絡みごとその他運営はまかせた！」

マジかよお？生徒会との絡みごとってのは普通二年生の仕事だぜ？それを押し付けられるのはめんどくさそうだ、って俺が考えてると、

「まかされた！」

風間が叫んじまった。

「マジい？」

「なんとかなるだろ、そんなこと」

風間は既にその肚を決めていた。松山兄弟も頷く。こいつら本当にバンドがやりたいんだ。松山兄弟、特に兄の方の動機は女の子にキャーキャー、それだけだってのは分かりきってる。が、風間は純粋に音楽活動をやりたいのだろう。

「じゃあ、今から軽音楽部の部長代理は風間ってことでいいな？」

里中先輩が俺じゃなくて風間を指名してくれたのにほっとして、先輩たちがやたら安堵した顔をしながら去って行ったあとも、俺たちは音楽室に残って話し合った。

風間はボーカル。

俺と松山弟は共にギター。

松山兄がベース。

これは、中学の時からそれぞれのパートだった。

「あと、ピアニストが必要だよなあ？」

「ドラムが出来る奴も欲しいよなあ」

ささやかだった俺たちの夢がいきなり現実になったもんだから、もう夢中だ。

「バンドの名前、何にするよ？」

「それよりもレパートリーどうするよ？」

何て話しているうちに、予鈴が鳴り、
「もう昼休み終わりかよ」

――あれ？そう言えば俺、何か忘れているような...？なんだったっけ？

「じゃ、この続きは放課後に！」

俺たちはぞろぞろと音楽室を出たが、気持ちは既に放課後に行っていた。

教室に戻ると、

「どこ行ってたのよ、田村くん！」

いきなり怒鳴られ、小早川と大島、吉岡の3人が、俺たちの前を立ち塞いだ。

そーだ！HR合宿の予定！

「高校生にもなって約束ひとつ守れないの？昼休み、終わっちゃったよ？」

「いや、これには色々と...」

「言いわけなんて聞かないよ！風間くんも松山くんたちも、最低っ！」

「最低って...、そこまで...、」

と、文句を言おうとした風間に、小早川は一枚の紙切れを押し付けた。

「これ、あんたたち4人で今日中に考えて提出してよね！」

小早川が風間に押し付けたのは、白紙の予定表だった。

「俺たちが考えるのかよ?!」

小早川たちは、ふんっ！と顔を思いっきりふって自分の席に戻って行き、ちょうどその時、本鈴が鳴った。

「あのヒト、何だってあんなヒステリーになってるわけ？」

風間は押し付けられた予定表と小早川の背中を交互に見て口を尖らせる。

「その予定表の締め切りが今日の放課後だったらしい」

「めんどくせえなあ。何で俺たちがこんなこと考えなきゃならないんだよ...」

「いいじゃん、それ、次の休み時間でやっちまおうぜ！」

風間たちは、へ？というような顔をして俺を見た。

「次の休み時間で!？」

「この5時間目で風間も松山ブラザーズもそれぞれ考えておけよな」

「田村って意外とマジメなんだよなあ...」

風間は、やれやれ、といった調子で言う。

ま、しょうがないでしょ、こうなったら。

先にはうるわしきあーんなことやこーんなことが待ってるんだ。面倒なことはちゃっちゃと片付けて放課後の音楽室に急ごうぜ。

2 男子的たくらみ

ひたすら眠かった5時間目が終わり、俺と風間、松山兄弟がとりあえず集まって10分の休み時間の間にちゃっちゃと書き込んだ予定ってのが、

「猪苗代湖畔の自然を散策する」

↓

「地元の女の子たちと仲良くなる」

↓

「一緒にボートに乗り、湖に住む生物を観察する」

だったんで、小早川の怒りの鉄拳を食らい、以後俺たちはつまんで捨てられるゴミのような扱いを受けることになった。

俺は一応マジメに考えた。でも、猪苗代ってところがどんな場所なのか全然知らないし、いや、本当は調べて計画を立てなきゃならないんだろうけど、そんなめんどくさいことはやってられねえし、ま、妥当な線で、猪苗代湖畔の自然散策って案を出した。自然って言葉が入ってれば一応合宿っぽいし。

風間や松山弟も、それでいいや、と同意したんで、っていうか、奴らは考えてもいなかったんで、これで決定！って時になって、

「それにちょっと付け加えたい」

松山兄がめずらしく建設的なことを言い出したもんだから、どーぞどーぞ、ってな具合で任せたら、先のような予定表になっちまい、小早川のさらなる怒りを買ったってわけだ。

提出の締め切りは放課後だし、もう考えてる時間もないってことで、俺たち7班の行動予定は、下ふたつが小早川班長の手によって打ち消され、

「猪苗代湖畔の自然散策（湖も含む）」

ということにおさまった。結局俺が最初に考えた案に決定したってわけだ。余計なおかずをつけずに素直に提出していれば、班長さんの怒りも少しは治まったところだったのに、

「お願いだから、現地では別行動をしてよね！」

と、俺たち4人は見捨てられた。クラスの親睦をはかるためのホームルーム合宿のはずが、行く前から仲間割れしてんじゃしょーがねえよな。

でも、優しかった（はずの）小早川班長を鬼に変えた原因を作ったのは俺たちなわけだし、ここは関係修復の努力をした方がいいかも…、

なんて、マジメなことを考えているのは俺だけのようで、

「どーせ女子と別行動するんなら、この予定を実行しようぜ」

てなことを松山兄が言い出した。

「猪苗代ナンパ大会ってのはどう？」

——ナンパ大会だー？！

「現地でそれぞれ女の子をボートに誘う。失敗した奴は成功した奴の分のお土産を買う、っての」

松山兄の軟派は中学の時からだ。

頭の中はいつも女の子のことで、コイツの行動は全てそこを基盤として決定されている。

そのくせ、彼女がいたことは今までにない。まあ、これだけわかりやすいと、女の子の方だって警戒するわな、普通…。

はあ…、とため息をついて顔を背けたのは松山弟。

「俺はパス」

弟は兄貴と違って、ナンパって言葉を聞いただけでもムシズが走る硬派だ。

正直言って、俺もナンパってのはあんまり気が乗らない。中二の時、里中先輩にくっついてはじめてナンパに挑戦し、「カ～ノジョ、お茶しない？」って声をかけた可愛い子が、実は男だったってショックがトラウマになってたりする。それに、そうそう引っかかってくれる女の子もいないだろーし、断られたらサバイシ…、って思ってた時、

「その話、乗った！」

松山兄の案に賛同したのは風間だ。

風間は軟派ってわけではないが、たまに悪乗りをする。

「ボートに誘うだけだろ？簡単じゃん！」

そりゃ、キミのような素敵なルックスがあれば簡単な話でしょうが……。

と、腹では思いつつも、

「んじゃ、俺も乗る…」

と、口では言ってしまう、優柔不断な田村くんなのであります。

ま、大会っていうくらいだからどうせゲームみたいなもんだ。もしも俺が失敗するとしたら、超のつく美形の風間は別としても、松山兄は絶対に成功しないだろう、という変な安心感もある。

ということで、

俺たちのホームルーム合宿は『猪苗代ナンパ大会』と命名され、小早川班長の目を盗んで実行されることになったのだ。

3 猪苗代ナンパ大会

やってきました福島県猪苗代。

五月の爽やかな陽気の下...、と前置きをつけたいところだけど、めちゃめちゃ寒い！

風もかなり吹いているし、それがまた冷たいのなんのって。

都内じゃ既に半袖の季節なのに、ここはまだストーブがいるほどだ。

俺たちのクラスは猪苗代湖を拠点にして行動する班と、五色沼ってところで行動する班の二手に分かれていた。

バスは最初に猪苗代で俺たちを降ろしてそのまま五色沼に向かった。

迎えが来るまでの約半日で、それぞれの班で予定を立てた行動をする。

で、俺たちの予定は、表向きは『猪苗代湖畔の自然散策』だ。

女子3人はバードウォッチング用の双眼鏡やカメラなんかを手にして、さっさと湖畔の遊歩道に向かって行った。

俺たちのことはまったく無視。

なんだかちょっと寂しい気がしないでもない。

「じゃっ、俺たちも散策に出かけようぜ〜！」

松山兄は張り切って湖に向かって歩き出す。

しかし、こんなに寒いんじゃ、はっきり言ってボートどころじゃない。

人もいないんじゃないかと思う。

ナンパしたくたって、相手がいなきゃ出来ないわけだし、計画倒れの予感がした。

——ところがどっこい！！

さすが観光の名所です。

いるわいるわ、人、人、人！

派手派手なオバサンたち、しわしわのじーちゃんばーちゃんたちが団体さんで湖のほとりを歩いてました。

平均年齢高い高い！30才以下無しです。

「.....」

松山兄はもちろん絶句。

風間はアハハと高笑い、松山弟はシラッとした顔で兄を見つめ、俺は少しだけ安堵した。

「どのコをナンパする？」

爆笑しながらの風間はオバちゃんたちを早速品定め。

「俺は、あの真っ赤なスーツを着たおばちゃんがいいなあ！」

俺も調子に乗って言うてみる。

「じゃ、俺はあっちの豹柄かなあ」

そんな俺らの横で松山兄はおもむろにガッカリして肩を落としていた。
その時だ。

「あの...、すみません...」

背後から声をかけられ、そのうるわしき儚い声に俺たちは全員が同時に振り向いた。
知らない女の子がひとりで立っていた。

「ボートなんて、漕げますか？」

女の子は言った。

俺たちは顔を見合わせた。

——これって、もしかして逆ナン！？

「こ、漕げますよ、もちろんっ！」

すかさず一歩前に出たのは松山兄。

それを、風間が後ろに引き下げ自分が前に出る。

そうになると俺も負けじと前に出る。

動かないのは松山弟だけだった。

「ボートに乗せて欲しいんですけど...」

女の子は恥ずかしそうにうつむいちゃって。

三つ編みのお下げをした可愛い子だ。たぶん、俺たちと同じ年ぐらいか、ちょっと下ぐらい。
地元の子のようだった。

はっきり言って、めっちゃめっちゃタイプ！ここは俺も頑張らねばっ！てことで、

「じゃ、俺が」

と、言いかけた時、松山兄が俺の脛を蹴りやがった。

弁慶の泣き所だぜ！痛いなのなんのって！跳びはねてる俺の横で松山兄は小声で言った。

「相手はひとり、俺たちは３人」

松山弟は数に入っていない。

当たり前だな、競争率は確実に低いほうがいいわけだし。

「彼女に選んでもらおうぜ。俺たちのうちの誰とボートに乗りたいか」

と、松山兄。

「俺に決まりだな！」

と、風間。

ごちゃごちゃと言ってる俺たちを、心配そうに見ている女の子。

不安がられて逃げられちゃってもせつないし、しょーがない、松山兄の提案を飲むことにした。

これで選ばれた奴がこの大会の勝利者、ということで話がまとまり、

「俺たち全員ボートは漕げるけど、誰と乗りたい？」

俺、田村優作が女の子に訊いた。

清く、優しく、カッコよく！

「どなたでもいいんですけど...、じゃあ...」

女の子は俺たちを順番に見回したあとに風間で視線を止めた。

——やっぱ美形かよ...、

と、思ったが、女の子の視線はまた動き出し、今度は松山弟で止まった。

「あの、いいですか...？」

女の子は松山弟に向かって言った。

「お、俺っ！？」

「お前っ！？」

俺たちは同時に叫んだ。

「お願いします」

恥ずかしそうににっこりと笑う女の子。

さすがの松山弟も顔を真っ赤にして、体は棒っ切れのようにコチコチに硬直している。

俺と風間、松山兄は言葉も出せずに呆然とふたりを見守った。

「...じゃ、じゃあ、おお俺ってことで」

ずいぶんたってから松山弟が言い、コチコチのまま女の子と一緒にボート乗り場に向かって行った。

「マジかいやあ～！？」

当然兄の方は叫んださ。俺だって叫びたかったさ。あいつ、俺はパス、って言ってなかったか？！

なのに、そりゃねーだろう！

「アハハハ...！！」

風間はまた大爆笑。

「あいつ、どーするかなあ？！」

.....確かにそれはそれで見ものかもしれない....。

どーする、松山弟よ！？

4 仲直りの？ボート

松山弟と三つ編みの女の子が乗ったボートがぎこちなく、ヨタヨタと湖へと出て行った。

さっきよりはマシになったが、風もまだ少しあって、大丈夫かい？ってぐらいにボートは揺れている。

でも、あの揺れは決して風のせいばかりじゃなく、松山弟が腕をピーンと突っ張らせたまま不器用にオールを回しているからに違いない。

「ぷぷっ！」

失礼な風間が、そんな松山弟を見て遠慮なく吹きだした。

「カッチンコッチンだよ、あいつ！」

「何で俺じゃなくてあいつなわけ！？同じ顔だろ、俺とあいつは！」

松山兄は今更悔しさが込み上げてきたようで、湖畔でわめき出した。

「まあまあ、そう言うなって！ちょっと見守ってようぜ」

風間は楽しそうに遠くのボートを顎でさしながら言う。最初からホンキでナンパする気もなかったんだろう。

けど、何であんな清純そのものの可愛い子が俺たちみたいな見かけド派手な`不良、を逆ナンしたんだろう？

風間はあのと一りの金髪だし（まあ、奴の場合は天然なのだが...）、俺も髪型派手にいじってるし（茶髪に赤メッシュ、ビジュアル系の！）、ちょっと落ち着いてからそっちが気になりはじめた。

もしかして、見かけによらずの女の子だったりして？

けど、三つ編みのお下げで、少し頬が赤く色づいていて、真っ黒な瞳をうるませちゃったりしてて、ほんと、好みのタイプなのよね。

よりによって、選ばれたのが松山弟だ。兄がわめきたくなる気持ちがわからないでもない。

「あいつら、ずいぶん遠くまで行ってないかぁ？」

風間が目を凝らす。

確かに、行っていい範囲のブイを越えた先までボートは行っている。

「なんなんだよ、なんなんだよおお！！」

松山兄は半狂乱だ。

とにかく、松山弟が帰って来るまでは俺たちはどうしようもないわけで、湖畔にそのまま座りこんで湖を眺めることにした。

もうあと十数分で時間切れって頃になっても、松山弟たちの乗ったボートは遥か彼方にいる。ここからは遠くてよく見えないが、一ヶ所にずっと止まっている。

もう随分前から動いていないようだった。

――何してるんだ？

だいたい、あの松山弟が初対面の女の子と一時間近くもふたりっきりで話すことあるんだろうか？よく間が持つなあ...、と余計なことを心配する。

俺たち3人は馬鹿みたいに湖畔に体育座りをして彼方のボートを見つめていた。

その時、

「ちょっと、何やってるのよあんたたち！」

聞き覚えのある透き通ったキンキン声が背後でして、振り返ると小早川一行が立っていた。

「湖を見つめながら自然の散策してるのさあ」

風間がとぼけた口調で答えた。

「ひとり、足りなくない？」

「ああ、松山弟ならあそこで...」

と、言いかけた風間の口を、俺は思いっきり手で塞ぎ、

「あ、今、便所に行っててさあ...」

と、誤魔化した。

知らない女の子とボートに乗ってるなんて知られたら、も～それこそ大変なことになっちまう。

「あ、そういや、お前たち、双眼鏡持ってたよな？ちょっと貸してくれない？」

風間は俺を押し退けて小早川に言った。

「いいけど...」

小早川が言いかけて首に提げている双眼鏡を手にした時、

「はい、これ貸してあげる！」

素早く自分の双眼鏡を差し出したのは大島だ。

「サンキュ！」

風間は大島の手から双眼鏡をとり、彼方の松山弟たちを覗いた。

「うおお～～～っ！！」

突然風間は叫んだ。

「な、何なのよいったい！？」

「ヤバイぞヤバイ！あれはヤバイって！」

「貸せっ！」

松山兄が風間の手から双眼鏡を奪い取り、

「なんですとおおおお！！」

雄叫びを上げたので、今度は俺が兄の手からそれを奪って覗いた。

――ぬおおお～っ！？

くっついてる、くっついてるぞ！

松山弟と女の子はボートの中央に二人で寄り添って、向こう側を向いていちゃいちゃしている！ように見える！

「こりゃ、完全に俺たちの敗北だなあ…。まさか、あいつがこれほどまでにバシッとビシッと決める男だったとは思わなかったぜ…」

風間は半ば呆然としたように呟いた。俺も呆然としちまった。

「いったい何があるのよ…？」

小早川が自分の双眼鏡を覗こうとしたんで、俺はとっさに、

「あ、あ～！あのさ！ボートでも乗んない？！」

と、言っていた。

小早川は双眼鏡を覗こうとした手をそのままの状態で止めて、

「え…？」

信じられないことを言われた、ってな顔をして俺を見た。だが。

――そ、そうだよ！

女の子をボートに誘うってこの大会、別に知らない子じゃなくてもいいんだろ？

それに、このまま小早川たち女子と仲たがいしたままHR合宿が終わるってのも何だか悲しいし、これは仲直りのいいチャンスかもしれないぞ！

……っていう俺の考えが風間には伝わったようだ。

「いいねえ！」

と、乗ってきた。

あっちも3人、こっちも3人、数としては調度あってるから誰が誰を乗せる…って問題…。

俺と風間、松山兄は顔を見合わせた。

3人の女子の中で、一番話しやすいのは大島だ。大島は小早川と違っていつもプンプン怒ってないし、サバサバしてるし美人だし。吉岡は目立たない女の子だけど性格は良さそうだ。

「俺、小早川はパスだぜ。ボートに乗ってまで怒られるのやだし…」

松山兄が俺に耳うちした。きっと、風間も同じことを思ってるだろう。俺の顔をチラチラ見ながら鼻をポリポリかいている。

でもさ、小早川だって悪いやつじゃないぜ。

俺、そう思う。

「じゃ、小早川、のろーぜ！」

俺は小早川を誘った。

「じゃ、大島は俺でいい？」

と、風間。そして、

「そんじゃ、吉岡さん行きましょう」

と、松山兄。

女子たちはおとなしくなっちゃって、小早川までがしとやかにボート乗り場についてくる。最初からこんな風に仲良くやってりゃよかったんだ。

とりあえず『猪苗代ナンパ大会』は、全員が女の子をボートに乗せた、ということで終結だな。

しかし、ほんとに寒いぞ福島県。

湖に出たはいいけど、温度がさらに下がったようでカチカチと歯が鳴るほどだ。こんな寒いんじゃ、一時間も乗ってらんないぜ。誰だよ、ボートに乗ろうなんて言い出した奴は...

「田村くんでしょ...」

小早川がシレッと言い、寒そうに震えながら俺を睨んだ。でも、いつもみたいな吊り上った目はしていない。

「ま、色々悪かったよな。これからは仲良くやろーぜ」

大人の田村優作としては、ひとこと言っとかなきゃって思っさ。

なのに、

「ばっかみたい...」

と、きたもんだ。

ま、小早川ってこういうやつなんだ。

別にいいけど可愛くないぞっ！

ところで、松山弟、まだ動かないでいるぜ。

実は、さっきからヤツが何をしてるのか気になって気になってしょーがない。

ここはひとつ確かめに行くことに決め、ボートを大きく方向転換した。

5 心意気

松山弟と女の子のボートは、例のブイを越えた遙か向こうで停まっていた。よく監視の親父が黙って...、って、見てないじゃないか！親父、ボート小屋の中で弁当食ってるぜ...

ここにブイが張ってあるということは、この先はかなり深いか、水草なんかが絡まっているか、とにかく危険ってことだろ？なのに、あんなとこであいつら何やってんだ？

風間や松山兄のボートを見ると、それぞれ楽しそうににこやかに、乗せた女の子たちとお喋りしながらボートに揺られて青春してる。

ふと、目の前の小早川を見ると、

「な、なによ...？」

睨まれた。

「い、いや、別に...」

どうでもいいけどやっぱりこの人は怖い。見ただけで睨むし...。とにかく、松山弟たちが気になるから、俺はそっちに向かってボートを漕ぐ。

「田村くん、この先は行っちゃいけない場所だよ？」

ブイを越えようとした俺に、すかさず小早川が注意を入れた。ここで何だかんだ言ったところでまた喧嘩になるだけだし、小早川の言葉は無視してそのままボートを漕いだ。

「ねえ、田村くん？」

ひたすら無視。

「ねえったらっ！」

「うるさいなあ！俺を信じて黙ってついてこいよ！」

しまったあ！

思わず口からそんな言葉が出てしまった。

小早川に向かって「うるさいなあ、なんて言ってしまった日にゃ、どんな言葉の鉄砲が百倍になって返ってくるか...。

俺はおそろおそろ小早川を見た。

ところが、小早川は一瞬、うっ と詰まったようだが、そのまま顔を下にうつむかせておとなしくなっちゃった。

――あれれ？どうしちゃったの？小早川さんらしくもない。

でも、そうやっていればキミだって可愛い女の子なのにさ。

少し拍子抜けしたが、それ以上は小早川も何だかんだ文句を言って来ないようなので、松山弟のいるところに急いだ。

近くまで来てわかったことは、松山弟と女の子は別にいちゃいちゃしていたわけではなく、女の子が松山弟の腰をしっかりと支え、弟は何をやっているかというのと...

「もう少しなんだけど...」

「頑張ってくださいっ！」

何て言い合いながら、湖にある何かをオールを使って取ろうとしているみたいだった。

「ダメみたい...。どんどん沈んでいっちゃう」

「どうしよう...」

かなり必死のようだ。よっぽどのもんが湖の中にあるのだろう。

「おーい。どーしたんだあ？」

声をかけながら奴らに近づこうとするけれど、やっぱりこの辺、水草がいっぱいでオールが思うように回せない。

こりゃ、あんまり遠くまで行くとマジでヤバイ。

なんとか松山弟のボートの横に自分のボートをつけて、弟のオールの先を見た。白いものが藻に引っかかって、今にも沈みそうになっていた。

「田村あ...」

松山弟は情けない声を出して俺を見た。

「ちょっと、松山くん、何やってんのよ...」

小早川は弟と女の子を交互に見ながら呆れている。

とりあえずこれも無視。

「すみません。あれを取って欲しかったんですけど、取れなくて...」

女の子は泣きそうな顔をする。

マズイ。

女の子のこーゆー顔にはめっちゃ弱い田村くんなのであります。

女の子は白沢真由ちゃんといって、その志田浜（猪苗代湖畔）に立ち並ぶ土産物屋の娘らしい。

湖に落ちているものは、真由ちゃんのお母さんが大事にしているスカーフなんだそう。

それをこっそり持ち出して湖畔を散歩していたら、この風に、あれよあれよと言う間にここまで飛ばされてしまったらしい。

松山弟は、このスカーフを探してあちこちボートを滑らして、ようやくここで見つけたのはいけれど、藻に絡まり、オールを伸ばすたびにどんどん沈んでいってしまう、という、よくある話のオチだった。

「あのスカーフ、死んだお父さんが若い時にお母さんに贈ったもので、失くしたなんて言ったらお母さんが悲しむから...」

だったら最初から持ち出すなよ...、と、もしもこれが小早川がやらかしたことだとしたら言っていた。

けど、真由ちゃんだ。

「松山さんがずっと頑張ってくれてるんですけど...」

カチコチに手を伸ばしている松山弟。

それじゃ、取れるもんも取れないぜ。余計に沈めているようなもんだ。

「俺にやらしてみ？」

俺はボートを移動させ、松山弟と同じようにやってみた。

だが、見ているのと実際にやってみるんじゃ大違い。取れない。

弟よ、今までひとりでよく頑張っていたなあ、と素直に感心した。

「やっぱり無理ですか...？」

はあっ！

おもむろなため息が背後から聞こえ、見ると小早川が明らかに呆れた顔をして俺を睨んでいた。

こりゃ、あとでまた怒りの鉄拳が飛ぶな...、と思ったけど、ここはまた無視。

「どうしよう...？」

目に涙をいっぱいためて真由ちゃんは言う。

いけません、いけません、そんな目をしたら。田村くんはそーゆー顔に弱いて言ってるでしょう。

「俺にまかせなさい！」

手を湖の中に入れてみた。

――冷たいぞ、かなりっ！

しかし、男田村優作、ここは心意気で...っ！

「きゃあっ！」

小早川の悲鳴なんてどーだっていい。

俺は制服を脱ぎ捨て、パンツいっちょになって、湖の中に飛び込んだ！

が。

一発で心臓麻痺を起こしそうだった。

全身の毛穴が自ら閉まるって言うか、一瞬で全身鳥肌状態というか、言葉じゃ言えない感覚に襲われ、すぐには動けなかった。

「田村、マジっ!？」

松山弟の叫び声も、

「田村くんっ！！」

小早川の泣きそうな声も、

「そんなあっ！！」

真由ちゃんの驚きの声も、耳鳴りのように感じた。

が、こーなったからには、意地でもスカーフを取らなければ、という気力のみで俺は水草をよけながら泳ぎ、そしてそして、

「取った！」

スカーフを高々と上げた！

が、

――寒い。死にそう...っ！もう、動けないっ！

「田村、ひっぱってやるからこれにつかまれよっ！」

オールを差し出してくれた松山弟が神様に見えたぜ、マジで。

「もう、松山くんなにやってんのよっ！こっちだよ、こっち！早くっ！田村くんが死んじやう！！」

小早川が狂乱してる...。

「し、しっかりしてください！！」

真由ちゃんが泣いてる。

「田村っ！頑張れっ！」

松山弟が焦ってる...。

ボートまでの距離はたかだか2メートルぐらいだったけど、100メートルぐらいに感じた。

湖から這い上がると、冷たい風がまるでナイフのように肌を突き刺す。ガタガタブルブルどころじゃない。

「田村くん、これっ！」

小早川が自分の持っていたタオルで俺の濡れた身体を素早く拭いてくれ、その上からさっき脱ぎ捨てた制服をかぶせてくれた。

「松山くんも上着を脱いで田村くんに貸しなさいよ！」

小早川に命令されて、松山弟が俺に上着を投げてくれた。

「さ...さんきゅきゅ...きゅ」

「とにかく帰るわよ！」

完全に小早川班長の仕切りで、松山弟のボートはようやく動き出し、俺のボートは小早川が...、頑張ろうとしているけど、さすがに無理みたいで、

「俺が漕ぐよ。大丈夫だから...」

と、交代する。

「もう！何であんな無茶すんのよっ！カッコつけしいっ！」

小早川は今にも泣きそうな顔をして俺を責めた。

「小言はあとで聞くからさあ...」

「なんなのよ、なんなのよ！！」

そう叫んで小早川はぼろぼろと涙をこぼす。

――だからあ...、そういう顔はしないでちょーだい。苦手だって言ってるでしょうがあ...。

「なにやってんだ、田村？落ちたのか？」

陸に戻ると、風間たちもちょうど戻ってきたところで、俺のカッコを見て呆れたように言った。
。

俺さまの心意気を、落ちたのか？なんて失礼な！

「あの、あの...」

真由ちゃんが俺のところに駆け寄ってきた。

「ありがとうございます！おかげで助かりました！」

「いやいや、おやすいごようで...」

ちっともおやすくなかったけど...。

「風邪、ひかないでくださいね」

「大丈夫、大丈夫。気にしないで」

「じゃ、これで！」

――はあっ！？

.....。

いっちゃったよ、真由ちゃん...。

うちで温かい珈琲でも、なんて言葉を期待していたのに...。

「で、彼女はいったい何だったわけ？」

風間が言った。

「何で、俺だったんだろ...？」

と、松山弟。

それも謎だ。

しいて言えば、弟が一番たくましく見えたから？なんたって体育会系だし...。

なんにしても、真由ちゃんはそのスカーフが取ればなんだってよかったわけで...。

「もう、ばかみたいっ！知らないっ！」

小早川がいきなり叫び、プンプンしながら行っちまった。

「じゃ、風間くん、またあとでね！楽しかったよ！」

「それじゃ、また」

大島と吉岡も小早川のあとを追って行った。

だぁーーーーっくしょんっ！！

虚しくしゃみが飛び出た。

バスの迎えが来るまでまだ数時間ある。

俺、どーすりゃいいんだろう……。

「大丈夫か、田村？」

「大丈夫……」

じゃねーよ！

やっぱナンパなんてキライだし、俺…っ。

6 壮絶バトル！購買部編

本城高校じゃ、1年しょっぱなのHR合宿が終わってやっと高校生活本番らしい。

湖でさんざんな目に遭った俺は、あの後バッチリ風邪ひいて一週間鼻洪水地獄だった。

花粉でもねーのに鼻かみすぎて真っ赤になっちまうし、風間は未だに笑ってるし、小早川はずっと怒ってるしで、田村くんのうるわしきHR合宿は悲惨なコメディになっちまったが、風邪が治まった昨日ぐらいから俺もようやく高校本番って感じだ。

で、

高校に入って、まず楽しみにしていたのは学食。

AランチやBランチ、ラーメンにうどんなんか200円や300円で食えて、なおかつそれなりにうまい、なんてのを想像してたんだけど、なんと、本城高校には学食が存在してなかった。

これはかなりショックだったぜ。

受験するまえに学食があるかないかをチェックしときゃよかった、なんて思ったくらい。

やっぱ、高校に入ったからには、そういう昼休みの楽しみも味わいたかったし、女の子と一緒に学食で昼メシ食う、なんてことに憧れてもいたし。

高校に入ってまでかーちゃんの手作り弁当持参で、しかも野郎同士ガン首揃えて屋上で弁当箱広げるってのもなんだか虚しいもんがあり……。

で、その代わりにあるのが購買部。

簡単な文房具と菓子パン、調理パン、瓶に入った牛乳や珈琲牛乳が、集会室の片隅の長テーブルの上に並べられているわけだけど、休み時間ともなればこのテーブルの前には生徒が群がり、目的のものを買うだけで休み時間が終わっちまう、というありさまで。

だから、たまに弁当だけじゃもの足りない時に、売れ残りのチョコデニッシュを買うぐらいで、俺はあんまり購買部を利用したことがなかった。

「くそっ！今日も敗れたり！」

3時間目が終わったあとの休み時間に、松山兄がくさくさしながら教室に戻ってきた。

ここ最近、松山兄は毎日のように購買部に行き、『ハムカツパン争奪戦』に参戦している。

調理パンが購買部に入荷するのが3時間目の最中で、その後の休み時間はその調理パンを求めて全学年の生徒たちが購買部に殺到する。中でもハムカツパンは一番の人気商品なんで、ゲットする難易度が高いレアものなのだ。

「3年の奴ら頭に来るぜ！俺が先に並んでるってのに横から当然のように割り込んできやがる」

松山兄は毎日同じようにいきりたっているが、あの購買部の状態じゃ並んでいようがいまいが関係なく、とにかく群がっているだけで、どんなことをしたって先に『それ』をつかんだもん

勝ち、ってな感じなのだ。

そうなるとやっぱ、下級生は上級生に遠慮する雰囲気があるし、なかなかゲットには遠いハムカツパンだ。

「なんかいい方法ないかなあ？」

松山兄がつぶやいた時、風間が教室に戻ってきた。

手にはしっかりハムカツパンを持ち、それをポンポン上に投げキャッチして、を繰り返してニコニコしている。

「あ！？お前、それ！？」

松山兄が風間の手を指差した。

「どーやってゲットしたんだ！？」

「これ？別に普通に...」

風間は　へ？というような調子で答えた。

「普通にしていってゲットはできないだろ！？お前、なんか汚い手を使ったなあ？！」

「使うかよ！普通に手を伸ばして台にあったこれをつかんでちゃんと80円払って買ってきただけだぜ？」

風間は背がある。手も長い。松山兄とは目的のものに届くまでのリーチ差があるが...

「なんか、俺が購買行くと人の波が引くんだよねー。なんでだろ？」

本人がしゃらっと言うとおりなんだろう。

オレンジシャツの金髪男がそこにいちゃ、無意識に人は怯んじまう。

「なんなら明日、俺がゲットしてきてやろうか？」

「いらんっ！レアアイテムは自分でゲットしてこそ、その喜びも増すってもんだ！」

「レアアイテムって...、それ、ゲームじゃないんだから...」

「いやー！これはゲームだぜっ！」

何故か俺が叫んでた。

レアアイテムって言葉が出ちゃったら、それはなんとしてもゲットしなきゃならぬ、という、ゲーマーの血が騒ぎ、

「明日は俺も参戦するぜ！」

と、息まくと、

「ご苦労さまです」

風間は余裕をかまし、手にあるハムカツパンにパクリとかじりつき、

「あ〜、うまっ！」

満足げに笑いやがった。

購買部がある集会室は、中庭を挟んだ向こう側の回廊の2階にあって、俺たち1年生の教室からはかなり遠い。

終業のチャイムが鳴ってからすぐに走ったとしても、既に団子になっているいつものパターン

。

これをどうクリアするか？

ショートカットなんて学校にはないわけで、じゃあ、単純にチャイムが鳴る前に教室を出れば
いいじゃん？という案にいきついた。

そろそろチャイムが鳴る頃だ。授業は終わりに近づき、先生の話も結びに入っている。そうい
う雰囲気を感じるのが早い生徒たちは、教科書やノートを閉じはじめ、教室がざわつきはじめる

。

――ここがチャンス！

俺はわざとノートを床に落とし、それを拾うふりをしてかがんだままの姿勢でそーっとドアに
向かった。

教室はざわついているから、先生は俺の行動には気が付いていない様子。音を立てないように
そっと後ろのドアを開き、20センチぐらいの隙間から廊下に踊り出た。

――脱出成功！

同時に終業のチャイムが鳴った。

だが、俺はすでに走り出していて、チャイムが鳴り終わった頃には集会室がある回廊に到着し
ていた。

――よっしゃあっ！！

内心弾んだのもつかの間。

くるわくるわ、あちこちから走ってくる生徒、生徒、生徒！

これはのんびりしちゃいられねえ。集会室は廊下の一番向こうなのだ。

だから俺も走った。

ダッシュもいいところで。

はあはあ言いながら集会室に飛び込むと、もう既に最前列はいっぱいだった。

――こいつら、いったいどうやって来たんだよ？まだチャイムが鳴り終わったばかりだぜ？

見ると、ほとんどがここと同じ回廊の3年で、1年は俺しかいなかった。

でもまあ、とりあえず二列目に入ることが出来たし、手を伸ばして届く位置に憧れのレアアイ
テムが並んでいる。

俺はひとつ深呼吸をしてから、前にいる生徒たちの間から手を伸ばし、ハムカツパンをつかも

うとしたその時、

「ほら、1年邪魔っ！」

後ろから襟元を掴まれて、強引に後ろに引き戻された。俺の衿をつかんだ奴は、俺がいた場所に割り込み余裕でレアアイテムを掴んだ。

それだけなら、まあ許した。ゲームを進めるのに邪魔するモンスターはつきものだ。

けど、そいつ、金を払わねえ。

購買のおばちゃんが忙しくててんでこまいのをいいことに、持ち逃げしようとしたのだ。これは反則だろう？セコイ真似すんなっての！

俺はとっさにそいつの足に自分の足を引っ掛けていた。大きくバランスを崩したそいつに、おばちゃんが気がつき、

「あんた、ちゃんとお金払ってってよ！」

と、怒鳴った。

そこにいたみんなが一瞬、そいつに注目してる間に、俺は自分の目的達成に成功！レアアイテムをゲットし、80円をおばちゃんに払って集会室を出ようとした時、

「おい、待てっ！」

また襟元を掴まれた。

おいでなすった。さっきの奴。バッチを見ると3年だった。

「なんっすかあ？」

「お前、さっきわざと足をひっかけただろ？」

「なんのことっすかあ？」

「とぼけんなっ！」

凄みをきかしてるつもりなんだろうけど、ちっともビビらねえ。

学校の購買部でかっばらいしようなんてセコイ奴は、たとえ3年だとしても恐るるに足らず！思いきり睨み返してやった。

火花がバチバチ飛び散る。

「それをこっちによこせば許してやる」

そいつは俺の手にあるハムカツパンを顎で差しながら言った。

「はあ……！？」

何で俺がこのレアアイテムをこいつに渡して許してもらわなきゃなんないわけ？

第一、何でこれが欲しいわけ？あんた、3年だろ？コメディージャー、それじゃまるで。

「いやだ」

…って、意地はる俺も俺だけど。

「1年が3年にたてつく気か？」

今度は胸倉をつかまれた。

——どーしましょう、田村くん…。

里中先輩から喧嘩のやり方は十分仕込まれてきたし、中学の時はそれなりにそういう場も潜り抜けて来たけど、ここは高校だし、ハムカツパン一個で殴り合いするのも馬鹿らしいし、それにはっきり言って、本気でやったらこいつより俺のが強いと思うし…。

って黙って考えているのを、こいつは俺が言葉も出ないくらいにビビってるって勘違いしたらしい。俺の顔を余裕で睨み、ニヤッと笑いやがった。

シャクに触ったんで、やっちゃおうかなあ…、って思った時だ。

「坂元くん、1年生相手に何やってんのよ!？」

購買部から出てきた女子が俺と坂元って呼ばれた奴の間に立って言った。

「何って、別に…。お話してただけだぜ? なあ!？」

坂元は俺に無理やり同意を求めた。

ここは、素直に同意した方が解決が早そうだと即座に判断した俺は、
「ま、まあ…」

と、曖昧に答えた。

「それならいいけど」

目がくりくりと動く、ふわふわとしたロングヘアの可愛い先輩だった。

「ほら、1年生、もうすぐチャイムが鳴るよ?」

可愛い先輩は、俺を下から見上げて（俺の方が20センチぐらい大きいわけで）言った。その仕草も可愛い。

「はい…」

「さっさと行けよ」

坂元に言われ、その言われ方がまたシャクに触ったが、俺はそのまま購買部を後にした。

あいつ、きっとあの先輩に惚れてるんだ。けど、お前にはもったいないぜ、ガマガエルめ。
まあ、そんなことはいいとして、

——ハムカツパンゲット!!

教室に戻り、さっそくレアものにかじりついた。

さぞかし美味なのだろうという期待を胸にして!

……………。

なんてことはない。

ただの調理パンだった。

俺にとっては、売れ残りのチョコデニッシュの方がはるかに美味だった。

7 スカウト

先週の日曜日、俺が住んでる北山地区の公民館でライブがあった。

このライブは毎年春と秋に地元のバンドが多数集まって行われているもので、俺はガキの頃から欠かさずに見に行っている。いつか、あのステージに俺も立ちたい、なんて夢を見ながら。

公民館ライブだからと言ってバカにしちゃいけない。舞台演出やP Aは本格的だし出演するバンドだって下手じゃ出られない。アマチュアでも実力がなきゃ出場対象に入れてもらえないのだ。

で、その公民館ライブに今年も風間を誘って行った。

「秋のライブには俺たちも出られるかな？」

「出たいよな！」

なんて、当然のように感化されて夢が膨らんだ。

けど、なんせ、俺たちのバンドはドラムとピアニストがいないわけで、音楽室で軽音楽部の活動をしていてもかなり中途半端だ。

早いところこれらの奏者を見つけ出して本格的にやりたいといろいろあたってはいたが、なかなか見つからなかった。

ところが...！

いたんですよ。

それもめっちゃめっちゃ上手いドラム奏者が身近に！

公民館ライブのトリに出場したバンドで的確なリズムを刻み、ソロを叩いて最後を盛り上げていたドラマー。

目が点になる、って言葉をよく使うけれど、俺も風間もそんな感じでステージのそいつに注目しちまった。

テクニックは言うことなし。

汗を飛び散らせて叩く姿もキマリすぎ。

それがなんと、1年C組の柏木直弥だったからだ。

正確には、この時点では名前を知らなかった。

同じ回廊にいるから顔は見たことがあったけど、全然目立たない奴だったし。

で、さっそく俺と風間で柏木に関する情報を収集した。

同じ北山地区に住んでいるが、隣の北山二中出身。C組の奴に訊いた話によると、成績優秀で趣味は読書。放課後は図書室で下校のチャイムが鳴るまで読書にふけるのが日課らしい。

ここまでの情報で、もしかしたら人違いか？って思った。

ライブでドラムを叩いていた男は読書が趣味なんていう物静かなイメージとは全く違っていたからだ。

だが、二中出身者から話を聞いて、柏木がドラムをやっているのは間違いじゃないってことがわかった。

なんでも、兄貴のバンドらしい。中学の時からずっと、あの公民館ライブには出ていたみたいだ。

こんなに近くに、しかもあんな上手いドラムを叩ける男がいたからには放っておくわけにはいかない。

兄貴とやってるバンドもあるだろうけど、ここはひとつスカウトしてみよう、ということで、今、俺たちは図書室にいる。

普段、図書室なんて場所にはまったく出入りしない俺たち4人は、静寂と厳粛な空気に気後れをし、本棚の陰に隠れるようにして、窓辺のテーブルで読書を愉しんでいる柏木をこっそりと覗いているのだ。

「なあ、どう見たって、ドラムを叩くような奴には見えないぜ？」

「だろ？俺だって信じられなかったさ。けど、ライブじゃ凄かったんだ、なあ、風間？」

「ああ、そりゃもう、上手かった！」

松山兄は信じられんといった具合に首をすくめた。

「リサーチ成功！『アンナ・カレーナ』」

柏木のすぐ横の本棚に移動して、奴が読んでいる本のタイトルを探っていた松山弟が帰って来た。

「『あんなバレリーナ』？ちょっとヤバイんじゃない？それ…」

ヤバイのはお前だよ、松山兄…。

とりあえずほっとく。

「著者は誰？」

「トルストイ、って書いてあった」

知らん。わからん。読んだことない。

風間を見ると、奴も首を振る。松山兄は聞くまでもない。

これは、本を話題にすることは出来ないぞ。

喋ったこともない相手だから、趣味の話からアプローチをかけて、序々に本題に入っていこうと思っていたけど、どっちにしても、趣味が読書ってところからして合うはずはなかったわけで…。

俺、風間、松山兄弟、どいつもこいつも読書には縁が遠く、図書室が似合わない奴ばっか。

「やっぱストレートにあたるのがてっとり早いぜ？」

風間は、本棚の陰でかがんでいた身体を起こした。

「そうだね…」

「じゃ、行こうぜ」

だんご虫のように小さくなっていた俺たちが全員で立ち上がると、カウンターにいた図書委員の先輩がおもむろに睨んだ。

場違い、だよな、やっぱり。思わず『すみません』と頭を下げたくなった。

「あの～、柏木くん」

柏木の真横に4人でぞろぞろと立ち声をかけると、柏木は顔を上げ、驚いたように俺たちを見上げた。

「な、なんですか？」

なんですか、なんて敬語を使うなよ、同じ1年なのに。

「軽音楽部に入らない？」

おいおい風間、ストレートすぎやしないか？自己紹介ぐらいしてから…、

「いいですよ」

…って、おい！？

「いいの！？」

思わず身を乗り出して聞き返しちまった。あっさりすぎやしないか？！

「俺、帰宅部だし、音楽好きだから」

柏木はサラサラした前髪をふわりとかき上げて笑った。

なんていうか、漫画に出てくるスマートで知的な美少年、といった雰囲気。背景に思いっきり薔薇の花があるような。

公民館でドラムを叩いていた人間と同一人物とはやっぱ思えない。もしかしてこいつも松山ブラザーズみたいな双子なんじゃないか？と、思ってしまう。

「いいねえ！話が早い！」

風間が手を叩いて叫ぶと、柏木はニッコリ笑った。

背中にまた薔薇の花が見えた。

「柏木くん…、このあいだ公民館でドラム叩いてたよな…？」

俺は、確認した。確認せずにはいられなかった。

公民館での柏木の背景には優雅な薔薇じゃなく、激しい稲妻が光ってたのだ。

「あれ？田村くんたち、来ていたの？」

…やっぱ本人に間違いなし、だ。

「実は軽音楽部ってのは表向きの名前で、裏で俺たちバンドをやってるんだ」

「へえ～、そうなんですか」

柏木は開いていた『アンナ・カレーニナ』をパタリと閉じた。

「遠回りな言い方しちゃったけど、柏木くんのドラムに惚れたわけ。だから、俺たちと一緒にバンドやってくれないかなと思って…」

「あ、いいですよ」

...っていいのかよ、おい！

兄貴たちとやってるバンドもあるだろうに。

っていうか、こいつ、テンポがめちゃくちゃ早い。

ま、ドラマーだし、ノリがいいって言えばそうなんだろうけど、見かけとかけ離れすぎていて違和感バシバシ。

「よっしゃっ！ドラマーゲット！」

松山兄が大げさなガッツポーズを決めた時、

「そこの1年生たち、静かにしてください。ここは図書室です」

カウンターにいた図書委員に単調に冷ややかに注意された。

「早いとこ、ここを出ようぜ？俺、さっきから便所に行きたくてしょーがないんだ」

松山兄は図書委員を気にしながら両手でケツを押さえてもじもじし始める。

「本の匂いを嗅ぐと、どーもケツがムズムズしてさあ...」

何てお下品な！薔薇の柏木くんの前で！

そういうダメな子には肘鉄をくれてやる。

とうとう額に青筋を立てた図書委員が、いて一よとますます騒ぐ兄をつまんで室外に捨てると

、

「そんじゃ、話の続きは音楽室でやろーぜ」

風間もさっさと歩き出す。

そのあとを、柏木もついて行こうとして、

「あ、裏のユニット名は何ていうんですか？」

と、唐突に立ち止まった。

そういや、まだ決まっていなかったんだ。

「何にするかなあ...？」

「ブックキャッスル、なんてどうですか？」

読書好きな柏木が思いつきそうな名だな、と思ったけど、語呂もいいし呼びやすいし悪くない。

「いいじゃないか、それで！決まりっ！それにしよう！」

部長代理の風間のひとことで、俺たちのユニット名はたった今、『ブックキャッスル』に決定した。

しかし、なんてあっさりしたスカウトだったんだろう....。

いいのか？こんなんで？

「ブックキャッスルってさあ...」

松山弟がつぶやいた。

「ん？」

「『本城』、ってことだよな...？」

.....o

そうじゃん....。

本好きがどーたら、じゃなくて校名そのままだったのね....。

「なんか、ダサくねえ...？」

と、松山弟。

.....柏木って変。

8 ピアノ

こないだ生徒会の予算委員会があり、部長代理の風間といつの間にか副代理に任命されてた俺はその会議に出た。

本城高校の各部の代表が生徒会会議室に集まって、あらかじめ出しておいた希望の予算をなんとかして勝ち取る会議。前年度の実績や部員数なんかで大きな幅が出る。

我が軽音楽部は今まで活動っていう活動をやってなかったらしいから実績なんてないし、部員数も毎年ギリギリ。今年こそは廃部だろう、なんて毎年言われている。

で、今年もギリギリの部員数しかない軽音楽部に与えられた年間予算はたったの2千円だった。

ちなみに遠慮しながら出した希望額は2万円だったのだ。

「に、2千円！？一桁間違ってるでしょ、それ？」

と、風間。

「いえ、間違いありません」

「2千円で何をしろって...!？」

風間は代表代理として不服申し立てをした。

が、

「文句は実績を作ってから言ってください。足りない分は部費を集めてください」

予算委員長に冷たく言われ、引き下がるしかなかった。生徒会長からは年間予定表ってのが配られて、各部が一年を通してどんな活動していくかの予定を組まなきゃならなくなった。運動部なんかだと、いついつに大会があって、いついつに練習試合を何本こなして、というような大まかな予定だ。

「実績ねえ...」

予定表を見つめながら風間は呟き、

「んじゃ、作るか！そんで来年の予算はバッチリいただきだぜ！」

と、スラスラと予定表に書き込んだ軽音楽部の年間予定はこうだ。

9月――（体育祭）後夜祭コンサート。

11月――文化祭コンサート。

3月――卒業生送別会コンサート。

その他の月は活動日に従い練習。

「9月の後夜祭って間に合うか？うちにはまだ主要パートがいないんだぜ？」

ピアニスト――。

これはなんとしても早く探さなくてはいけない。

後夜祭文化祭だけじゃなく、秋の公民館ライブにだって出たいし、ぐずぐずしてられない。

今まで探す探すと言いながらも大々的な募集活動をしてなかったんで、柏木をゲットした時のように、ここは本気の本気を出してピアニストゲッターになることにした。

ピアノを習ってるってやつはクラスに何人かいるもんだ。

『ピアノが弾ける人は放課後音楽室へ来てみよう！男女問わず！とりあえず来てみよう！とにかく来てみよう！——軽音楽部』

松山兄が書いたこの張り紙を1年の各クラスに張りつけて今日で3日目。

昨日も一昨日も『小学校の時からピアノ習ってますけど...?』という女の子が放課後の音楽室に、とにかく来てみた、という感じでやって来た。

けど、一昨日の子は、軽音楽部の実態がバンドだと知るやいなや、

「バンドはちょっと...」

と、帰っちゃった。

昨日の子は、

「バンド？面白そう！」

なんて、かなり乗り気になってくれた。オリジナル曲の楽譜を渡して弾いてみるように頼み、これもかなり上手く弾いてくれたんで、これで決まりだな！と思ったけど、風間が、

「せっかく来てくれたのに悪いね～」

断っちゃったのだ。

「もったいないっ！」

松山兄はぶうぶう喚いたが、風間は、

「焦んなくていいよ...」

と、呟いて涼しい顔で笑った。

今日は、松山兄弟は中間の英語で兄弟仲良く赤点を食らったために補習、柏木は委員会活動、——ちなみに美化委員会で花壇の手入れらしい——、がありそれぞれ欠席。

歌雑誌を見ながら9月の後夜祭で演奏する曲の選出をしたり、オリジナル曲の調整をしたり風間とふたりきりの部活動だ。

こうやって具体的に目標ができると、やっぱり早く形を作りたいと思う。

それは俺だけじゃなく、松山たちも思っているだろう。

探すのは難しいだろうと思っていたドラマーもメンバーに加わり、あとは鍵盤楽器だけ。ピアニストが揃えば『ブックキャッスル』は始動できる。

「昨日の子、上手かったけどなあ...。楽譜見てスラスラ弾けたし...」

「ただ単に上手く弾けりゃいいってもんじゃないぜ。ブレイクしたい時、リットしたい時に感覚（センス）ズレてちゃ可かしいし」

「最初からうまく合ったりはしないだろ？やってくうちにだんだん合ってくるもんじゃないか？」

「そうかもしれないけど、昨日の子には無理だって思った。何でかって聞かれると困るけど、なんていうか...、インスピレーションが来なかった」

——インスピレーション...。

確かに、風間はこれが鋭い。

音楽そのものに関しての感覚も俺たちとはどこかが違う。

聖なる域って言っちゃ言い過ぎかもしれないけど、そういう凡人離れしたものが風間にはある。

「ピアノ...はさ、かなりデリケートなフィーリングってやつが大事だと思うんだよ、俺」

風間はピアノを開き、長いしなやかな指で、ぼろんとキレイな和音を弾いた。

「楽譜見て完璧に弾くよりも...感覚で弾けるっていうか。言葉じゃ上手く言えないけど、ピアノにはそういうもんが欲しいんだ、俺」

「音楽学校じゃないんだし...、なかなか最初からそういうピアニストには出会えないんじゃないか？」

理想は理想。

でも、とりあえずここは本城高校の軽音楽部。

で、バンドも『ブックキャスル（本城）』。

寄せ集めでやっていくしかないんじゃないだろうか、と思ってるよ、

「ピアニストは...、いないんじゃないか？」

風間は言った。

「え！？」

いないのかよ？！

鍵盤楽器のリードはかなり重要だぜ？

「もちろん、感覚の合うピアニストが現れれば話は別。けど、無理して探さなくてもいいって。田村のリード、太郎のベース、次郎のギター、柏木のドラム、そんで俺のボーカル、これだけで十分だよ、今のところはさ！」

風間は言い切った。

昨日の子のピアノのどこがいけないのか、はっきり言って俺にはわからない。けど、風間がそう言うならそれでいい、って思った。俺は風間の感覚を信じている。

「俺がしっかりリードすりゃいいってことだな...」

「そういうことです、田村くん！」

風間はニカッと笑う。

ピアノに対して、何かを強くこだわっている風間なんだろう。言葉で説明のできないこだわりっていうのは、多かれ少なかれ誰にでもある。

「フィーリングかぁ...」

「あ、うんの呼吸、とも言うのかなぁ？」

あ、うんの呼吸ね。

柏木には最初からこれがあったなぁ...、呼吸良すぎるってくらいに...、って思った時、ガラッと扉を開けて当の柏木が入って来た。

「美化委員会終了で一す！」

「待ってたぜ〜！」

うん。

この呼吸だな。

...ってことは、そろそろ奴らも....、

「やっと終わったぜ、補習...」

「英語、わっかんねえ〜！」

思った通りで思わず顔がニヤケちまった。こうもピッタリ合うと気持ちがいいもんだ。

「とりあえず、ピアノなしのこのメンバーでやってくことにしたから」

松山兄弟と柏木に向かって言うと、奴らは俺と風間を見比べて、

「じゃ、教室の貼り紙は外しとかなきゃ」

「んじゃこれから行ってくるか！」

音楽室を出て行った。

「俺たちも行こうぜ、田村！」

「ああ、そうだなっ！」

5人揃って貼り紙を外しに1年の回廊に向かう時、風間が振り返り俺にウィンクした。

爽やかに、嬉しそうに。

たぶん、奴も俺と同じことを感じたんだろう。俺も、あ、うんの呼吸でウィンクを返した。ちょっと両目を瞑っちまったけど...

松山兄弟と柏木、そして風間と俺。

とりあえず、この5人で始まる『ブックキャッスル』なり！

頭は悪いが丈夫だけがとりえの松山兄が熱出して欠席した日、

「どーせ、スケベなこと考えながら腹出して寝てたんだろ」

と、笑った風間だった。

「大当たり！」

松山弟も手を叩いて病床の兄を笑う。

――なんてヤツらなんだ…。

いくら本当のこととは言え、それじゃあまりにも松山兄が可哀想だ…、と思っていたら、友を笑った罰が当たったのか、今日は風間が熱出して休み。

今朝、俺んところに今にも死にそうな声で、

「2、3日無理っぼい…」

と、ヤツから電話があった。

「どーせ、スケベなこと考えて腹出して寝てたんだろ」

いつかの風間と全く同じ台詞を言って笑ったのは松山兄。

「無い無い～！誰かさんと違うって！」

松山弟が大げさに右手を振って風間を弁護すると、

「そうだね～。風間くんがスケベなこと考えたり腹出して寝るなんて、ちょっと想像出来ないね～」

と、柏木も同意した。

いや、風間だってスケベなこと考えることもあるだろうし、腹出して寝てたかもしれないぜ。

けど、想像できないって言えばその通り。

あいつが俺たちという時以外にどんな生活しててどんなことを考えてるのか、知りたがっちゃいけないと思わせる何かがヤツにはあるのだ。

風間とは中学3年の時に同じクラスになって以来の付き合いだ。

ヤツの家は母子家庭でいろいろと複雑な事情があるらしい。オヤジさんはアメリカ人らしいけど、風間は一度も会ったことないって言っていた。

家のことを訊かれたり話されたりするのは嫌いだってこと、中学の時からヤツを見てりゃわかるし、別に聞きたいとも思ってないから、友達やってるわりにはヤツの環境については何も知らない俺だったりする。

「お見舞いとか行かなくていいのかな？」

柏木が優しいことを言うと、

「行かねえでいいだろ、そなの！俺が休んだ時、誰か来てくれたかよ！？」

松山兄がわめいた。

「お前は腹出して寝てたんだから自業自得だろ…」

松山弟は兄に冷たい。

「風間が腹出して寝てないって証拠でもあんのかよ!？」

かまうと松山兄はムキになる性質なんでとりあえずほっとく。

ブックキャスルがピアニスト無しで始動して1週間。

9月の後夜祭に向けてようやく選曲が終了し、あとは風間が作っている俺たちのテーマ曲が完成すればいよいよ練習開始だ。

みんな、早く進みたくてうずうずしてるって時に、松山兄について風間の風邪。

「みんなで行ってもしゃーないから、俺が様子を見てくるよ」

風間んちは俺んちからもさほど遠くないが、そういう事情で俺は今まで行ったことがなかった。

でも、今朝の死にそんな声も気になったんで帰りに寄ってみることにした。

駅のそばの古い賃貸マンション。

風間の家はこの3階らしい。ポストに小さな手書きのネームプレートがあった。ここに、風間はおふくろさんと二人で住んでいるのか…。

風間のおふくろさん。

昔は歌手だったらしいけど、今は保険屋だか化粧品屋だかのおばちゃんをやっているらしい。

俺は会ったことがないが、ひとりですっと風間を育ててきて、世間からはいろんなこと言われて、中学の時は学校からもいろんなこと言われて大変だったろうなあ…と、なんとなくその風貌を想像した。

で、風間んち。

インターホンを鳴らすと、

「…はい？」

掠れた返事のあとに、ゲホゲホッ!と咳き込む声が返ってきた。風間だ。

「あ、風間?俺、田村だけど」

インターホンの向こうで、一瞬 う…と詰まるような空気を感じた。

「あ、田村あ?どうしたあ？」

また、ゲホゲホッ。

「様子見に来たんだ。大丈夫かよ？」

「あ、ああ…、さんきゅ…。今、あける」

しばらくして、ドアのロックが外れる音がして風間が顔を出した。髪はボサボサ、目はくぼみ、顔がほてっている。いつもの涼しげな雰囲気はどこへやら。こりゃ、相当重症なようだ。

「上がれよ…」

風間は俺を中に入れてから再びドアを閉めた。

玄関から短い廊下を歩いて入った部屋には…、

「ピアノ…？」

入り口の真正面にピアノがあって、俺はちょっと驚いた。風間がピアノを弾くなんて話は聞いたことがない。

「あ…、これは、おふくろの…ピアノで…」

風間はまたゲホゲホと咳き込んだ。

「おふくろさんのピアノかぁ。おふくろさんってジャズシンガーだったんだよな？」

「…ああ」

風間はぶっきらぼうに言ってまた咳き込んだ。やっぱ、あんまり触れて欲しくない事情のようだ。

「大丈夫かよ？」

「ダメ。こんな風邪ひいたの、10年ぶりぐらいだぜ……」

そう言って風間はソファーに転がった。ほんと、辛そうだ。

「おふくろさんは？」

「買い物…。俺に食わせるって…、ヨーグルト買いに行った」

「ふーん…、ヨーグルトねえ…」

ヨーグルトなんて、懐かしい匂いと響きがして、なんとなく、ほのぼのとした。こんなにデカイ息子のために、ヨーグルトを買いに行ったおふくろさんって…。

その時、

「ただいまっ！」

明るい声が弾けて振り向くと、

「………」

誰だ？

スラッとしてて、栗色の長い髪を下の方だけ軽くウェーブしてて、色が白くて若くて美人。

まさか、おふくろさんじゃないよな？

「あら？響のお友達？」

呆然と見とれちまって、すぐには返事が出来なかった。

「……どうも。田村です」

「ああ！田村くんね！バンドの？」

「は、はい…」

保険屋のおばちゃん…っぽくない。

…ってというか、かーちゃんには見えない！若い！美人！素敵なおねーさまって感じだぜ！？一瞬、俺んちの昼寝おばばの顔がよぎって泣きたくなった。

「音楽っていいわよね～？バンドなんてカッコイイ！自分の息子がそーゆーのやるなんて嬉しいなあ！田村くんのパートは何？ドラム？ギター？」

風間のおふくろさん（って言っちゃ悪い気がする...）は、間髪入れずに話し掛けてくる。ポンポン飛び出す言葉には、心地よいリズムがあって声もキレイ。

「俺はギターです」

「ギターかぁ！カッコイイなぁ！」

まるで少女のよう...。

想像していたおふくろさんとはまるで違う風間のお母さま。

「ペラペラ喋ってんなよ...」

風間はお母さまに向かって無愛想に言った。

「あ、響、ヨーグルト買ってきたよ？」

「...あとでいいよ...」

風間は、はぁ...、とため息をついてからしんどそうに立ち上がり、ピアノの譜面台に立てかけてあった一枚の楽譜を俺に差し出した。

「これ出来た...。俺、明日も無理っぽいから、悪いけど田村コピーして奴らに渡してくれる？」

風間が作った曲のバンドスコアだった。俺たちが待ちに待っていた曲。ブックキャスルのテーマ曲だ。

「『光の城』かぁ！いいタイトルじゃない。『本の城』じゃなくてよかった！」

楽譜を目で追うとアップテンポの明るい曲だ。

ピアノパートがないのがちょっと寂しい気がしないでもないけど...。

「どれどれ？」

お母さまが俺が見ている楽譜を覗きこんだ。

ふわっと柔らかい、いい匂いがして、また、無意識にうちの妖怪と比べちまった。

ふんふんふん...

お母さまは楽譜を目で追ってメロディを口ずさんだ。楽しそうに、嬉しそうに。

「いい曲じゃない？うきうきしてくるね～。この曲がバンドのテーマ曲なんだぁ？」

このおふくろさん、凄い。

楽譜を見ただけで音を完璧に拾ってるし、鼻歌なのにやたら上手い。さすがは元シンガー。

「でも、ピアノパートがないのね？どうしてかな？」

「おふくろには関係ないだろ！」

おっかない顔をした風間はイライラしたように言うと、またゲホゲホッと咳き込んだ。

何もそんな言い方しなくてもいいだろが...。それじゃおふくろさんが...

「え？響、何怒ってるの～？」

...全然堪えてないあどけない笑顔。

「ねね、響は何？ピアノ？ボーカル？」

「俺が...、ピアノ弾くわけないだろが」

風間はつつけんどんに言って俺の顔を見た。目がなんか言いたそうに泳いでる。

「あら、なんで？ピアノがあった方が素敵じゃない」

「...ったく、うるさいなあ。いいだろ、何だって！」

風間はさらにつっけんどん。早くこの話題を終わらせたいといった感じだ。

「ヨーグルト、食べる？」

おふくろさんはニコニコ笑いながら唐突に言った。明るいというか、天然っていうか....。

「...だから、あとでいいから！」

風間はまた大きなため息を吐く。さっきよりも明らかに具合が悪そうなので、

「あんまり長居してもなんだし、これで...」

俺は退散することにした。

とりあえず楽譜はもらったし、風間の様子も...かなり悪そうだけど...見たし。

「また遊びに来てちょうだいね、田村くん！」

おふくろさんはさっきのメロディをまた、ふんふん、と口ずさみながら買いものしてきたままの袋に入ったヨーグルトをテーブルに用意しはじめた。よっぽど風間に食わせたいんだな。

「...田村あ。今日のこと全て見なかったことにしてくれな...」

玄関まで見送ってくれた風間がうんざりといった具合で言った。

「なんで？いいおふくろさんじゃないか。美人だし！」

「...毎日あれだと疲れる...」

確かに。

わかるような気がしないでもない。

でも、俺にしてみりゃ羨ましい限りのおふくろさんだ。

かつてのジャズシンガーは、今は脳天気な保険屋、または化粧品屋のおばちゃん。

しかし、あんな調子で保険の外交をやっているとしたら、ちょっと怖いもんもあるけど....。

「ま、大事にして早く復活してくれよ！おふくろさんのヨーグルト食ってさ」

「...だからあ！」

風間 響のイメージ、崩れたり、だな。

でも、いいよ、風間のおふくろさん。

俺もヨーグルト、無性に食いたくなっちゃった。コンビニで買って帰ろっと。

10 恐怖の用務員ポッター

「やべっ！ 〃線、まで消えちまった……」

黒板前の教壇の下にうずくまっていた松山弟が、ひょっこりと顔を上げて言った。

「マジかよ…。だからお前は不器用だっての！」

兄はやれやれ、という顔を弟に向けて言い放ち、

「どれ、見せてみるよ？」

風間は教壇の上から向こう側の下に隠れるようにして小さくなってる松山弟を覗きこんで手を伸ばした。

風間が手にしたのは黒表紙の出席簿。それを開いて、

「あ～！ こりゃバレるって！」

風間はそれを俺によこした。

1時間目の出欠のマス。

風間 響、田村優作、松山太郎、松山次郎の名の横に「／」が引かれていたのを、弟が砂消しゴムでカリカリと消していたのだ。

俺たち4人と柏木は毎朝同じ駅から電車に乗って一緒に登校している。だいたいマジメに学校まで来る。

けど、今朝は暑かった。今日から東京都は夏になったようだ。一応冷房が効いているはずの電車も朝のラッシュ時はまるでその効果がなく、駅についた時はみんな汗ででろでろだった。

「あちーよ、あちー」

松山兄は喚くし、その声を聞くのもうざったいくらいに暑かったのだ。

で、駅の構内にあるドトール珈琲の、自動ドアの向こう側の、涼しげな空気の誘惑に負け、汗がひくまで休んできた。だいたいいつも予鈴が鳴るギリギリの時間に教室に滑りこんでいる俺たちだから、ドトール珈琲で休んじまったらもちろん遅刻。どーせ遅刻するんなら、1時間目の古文はおサボりしてしまおう、ということで、「／」がついたってわけだ。

けど、5時間目の英語が始まるまでには、どうしても「／」を消したかった。英語の権田センセがこの「／」を見たらきっとツッコミを入れてくる。権田はネチネチとイヤミを言うばかりでなく、やたらと話が長いし、ちょっとしたことで職員室に呼び出すしで、出来ることなら関わりたくないセンセなのだ。

「砂消しで消しちゃおうぜ？」

と、言い出したのは風間。

「じゃ、俺がやる」

と、引き受けたのが松山弟。

で、昼休みのこの時間、弁当を後回しにして教壇の下に隠れてコソコソと目立たないように出席簿に細工していたら、「／」だけじゃなく、周りの 〃線、まで消しちまったというわけだ。しかもよく見ると…、

「俺のそこじゃん！！」

「俺んとももしっかり線が消されてる。これじゃかえって不審を買うぜ...」

風間は、参ったなあ...、と松山弟を睨んだ。

「悪いな、風間、田村...」

弟は頭をポリポリかきながら言った。

「ゝ／、だけってのはどーもうまくいかないな。俺と太郎はやっぱこのままにしとくわ...」

「きったねえ！」

俺と風間の名のところだけ線が消えてるなんてどう見ても不自然で、これじゃ余計につっこまれるのは必至だ。まだ「／」がついてる方がマシだ。

「じゃ、俺が修正してやる」

松山兄がペンケースからボールペンを出し、俺の手から出席簿を取って言った時、俺と風間は顔を見合わせた。この兄弟にまかせたらとんでもないことになりそうだ。

「い、いい、いい！俺たち自分でやるっ！」

俺と風間は兄から出席簿を奪い返し、弟と入れ替わって教壇の下にうずくまった。

暑いし腹へったし、何でこーなるわけ...。とほほ、だぜ全く...。

「田村、曲がってるぜ？」

必死になって線を書き足してる俺に、風間は横からチャチャを入れる。

「俺じゃなくて定規が曲がってるんだよ」

「そんなバカな話があるかよ...。田村、定規使えないのか...？」

「ごちゃごちゃうるせえなあ...。だったらお前がやれよ」

「ほら、曲がった！」

「これぐらいわかんないって...」

なんだかんだ言いながらもなんとか新たな線を書き足すことに成功して、俺たちはようやく昼メシにありつくことが出来た。

けど、

――あついー.....。

窓を全開にしても風ひとつ入ってきやしない教室。

「アイスが食いたいっ！」

購買部じゃアイスは売っていない。校庭を突っ切ったフェンスの向こう側の牛乳屋までいかないと買えない。

けど、校門から行ったんじゃ、校庭の周りをぐるっと一周しなくちゃならないし、余計に汗をかきそう。フェンスを乗り越えればすぐ目の前にあるアイスボックス！

まだ昼休みは20分ある。

アイスを食う時間は十分にある。

フェンスを乗り越えればっ！
「俺、行ってくる！」
さっさと弁当を平らげた。
「じゃ、俺にも買ってきて」
と、風間。

――あまいねっ！

「使えばなんてやーだね！自分で行けよ」
「田村くんのケチ...！」
暑いと人間ケチになる、かどうかは知らないが、そういうもんさ。
別に4人で行動しなくてもいいのに、こーゆー時は必ず松山兄弟もついてくる。そんで、どーゆーわけか違うクラスの柏木まで誘ってる。
校庭では、くそ暑いっていうのに元気な奴らがバレーやバスケットをやっている。その間を突っ切って、俺たちは自分たちの背の2倍ほどのフェンスによじ登った。

ピーーーッ！！

遠くの方で甲高い笛の音がした。
最初は校庭で遊んでる奴らがなんかやってるのかと思って別に気にしなかった。
けど、

ピーピーピーーーーッ！

笛はしつこく鳴りやまない。
そのうちに、
「フェンス、禁止ッ！」
「上履き、禁止ッ！」
と、喚く声とピーの音が交互に聞こえ、振り向くと...、
「何だ、あれっ！？」
松山兄がギョッとして固まった。

灰色の作業服を着た太ったオヤジが、手に持っている箒を振り上げながら、ノシノシと校庭を走ってくる。
「お前たちっ、何年何組の誰だっ！？」
太ったオヤジは箒で俺たちを差して喚いてる。
「フェンス、禁止！」

「上履き、禁止！」

オヤジはもう一回同じことを喚いた。

フェンスにつかまったまま茫然としていた俺たちだったけど、

「わああああ！！」

という、松山兄の叫び声で我に返った。

こりゃ、早く向こう側に行かないとヤバイッ！本能がそう信号を出した。

一番最初に向こう側に降りたのは風間。次に俺、そして弟、柏木と続き、兄は…、

「早くこっち来いよ！！」

背後から迫ってくる謎のオヤジに怯えた兄は、焦って手が滑ったのか、一旦また下まで戻っちまったらしい。

ピーーーッと鳴り響く笛。

走る巨漢。

――マジ、怖ええっ！！

「太郎、早く早くっ！」

さすがの弟も、こんな時は本気で兄の心配をしている。

オヤジの箒がバシンッとフェンスを打ったのと、松山兄がこっち側に飛び下りたのが同時だった。

金網を挟んであっちとこっち。

至近距離で互いの顔を見つめ合った俺たちとオヤジ。

「わけわかんねえ！！誰だよ、おっさん！」

松山兄は歩道に座りこんで喚いた。

誰だよって…、用務員のおっさんだろーが、どう見ても。

ただ、わかんないのは、どうして用務員が箒を振りかざして追いかけて来たのかってことだ。箒ってのは掃除用具でフェンスを打ちつけるもんじゃねーだろが？それともお仕置きグッズなのか？

「フェンスを乗り越えて校外に出るのは禁止！上履きで校外に出るのも禁止！」

オッサンは金網の向こうで怒鳴った。でも、フェンスを飛び越えてまで俺たちを捕まえようという気はないらしい。

「行こうぜ」

腕の時計を見ながら時間があまりないことを悟った風間は、まだフェンスの向こうで怒鳴ってるオッサンを見無視して牛乳屋に向かって歩きだした。それに俺たちもぞろぞろと続く。オッサンもあきらめたのか、再び巨漢を震わせて校庭を走って戻って行った。

さっさとアイスを買って、俺たちは学校へ戻ることに。

またフェンスを越えてあいつに見つかったら面倒だし怖いから、仕方なく校門から帰る事にしたんだが...

——いるじゃねーか！オッサン！！

さっきのお仕置きグッズで、校門の外を掃いている。

今まで別に気にも止めなかったけど、確かに毎日学校の周りをうろうろしてる用務員のオッサンだ。まさか、あんな怖い本性を隠していたなんて思わなかったぜ...

「どうするよ...？」

松山兄が完全にビビった顔をして言った。

「しょーがない。またフェンスを乗り越えようぜ」

オッサンに見つからないように縮こまりながら俺が言うと、

「またあっちまで戻んのかよお～、めんどくせえ」

と、風間は文句をたれた。

フェンスはほぼ、この反対側。もうあと5、6分で予鈴が鳴るし、せっかく買ったアイスも食う暇もなくとけちまう、というのが風間の言。

「けど、これじゃ入れないだろ...」

オッサンはしばらく校門の前からどきそうもない。マジメに隅から隅までを掃いている。

俺たち5人は仕方なく、再びフェンスまでの道を走った。

牛乳屋まで戻った時、風間は歩道にある赤いコカコーラのベンチにドサッと座りこんだ。

「こいつが跡形もなく溶ける前に、俺はここで食ってく！」

それもそうだな、と、俺たちは次々とベンチに座り、半分溶けてでろでろになったアイスを舐めまわした。

けど、次は権田の英語。

出席簿のこともあるし、このままサボるのはヤバイから大急ぎで。

ベタベタした手のままフェンスをよじ登ってる間に予鈴が鳴り、再び校庭を突っ切って教室に戻った時に本鈴が鳴った。

席についたとたんに汗が噴出した。

せっかくアイスを食べたのにちっとも涼しくならず、余計に暑くなっただけ。下敷きでいくら扇いでも全然効果無し。汗は後から後から噴出してくる。おまけに、

「風間、田村、松山のふたり、あとで職員室に來い！」

権田が出席簿を見ながら怒鳴った。

「／」がついている松山兄弟だけでなく、俺と風間も呼びつけられたってことは、砂消しとその後の修正を見破られたってことだ。何だったんだよ、あの苦勞は...

「田村くんたち、何やったのよ...？」

隣の小早川が小声で訊いてきたが答える気にもならなかった。

ものすげえ脱力感。

放課後、4人で権田のところに行って、40分の説教をくらって、おまけに単語の特別課題を出されて、文字通りへろへろ。

東京が夏になった日は最悪の1日だった。

「あのオッサンはポッターってあだ名で、本城高校の名物用務員なんだぜ。挙動不審の生徒をとっ捕まえて箒でケツをぶっとばして、センセに突き出すことを生きがいにしてるんだ。お前たちも気をつけろよ。ま、俺はまだ一回もつかまっちゃいないがな！」

帰りがけに昇降口で出会った里中先輩が、廊下の蛍光灯を取り替えている用務員を指差して教えてくれた。

――もっと早く教えて欲しかったぜ.....。

「ふーん。そうだったのか...」

風間はニヤッと笑った。

「んじゃ、闘いがいがあるってもんだ！」

「絶対に負けねえ！」

松山兄も気合を入れた。

その時、蛍光灯の付け替えが終わったポッターが俺たちに気づいた。

「お前らは昼休みのっ！そこを動くなぁ！」

ポッターは廊下から外した古い蛍光灯を真っ直ぐピンと張って俺たちを差し、のしのしどたどたと走って来た。

まっさきに逃げ出したのは松山兄。

そりゃ、もう、疾風（はやて）の勢いで校門を飛び出したと思ったら、そのまま通りを横切って行った。

絶対に負けねえ！とはこういうことだったわけね....。

でも、そこを動くな、と言われてハイ、わかりました！ってお仕置きを待つバカもいないんで、俺たちも松山兄の真似をして逃げ出した。

来週から期末試験がはじまり、その後は終業式まで試験休み。それで、その後はもちろん夏休みに入る。部活動が出来るのは今日が今学期最後。

やっとスタートができたブックキャスルだけど、いくらアコースティック系のおとなしめ、と言ったってバンドはバンド。ドラム叩きのギター鳴らしのやっていたら、その音はもちろん音楽室の外にもれる。始動初日にはさっそくセンセが飛んで来て、うるさいだのなんだのと文句をつけられた。その時は、「すみません。なるべく静かにやります」なんてみんなで下手に出て素直ないい子をやって、それから、なんとかセンセの機嫌を損ねないように、練習場を取り上げられないように、廃部なんてことにならないように、「今日のネクタイいいすねえ！さっすがセンセの彼女センスいいなあ！」なんて、心にもないことを言っておだててみたりしながら、とりあえず今学期は無事に来た。夏休みも週に二回は音楽室を借りられることになっているし、体育祭までの首は繋がっている軽音楽部だ。

で、今日は今学期最後ってこともあるし、来週からはじまる試験への愁いをふっとばす意味もあって、いつもよりかなり音量高めの俺たち5人の練習風景だった。

――ヤバイぞお…。

そろそろ権田あたりがすっ飛んで来るんじゃないか。暑いから窓は全開だし、音楽室のナナメ下が職員室ときている。この大音量が響いていないはずはないよな…。

とか、思いながらもけっこうノリノリで。

風間が作った俺たちのテーマソング『光の城』は、おだやかなリズムの曲ではあるが、一旦演奏がはじまるとどんな感じにもアドリブが出来て、それがまた5人それぞれがピッタリ合ったりするもんだから気持ちいい。どーしたってハイになってしまうのは仕方がないことだ。

ま、センセがやってきたらまたおだて作戦で切り抜ければいいのか、と思ってた時に、突然後ろのドアが勢いよくガラッと開いた。

「ごめんなさいっ！」

真っ先に声に出して謝ってた田村くんです…。

言ってからこっぴどくした。

廊下から飛び込んで来たのはセンセじゃなく、ひとりの女子だったからだ。

女子は俺たちのことなどまったく眼中にない…、というか、ここが音楽室だってことさえもたぶんわかってない様子で、今、自分が開けたドアを再び勢い良く閉め、内側にへばりついて耳をドアに押し当て、外の様子を伺うことに全神経を集中させている。中途半端に演奏を止めていた俺たちは、全員でその女子に注目した。

「あのお...、どーしたんっすかぁ？」

と、松山兄が声をかけると、女子はこっちを振り向いて、
「しーーーーっ！」

と、立てた人差し指を口に当てて言った。

――あれ？この人...？

しーーーーっと、松山兄が彼女の真似をして俺たちを見回しながら言うと、風間や柏木たちは顔を見合わせて、うんうんと頷きながら彼女の後ろにそっと近づき、同じようにドアに耳を当てた。

ドアの外を行ったり来たりしていた足音がパタパタと去って行き、やがて階段を下りて行ったのを全員で確認すると、何だかわけがわからないくせに、ほんと胸を撫で下ろす俺たち5人。彼女も、フーッと息を吐き、しゃがんでいた体をスクッと立ち上がらせた。

その仕草は華麗で優美で、彼女のロングヘアーはふわふわと踊っていい香りが漂った。

よからぬ空気を察知して松山兄を見ると早くも目がハートマーク。いや、兄だけじゃなく、柏木もそして硬派の弟までもがぼけ～っとしたまなざしを彼女に向けている。

「もうっ！」

突然、彼女は俺たちに向かって、口を尖らせて膨れた。

松山兄が、`シェ～！`の格好で固まっちゃった。みんなして注目していたのが気に入らなかったのか？

「なんで私がこそこそ隠れなきゃならないのよっ！」

彼女は俺たちに向かって言う。

っていうか、たまたま俺たちの方を向いているけれど、目は5人の誰を見ているわけでもない。俺はこの人に会うのは2回目だ。

以前、購買部で坂元って3年とやり合う寸前に、間に割って入って来た先輩だ。

「あの、先輩？」

俺が声をかけると、彼女はたった今俺たちに気がついた、といった感じで、

「あ！ごめんなさいね！部活の邪魔しちゃったかな？」

俺たちひとりひとりに視線を流し、それが俺のところに来た時、

「あれ？キミはいつかの1年生？」

首をかしげながら言った。

――めろめろ～...！

前に会った時も思ったけれど、この人は仕草がなんとも言えずに可愛いんだ。1回会っただけの俺を覚えてくれていたなんて、田村くん感激ですっ！

「田村あ？知ってんのか？」

兄が俺を肘でつついた。

知ってると言えば知っているけど、知らないって言えば全然知らない。ただ、兄たちよりも早く出会ってたってだけのこと。名前も知らなければ3年の何組かってことも知らないし。

「ごめんね。もうちょっとここにいてもいい？今出ていきたくないんだあ。まだその辺うろうろしてるかもしれないから」

先輩は両手を合わせて首をすくめて言う。

こーゆーポーズがこんなにも似合う女の子に俺は今まで会ったことがない。可愛さが身からにじみ出ているっていうか、それも全然ブリッコって感じじゃなく、あくまでもナチュラルに。

「も、も、ももももちろん、いいすよ！！」

ろれつが回らない口調で松山兄が答えた。

「ありがとう。私はここに勝手にいさせてもらうから、キミたちは部活やっててね」

先輩はニッコリ笑いながらも、どこか憂いた顔をしながら言った。

突然飛び込んできたのは、きっとイヤな奴から逃れるためなんだろう。もしかしてあの坂元か...？

って思っただけで、俺の腹わたは煮えくりかえった。あいつがこの先輩に惚れてるってのは前回の一瞬でもわかったし、この先輩は、坂元が逆立ちしたところでぜんっぜん似合わないってのもわかってるし。

「んじゃ、とにかく練習を再開しようぜ？もう時間もあんまりないし」

みんなが先輩を見てぼ～っとしてる中、ひとりだけ冷めてる風間が言った。

「ほんと、私のことは気にしないで、どーぞどーぞ」

先輩は俺たちから離れた一番後ろの席に座った。何もそんなに遠慮しなくてもいいのに。

「俺、だんぜんはりきるっ！」

松山兄はさっきからずっと目がハートマークになったままだ。こりゃ、完全一目惚れってやつだな。でも、今日ばかりは兄の気持ちがわかる。この先輩がここにいるだけで空気が違うんだ。

突然迷い込んできたアゲハ蝶――。

ヤバイ、ヤバイ。

心の中で警報機が鳴ってるのがわかる――。

こんなことってあるんだろーか？

相手は3年生だし、名前も知らないし、会ったのだって俺は二回目だし、たいして話をしてもないのに。

「おい、田村あ、早くしろよ？」

「あ、ああ」

風間の声で我に返し、『光の城』のイントロを始める。

さっきまでのノリがどっかに行ってしまい、どこかキレが悪いのが自分でもわかった。俺だけじゃなく柏木のドラムも松山弟のギターもそうだ。張り切ってノリノリなのは松山兄。風間だけは変わらない。

とにかく緊張しまくりながらの一曲が終わったとき、
「驚いたあ。キミたち上手いわねえ...」

先輩はパチパチと拍手をしながら言った。

「いいのかなあ？タダで聴かせてもらっちゃって？」

なんて上手いことを言う人だろう？

でも、とってつけたお世辞じゃないってことがわかる。

「キミは、歌がうまいね！」

先輩に言われて風間は、

「どうも」

と、愛想なくひとこと言った。

「キミたちみんな1年生なの？」

「そうっす！1年F組、松山太郎です！」

訊かれてもいないのに松山兄は自己紹介をすると、

「お、俺は同じく1年F組、松山次郎！」

と、弟までもが自己紹介。

なんなんだこの兄弟。兄はまあ普通だけど、弟よ、お前は硬派で通してるんじゃないのか？今日のお前たちはどっちがどっちだか見分けがつかないぜ？

「あれ？キミたちは双子なんだね？ほんと、そっくり！」

ほら、言われてる...。

松山兄弟は互いの顔を見合わせて、ふんっ！と背け合った。

「俺はC組の柏木直弥です...」

...って、おい！

お前までするか？！

どーなってんだよ、今日は...。

先輩がくすくす笑って、

「おかげで楽しませてもらいました！じゃ、そろそろ大丈夫そうだし、私はこれで」

と、席を立ち、ドアに手をかけた時、

「あのさ、いやなんだったらしっかり意思表示をした方がいいと思うよ」

風間が突然口を開いたんで、俺たちはヤツに注目した。

「え？」

先輩は首をかしげて風間を見る。

「やり過ごせても一時的なことでしょ？また明日になれば追いかけられるんだ。その度に隠れた

りするのも時間の無駄だしね」

おいおい、風間あ？

その言い方、ちょっとトゲないか？

先輩は風間をじっと見つめてる。

事情もわからないのにいいのか、そんなこと言っちゃって？と、俺は内心ヒヤヒヤした。けど、風間が言いたいこともわかる。ヤツは中学の時からずっと、そうやって自分の意思表示をしてきた男だ。こそこそ逃げたり隠れたりってことが大キライだし、誇りを持っている。

でも、風間のそれと先輩のこれはたぶん問題が違う...んじゃないだろうか？と、思った時、「キミの言うとおりでね」

と、先輩は笑った。

「うん。そうするよ。意思表示か...、大事なことだよね。わかった！明日からはバシッと意思表示をするわ！」

――な、なんて素直な人なんだろお〜。

「キミは名前なんていうの？」

先輩は風間に訊いた。

「俺は風間響」

「.....風間くんね、覚えておくよ！またね！」

先輩は来た時と同じドアを開けて出て行った。

並んでたってのに風間には名を訊いて俺には訊いてくれなかったって一のがちょっとシャクに触った。そういや、自己紹介してないの俺だけじゃん...。松山弟でさえアピールしたってのに....。

しばらく先輩が出て行ったドアをぼう〜っと見つめていた松山兄が、「可愛い〜〜〜っ！！」

と、叫んだ。

「なんかふわふわした感じがしてます、今...」

と、柏木。

「俺...、あんな人ならいいかなあ.....」

と、松山弟までもが言う。

参ったなあ。

みんながみんなやられちゃったのかよ。いくら気が合う俺たちだからって、惚れる相手まで同じじゃなくていいだろが.....。

ってというか、俺、惚れちまったのか、あの先輩に。本日、今、この時に。

「年増だぜ？」

風間が呆れた口調で言った。

「年増だなんて、風間くん、言葉が悪すぎるよ！」

めずらしく柏木が風間に抗議をすると、そーだそーだ罰当たりなヤツめ！と、松山ブラザーズが声を揃えて同調した。めずらしく気が合ってるよ、このふたり。

「マジかよぉ？まさか、田村まで年増がいいなんて言わないよな？」

風間は俺にツッコミを入れてきたけど....、

「えっと....、なんつーか....、年上って感じしないよな、あの先輩」

と、曖昧に答えた。

さすがにしっかり惚れました、とは言えない。

「わっかんねえな、お前たちの感覚...」

「わかんないのはお前だって一のっ！可愛いと思わなかったのかぁ？」

松山兄が例のごとく喚くと、

「年上には興味ない...」

と、風間は苦笑した。

ま、なんだっていいさ。

恋敵は少ないにこしたことないから....、

なんてことは風間にもヤツらにも言えないけど。

「ところで先輩はいったい誰に追いかけてたんだ？付きまといにでもあってんじゃないだら一なあ？」

と、松山兄。

それは俺も気になる。

「センセじゃん？」

と、風間が言った。

「センセ！？なんでわかるんだよ？！」

「なんだよ、お前たちも足音聞いただろ？あれはスリッパの音だぜ？学校でスリッパ履いてるのはセンセだけだろ」

ちょっと待て！

ってことは、あの先輩は誰だかわからないけど、とにかくセンセに言い寄られてるってことなのか！？センセだから先輩もむげにはできず、ああやって逃げ隠れしなきゃならなかったのか？！

.....だから、風間はあることを言ったのか！？

確かに足音はパタパタしていた。上履きだったらあんな音しないよな...。
この学校で生徒に言い寄りそうなセンスといたら....、

――非モテの権田か！？

とっさに風間を見た。
こいつ、ほんと状況判断が早い。

「なんにしたって、マドンナ先輩が付きまといにあってるんだとしたら黙って見てるわけにはいかないぜ！」

松山兄が声を上げて、弟も柏木も力強く頷いた。

.....ってことで、今学期最後の部活動は、風間を除く4人が同じ相手に同時に惚れちまった日、となり終了した。

名前を聞きそびれた彼女のことを、松山兄が『マドンナ先輩』と呼ぶと、
「なにがマドンナだよ...」

と、風間は完全に呆れた顔をして言い放った。

12 夏休み前日の出来事 その1

期末試験はボロボロで…。

一桁赤点。

一昨日は、みんなが試験休みの中、俺と松山兄弟は学校に来て追試。奴らは英語、俺は古文。

結果はたった10点しか上がらず、1年の1学期で早くも単位を落としちまった…。ちなみに松山兄弟は、英語だけは完璧な風間に`補習、してもらったおかげでふたりともクリア。5人の中で、俺が一番バカだってことが証明されたみたいでちょっと暗い本日の田村くんであります。

でもまあ、古文が出来なくたって別に死ぬわけじゃないし、明日からは夏休みだし、夏休みの楽しい計画はたんまりとあるんで過ぎたことを考えるのはやめて前向きに行くことにした。

「権田のやつ、ムカツク！！」

体育館での終業式が終わり戻って来ると、少し遅れて帰って来た松山兄が、廊下の自分のロッカーを乱暴に開けながらわめいた。

「あいつ、超機嫌悪いの！生徒に当たるなってんだ！」

弟の方も額に汗を滲ませながら兄と似た口調で言った。

何でも、式の後、

「ちょっと待て！」

と、権田にいきなり腕をつかまれて、

「お前ら、不正をしただろ！」

と、決めつけた言葉を吐かれたそう。権田曰く、期末で仲良く18点だった松山兄弟が、3日後の追試でいきなり62点の平均点をさらに越えた68点が取れるはずがない、カンニングをやらかしたに決まってる！ということらしい。

「証拠もないのに決めつけんなよ！」

と、言い返してきたらしいが、権田の言ってることが正しい気がするの俺だけだろーか……

、

と、松山兄弟を見る目が疑いのまなざしになってることに、自分で気がついていたりする。

証拠もないのに決めつけた発言をする権田も権田だけど、確かに怪しすぎる松山兄弟の68点…

。

「じい〜〜〜〜……」

「な、なんだよ田村、その目！」

兄弟ふたり揃ってロッカーを バタン と閉じた。

「いや、べつに〜」

「う、う、う、疑ってるなあ？」

ノーコメント。

「俺たちの血と涙の努力を仲間のお前までもが…。うううう…」

という松山兄の悲しみに暮れた嘆きは、

「太郎、次郎！落とさなくてよかったなあ！俺が作ってやったカンニングペーパーが役に立ったみたいだなあ！」

と、言いながら帰って来た風間の言葉によって大芝居であるということが判明した。

俺に対してバツが悪そうに首をすくめるブラザーズ。

「...お前たち、汚ねえ」

俺はマジメに追試を受けて、見事に単位を落としたってのに.....。

と、松山兄弟を睨みつけてやった。かなりマジでムカついているかもしれない。

「お、お、遅かったなあ、風間あ！何してたんだよ？」

松山兄は俺から目をそらすと、裏返った声で風間に駆け寄った。

「お前たちのマドンナ先輩に水飲み場のところで呼び止められて話してた」

風間は、ロッカーの中のを鞆に詰め込みながらサラっと言う。

「ぬわんですとおおお！！」

俺と松山ブラザーズが声を揃えて叫ぶと、風間はびくっと肩を震わせて俺たちを振り返り、

「な、なんだよ！？びっくりすんじゃないか！」

ロッカーに手をかけたまま大きな瞳をさらに大きく見開いて怒鳴った。

「呼び止められたって、どーしてなんで！？」

思わず風間に詰め寄っていた。

「し、知るかよ！？呼びとめたのはあっちだぜ？」

「で、で、何をお話してきたんだよ！」

松山兄も風間にまわりつく。

俺たち3人にピッタリと囲まれた風間は、暑苦しそうに自分の首を撫でながら、

「終わったら部舎の前に来てくれないかなあ～って言われた」

「だれが！！」

俺たちは理性を失って半狂乱....。

「俺」

と、風間は自分の鼻を指で指す。

「なんでやねん！？」

「知らねえよ。来てくれって言うのはあっちだぜ？」

風間はまたさっきと同じ言い回しをする。

どーしてそんなに冷静でいるわけ、風間くん？あのマドンナ先輩にひとりだけ呼び出されて『知らねえよ』なんて、その言い方、冷たすぎやしないか？

「行くの！？」

松山兄はさっきからツバを飛ばしながら風間に詰め寄っている。風間はおもむろに迷惑そうに自分の顔を手でガードして、

「とりあえずな。一応、先輩からの申し出だし、むげに出来ないだろ？」

と、サラリと言った。

なんて憎たらしい言い方！

「へ、へ、変なことするんじゃないぞ！」

兄が血走った目で喚くと、

「するかよ！！」

風間は半分マジで怒鳴った。

俺たちのマドンナ先輩が、風間だけを呼び出していったい何の話をするっていうんだ！

じゃ、ちょっと行ってくる、と、まるで便所にでも行くような感じで風間が部舎に向かうと、俺たちはC組に走り、柏木に状況を伝えた。

「え……っ」

柏木は絶句。

こいつは松山兄と違って喚いたりはしない。けれど、ひたいに棒線がいっぱいくつついた状態に落ち込んだのは確かだ。

「先輩が風間くんだけを…」

と、うつむく仕草から、背景の薔薇の花がしゅるしゅるとしぼんでいくのが見えるようだった。

「音楽室から部舎ってよく見えるよな…」

柏木がポツリと呟くと、一番最初に駆け出したのは松山兄、じゃなく俺。

もう、全速力で走った。俺の後を、奴らがバタバタついてくる。

「お前ら中学生かっ！？廊下を走るんじゃない！！」

どっかで権田が怒鳴る声がしたけれど、そんなのにかまってなんていられない。

音楽室に飛び込んで窓際にへばりつき、少し遠くのナナメ下に見下ろせる部舎に、俺たちの視線はまっすぐ伸びた。

部舎の前にある花壇の前にマドンナ先輩がひとりで立ってた。

両手を胸のところで組んで、まるで祈るようなポーズはひと昔前の清楚で可憐なアイドル歌手のようだ。

へろへろ～

松山兄弟が同時に脱力した。こうなったら、どっちがどっちだかほんと、見分けがつかないこの二人。

先輩は時々暑そうに太陽の光を手で遮ったり、ハンカチで汗をぬぐったりしている。

「何やってんだよ、風間！炎天下に先輩を待たせて！」

「便所にでも寄ってんじゃねえ？！あいつ！」

ブラザーズの意見は一致して風間を責める言葉を吐く。

けど、便所に寄ってたというのは正解のようで、ハンカチで手を拭きながらの風間が昇降口を出てくるのが見えた。

――余裕ぶっこいてんじゃねーよ！

俺たちがどんな気持ちで見守ってるか、わかってんのか？あいつ！

先週の音楽室からマドンナ先輩とは会っていなかった。同じ学校にいても3年の教室は中庭を挟んだ向こう側の回廊なんで、購買部もあまり利用しない俺はふだんからあまり3年と関わることはない。試験中は午前中で終わりだったし、その後は試験休みがあったんで、あれからマドンナ先輩が例の付きまとい犯をどうしたのか、俺たちには知るすべもなかったわけだ。

でも、気になってはいた。

マドンナ先輩を追い掛け回してる野郎がセンスかもしれないってのもすごい気になる。この学校で独身の男の教師は英語の権田と体育の戸島ってセンスだけ。けど、戸島は見た目スマートでカッコイイ部類に入るし、女子生徒からも人気があって、生徒をこそこそ追いまわすようなタイプには見えない。

イヤミでネバっこい権田なら話はわかる。あいつはどう見ても女にモテそうなタイプじゃないし、実際彼女いない歴29年の栄誉を誇る非モテ教師だ。

犯人は権田で間違いなし。奴はいつもスリッパを履いている。

気がないセンスに求愛されて追いかけまわされているマドンナ先輩は哀れだ。3年は進路のことでも色々あるだろうから、変な逆恨みでもされたらヤバイだろうし。

けど、生徒のそういう弱味につけこむってのが許せない！

あん時、逃げて隠れてた先輩の態度を斬ったのは風間だった。あいつは、廊下の足音を聞いた時にそれがセンスだと気がついた。それでもあえて『意思表示しろ』と言い切った。

悔しいけど、先輩は風間に言われてスッキリしたような顔をして笑っていた。もしかして、その後のことを風間には話そうと思ってのお呼び出しなのかもしれないな。

風間がマドンナ先輩の側に到着した。先輩は風間に駆け寄って何か言った。すると、風間は長身をかがめ、先輩はやつの耳元に口をあてて話しはじめた。

思わず首筋がくすぐったくなった。

「なんだよ、あれ！？」

松山兄が壁を思い切り足で蹴飛ばした。

「あれ、先輩の息が風間くんにもろにかかてるよなあ…」

と、柏木は放心。

「風間ああああ！」

松山弟はそのガッチリとした拳を握り締める。

俺は....。

ここからは遠いからふたりの表情まではわからない。風間はある調子だから、きっと側によって顔を見りゃ冷静には違いない。けど、あのふたりのシーンを、ただ見ただけだとしたらいい雰囲気のカップルだ。

待てよ？

もしかして.....。

やがて、ふたりは並んで歩き出し、部舎の前を離れた。

マドンナ先輩の腕はしっかりと風間の腕に絡みついていた。

13 夏休み前日の出来事 その2

風間とマドンナ先輩が仲睦まじく昇降口の方に向かって歩きだしたんで、俺たちは弾かれるようにして音楽室から階段の踊り場に飛び出した。

松山兄弟と柏木はそのままダッシュで一階まで降り、俺もその後を追いかけていたけど、ふと気になって二階の踊り場で立ち止まった。

職員室。

もしかしたら、マドンナ先輩は職員室で権田が見ているのを知っていて、わざと風間の腕に自分の腕を絡ませたんじゃないだろうか。

そんな考えが頭に浮かんだからだ。

奴らはもう既に一階の廊下を昇降口に向かって走っていた。

けれど、俺は一階には降りず、そのまま二階の廊下を職員室に向かった。

職員室の前を何気なく通り過ぎるふりをして、全開のドアから中を覗くと、窓際の校庭に向かった位置に並んでいる机に、案の定、権田が座っていた。ここからじゃ背中しか見えないが、権田はじっと校庭の方を見つめているようだ。右手に持ったボールペンが、中途半端な位置で宙に浮いている。

職員室には他に、教務主任と教頭が机に向かって仕事していて、コピー機を使ってる戸島センセと養護の沢渡センセが稼動してるコピー機を挟んでなんか喋っているだけだった。何もしないで窓の外を見てるのは権田だけ。

やっぱり睨んだ通り。

マドンナ先輩を追いかけて回してた犯人は権田だったか。

先輩はきっと、あのあと権田に意思表示をしたに違いない。でも、しつこい権田が退かない。だから、先輩は風間に協力を求めたってことだ。終業式の今日が最後のチャンスだったんだ。部舎は職員室の窓からちょうど真正面の位置。花壇のある場所は大きな窓からは丸見えの状態。そこにマドンナ先輩が立っていれば権田は絶対に見るに決まっている。

そこで、風間が登場し耳元で囁き合うほどの仲だと思わせつけ、極めつけに腕を組んで歩く。

一目瞭然。立ち入る隙無し。

普通だったら、仮にも教師である権田は、彼氏持ちのマドンナ先輩を諦めるしかなくなるだろう。しかも、その彼氏は、金髪長髪美男子風間くんときてる。勝ち目無し、だ。

な—んだ。

マドンナ先輩が風間を呼び出した理由ってのは、そ—ゆ—ことだったんだな、とほっと胸を撫で下ろした時、

「あれ、田村くん？どうしたの？」

と、顔をこっちに向けた沢渡センセが俺に気がついた。

あっちを向いていた戸島も振り向いて、

「ど—した？なんか用か？」

と、言う。

「い、いや別に。ただ通りかかっただけっす...」

権田に気づかれると面倒だ、

と、思いながら権田の背中に目をやったが、奴はそんなふたりのセンセの言葉も耳に入らないようで、ずっと同じ姿勢で正面を向いたまま。

こりゃ、そうとうこたえてるな。いい気味だぜ。生徒が教師に刃向かえないことをいいことに、その立場を利用してマドンナ先輩を手中に収めようとしてたのかもしれないが、世の中そんなに甘くないってことだ。しかも、権田だし。

「それじゃ、もう帰れ」

戸島は、短パンから出ている右足の脛を左足の親指でポリポリかきながら、沢渡センセにひとことふたこと言って職員室を出て行った。終業式の日ぐらい体操着はやめりゃいいのに、こいつはいつもTシャツに短パン。思いっきり脛毛を見せている。養護の沢渡センセは口うるさいけど、背が小さくてまあまあ可愛い。コピー機を挟んで仲良く何を話してたんだか知らないけど、俺はお邪魔虫だったのかもしれない。

「んじゃ、沢渡センセ、さよなら！」

帰りがけにもう一度権田を見ると、右手の宙に浮いてたボールペンはようやく机の上に落ち着いたようだ。そして、

「なんだ、田村あ？」

と、振り向いた権田の左手は、小指が見事に鼻の穴の中にはまっていた。

—汚ねえなあ！指で鼻クソほじってんじゃね—よ！ティッシュ使えっての！そんな奴がマドンナ先輩をものにしようだなんて一億万年早い。

挨拶するのも馬鹿らしくて、俺はそのまま職員室を後にし、昇降口に急いだ。たぶん、風間は役目を終えて俺たちを待っているだろう。もしかしたら、マドンナ先輩もまだいるかもしれない。それで、もしかしたらこれからみんなで一緒に駅のドトール珈琲に行こうかって話になるかもしれない！

ところが.....。

昇降口では松山兄弟と柏木がげた箱のスノコの上に座りこんで放心していた。

「...お前ら、どうした？」

言いながら風間の姿を捜したが見当たらない。マドンナ先輩もいない。んで、風間のげた箱は空になっている....。

「...はあ」

松山兄が、ガックリと肩を落としてため息をつく。

「風間は？」

同じような姿勢で座りこんで首を垂れている松山兄弟と柏木に訊く。

「あいつ、裏切りやがった」

「裏切った？」

「風間くん、マドンナ先輩とふたりで先に帰っちゃった...」

——なんだって！？

「仲良さそうに腕を組んだままふたりして笑いやがって、風間の奴、俺たちには、じゃあなっ！だとさ」

と、兄。

笑ってた？

風間が？

だってあいつ、マドンナ先輩にはちっとも興味なさそうだったし、これは権田を撒くカムフラージュじゃなかったのか！？

「きっと、風間くんもあの耳元の囁きでメロメロになっちゃったんだ...」

と、柏木。

信じられなかった。

風間がそんな、俺たちを裏切ってひとりで抜け駆けするような男だったなんて！！

「ちっきしょ〜！！俺のマドンナ先輩をっ！！」

「誰がお前のなんだよっ！？」

今は、松山ブラザーズのいつもの兄弟喧嘩をまともに聞く余裕がない。

風間の行動が少なからずショックだった。

あいつが、俺たちを裏切った。

「お前たちのマドンナ先輩、と言っておきながら、俺たちの目の前で.....。

興味なさそうにしていたことが奴のカムフラージュだったのか？そうやって、俺たちを欺いて出し抜いたのか？

マドンナ先輩がどーのこーのよりも、風間のその腹が悲しかった。

「行こうぜ...」

声に力が入らなかった。

すんげえせつない気分.....。

俺たち4人は、いつも5人で歩く駅までの道を、言葉も少なくトボトボと歩いた。

明日からは夏休み。

でも、ブックキャスルの練習があさってにはある。

今まで通りの俺達でいられるだろうか...、と、憂鬱な気分沈んだ夏休み前日の出来事だった

。

14 解散の危機！？

今日は夏休みに入ってはじめての部活。

朝から太陽はガラガラ照りのセミはジージー鳴きーので、暑苦しくてかったるくってしょうがない。

いや、普通なら太陽が照ってようがセミが鳴いてようが、バンドの練習とありゃかったるいなんて思わない。

けど、今日は駅まで歩くのも電車に乗るのも学校に行くのも気が乗らなかった。

原因は風間。

終業式の日のヤツの行動と、松山ブラザーズたちと4人でトボトボと歩いた駅までのせつない時間が、俺の中であの日からずっとひっかかっている。

別に、風間とマドンナ先輩がどーのこーのじゃないんだ。もしも、ふたりがそういうことだっというんならそれはそれで仕方ないことだし、俺たちが外野で文句たれることじゃない。そんなことは、いくら松山兄でもわかってるだろう。

俺たちが一貫して腑に落ちないのは風間の態度。

フィーリング、あ、うんの呼吸が大事って言ったのはヤツだ。俺も松山兄弟や柏木も、そこんところはすごく納得してたし、俺たち5人にはそれがちゃんとあるって思ってたけど、松山兄が言った、`笑いやがった、ってことが本当だとしたら、風間の行動は仲間に対する裏切りだろ。あいつは、マドンナ先輩に熱を上げて俺たちを横目で見ながらさんざん『年増には興味ない』だとか、『何がマドンナ先輩だよ』なんていう暴言を吐き、そのくせ自分はちゃっかりと腕を組んで歩く仲におさまり、それを見て口をあけて放心してる俺たちを笑い、俺たちは信じていた仲間に、いいように出し抜かれたってわけだろ？

これが本当なら、あまりにもせつない。

意気消沈もいいとこ……。

駅に着くと、松山兄弟と柏木が、階段の壁にもたれかかりしゃがんだりしながらガラガラしていた。風間の姿はまだ見えない。

「田村、おせえぞ」

俺を見つけた松山兄がやる気なさそうに言うと、

「だらしなく歩いてんじゃねえよ」

と、弟が言う。俺からしてみりゃ、お前たちの方がよっぽどだらしなく見えるぜ。どう見ても駅にたむろしてるヤンキーだ。

「風間は？」

「さあな。まだ見ないぜ？」

答えた兄の言葉も心なしかつつけんどん。

「あ、風間くんが来たよ」

壁にもたれていた柏木が、その身体を起こして通りの向こうを指差した。校則ではもちろん認められていないオレンジ色の開襟シャツをズボンの外にだらしなく出した着こなしをした風間が、往来する車の間を縫ってこっちに向かって歩いてくる。

「悪い、悪い！」

こんなに暑いっていうのに風間はいつもと変わらずの涼しい顔。汗のひとつもかいてない。

風間が到着すると、

「……じゃ、行こうぜ」

しゃがんでいた松山兄は面倒くさそうに立ち上がって駅の階段を上って行った。それに、弟と柏木も無言で続く。いつもの俺たちだったら、「おっせーぞ、風間あ！」と、兄か弟が喚いて、ヤツの頭をポカスカはたいて、「待たせた詫びにアイスをおごれよっ！」なんて言い合いながらのはずだけど、奴らも風間と目を合わせようとはしない。

風間は、あれ？といった具合に首をかしげ、俺を見て言った。

「...なんか、変じゃない？」

そりゃ、変だろう。

お前が終業式にマドンナ先輩と腕を組みながら帰ったあとの俺たちが、どんな気持ちをかみしめたのか考えなかったのか？

「変なのはお前の方じゃないか？」

俺はひとこと言って、兄たちのあとを追いかけた。

みんながなんとなく気まずい雰囲気のまま学校までやって来ると、校門の前にマドンナ先輩がいた。3年は部活はないはずだから進路相談にでも来たのか、それとも…。

俺たち一同は校門の少し手前で立ち止まった。みんなの視線が自然に風間に向く。

「あ、風間くん！」

先輩は風間を見つけると、まっさきにヤツの名を呼び手を振った。目は「風間くん、しか見ていない。側にいる俺たちのことなんかまったく眼中に無し、です。

風間は立ち止まったまま顔をひとつ変えず、じっとマドンナ先輩を見ている。

「...行こうぜ」

兄がつぶやいて、風間を追い越して前を歩き出した。そして、先輩の横を通り過ぎて校門に入る前に、

「ちわっす…」

と、軽く頭を下げた。先輩はそんな兄に対して、軽く、ほんとうに軽く会釈を返しただけ。そして、あとに続いた弟と柏木が同じようにして風間をその場に残したまま先に校門を入れていく時のマドンナ先輩も同じだった。

風間を見るとため息なんか吐いている。ヤツの内心がどうなのかさっぱりわからないけど、そういう気のない態度には腹が立った。マドンナ先輩が部活もないのにこんなところで風間を待ってるってことが、もう全てを物語っているだろう？終業式の日、先に帰ったふたりに何があってどういうことになったのかは知らないけど、付き合ってるなら付き合ってるって隠さずにハッキリ言やあいいじゃないか。

「先に行くぜ」

言い方がかなり冷たいと自分でも感じた。

「俺も行くよ」

風間は先輩を無視して素通りするつमりのようだ。腕を組んで帰ったくせに！

「何考えてんだよ、お前。先輩が呼んでるだろ？」

そうだよ。

風間が何を考えてるかわからないから腹が立つんだ。マドンナ先輩は関係ない。

「いいよ、別に」

風間は冷たく言う。

「よくないだろ！お前のこと待ってたんだろ、先輩は！」

怒鳴っちまった。

風間に対してこんなにムカついたのは初めてだ。

腹の底がムズムズしてしっくりいなくて気持ち悪くてしょーがない。

「風間くん...?迷惑だったかな...？」

先輩は風間の態度を察したのか、寂しそうにうつむいた。

「いや、メーワクなんて思ってないっすよ、こいつは！」

先輩の横を通り過ぎるときに一応言ってみたけど、俺の言葉なんか耳に入っちゃいない感じで、先輩はじっとうつむいたまま。

「俺、これから部活なんだけど、後じゃダメ？」

風間がようやく先輩に対して口を開いた。その言い方は、いかにも面倒くさい、といった感じだった。

「...うん。今日はいいよ。ごめんね。帰るね」

先輩はそのままトボトボと駅に向かって歩き出した。

いったい、どーなってんの？

先輩は、ただ風間に会うためだけにここで待ってたってことか？

「いいのかよ、風間！帰っちゃうぜ？！」

呆けて突っ立ったままの風間に言うと、

「別にいいじゃない？俺がどーのこーの言うことじゃないし...」

と、呑気に言う。

どう考えたって、どーのこーの言うことだろ！？

先輩は風間を待ってて、なのに冷たくされて、そんであんな悲しそうな目をして帰って行ったんだぜ？お前たち、仲良く腕組んで帰ったんだろーがぁ！

一部始終を見ていた松山兄弟と柏木も、おもむろにムカついた顔を風間に向けた。

「ひっでえヤツ...」

兄の声が震えていた。

そりゃそうだ。仲間を出し抜いて裏切っておいて、今度は俺たちのマドンナ先輩にあんな態度。気分なんだか何なのかわからないけど、自分勝手すぎやしないか？

こんな感じだから、練習したって合わない合わない。乗らない乗らない。風間の歌だけがひとりで先に走っている。

「おい、いったいどーしたっていうんだよ！？全然調子入ってないじゃないか？」

俺たちのノリがあまりに悪いもんだから、まだ演奏の途中で風間は歌うのを中断して叫んだ。

「べつに...」

松山兄がふてくされた調子で言った。

「さっきからお前らおかしいぜ？何が気に入らないんだよ？」

何が気に入らないって、風間くん...、マジでわからないって言うんじゃないだろーな？

「俺たちって信頼関係で成り立ってたよな？」

俺はギターを置いて風間に言った。

「ああ、そうだ」

風間は間髪をいれずに答えた。

「城が崩壊寸前...」

松山弟が言うと、兄は、

「ブックキャスルは解散するしかねえ！」

と、短絡的な結論を出した。

ハッキリ言って、これには俺も焦ったけど、とりあえず兄の発言なんで無視することにした。風間もさほど気にしてないようだし、弟や柏木も聞いちゃいない。俺たちの暗黙の了解ってやつだ。

「俺に不信ってわけ？」

風間は机に座り、長い脚を組みながら言った。

「そういうこと。終業式からのお前の態度にみんな合点がいったっての。わかるだろ？」

「... `マドンナ、か」

「 `先輩、をつけろよ！」

兄が怒鳴ると、

「参ったなあ...」

風間は大きなため息をひとつ吐いた。

「参ったなあ...」

風間は大きなため息を吐いた。

その、吐き方が心底めんどくせえといった感じだったんで、俺たちはまたそれが気に入らなかった。

「何が参ったんだよ？」

「俺がお前たちのマドンナに...、マドンナ先輩に呼び出されたのが気に入らないってこと？そんなこと？」

風間の言い方には、そんなくだらねえことかよ、という意味がこもっていた。

「お前たちの、じゃなくて風間くんの、だろ！？」

ぶちきれたのは柏木だ。

「何でそうやって誤魔化すんだよ！一緒に腕組んで帰ったじゃないか！マドンナ先輩と付き合ってることに對しては俺たちだって文句なんか言わないよ。風間くんが誤魔化さなければ！さっきみたいに、あんな風にマドンナ先輩に冷たくしたりしてさ、どういうつもりなのかは知らないけど、後でコソコソ会ったりするんだろ？そーゆーのが俺たちは嫌なんだ！仲間に対する裏切り行為だぜ！？」

いつも穏やかな柏木が真っ赤な顔をして怒ってるもんだから、風間はポカーンと口を開いた間抜け面で柏木を見てる。いや、風間だけじゃなく、松山兄弟も俺もずいぶんの時間固まった。

「...そ、そうだ、そうだ！お前たちが付き合ってるのは別に関係ねえ！俺たちがムカついてんのはそーゆーことじゃねえっ！」

柏木の後に松山兄が口を開いたが、ヤツはたった今まで、風間とマドンナ先輩が付き合ってることに對してムカついてた、ということが判明した。

「いつから付き合ってたんだよ？本当は終業式の前から付き合ってたんだろ！？ちっくしょー！」

ほらな、やっぱり...。

「ちょっと待て！」

口を開けたままみんなの文句を受けていた風間が、突然我に返ったように叫んだ。

「話が全然見えねえっ！誰がマドンナと付き合ってるんだ？」

「お前だろーが！！」

俺たちは声を揃えて言い返した。

「俺か...。そんで話が見えてきた...」

――何、とぼけてんだよ！

と、言おうとした時だ。

「え！？俺！？俺――っ！？」

風間は自分を指差して、心底驚いた、という具合で体を「く」の字に曲げて叫んだ。

「つきあってねーよっ！」

「嘘つけっ！！」

「嘘ついてない！何で俺がマドンナと付き合うんだよっ！こっちが訊きたい！」

今度は風間が真っ赤な顔をして怒鳴った。

「部舎の前で囁きあってたじゃないかっ！」

「腕組んで帰ったじゃないか！」

「ゝじゃあな、ってせせら笑ったじゃないか！」

柏木、弟、兄の順番でまくしたてた。

風間は俺を見て、

「田村も俺とマドンナが付き合ってるって思ったわけ？」

と、切れ長の鋭い目を光らせた。

「俺はお前がマドンナ先輩と腕組んで帰ったのもせせら笑ったのも見てねえから何とも言えないけど、権田に見せ付けるためのカムフラージュだったら昇降口で終了のはずが、お前は現にマドンナ先輩と先に帰ってたしな...」

「ちょっと待て！」

風間はもう一度言った。

「権田に見せ付けるって何？」

「だからぁ！マドンナ先輩を追いかけてた変態は権田だろ？」

風間は一瞬考えるように天井を見上げた。

そして、

「何から何まで全部誤解！お前たち、誤解してるぜ！」

と、言った。

「マドンナを追いかけてたのは権田じゃないし、俺とマドンナは付き合ってたし、当たってるのはカムフラージュに協力したってことだけ！あとはお前らの勝手な思い込み！」

権田じゃない！？

嘘だろ！？

だってあの時、権田は安心してたぜ？

右手のボールペンなんか宙に浮いちゃってたし....。

俺と松山兄弟たちは顔を見合わせた。

「じゃあ、誰なんだよ？何でめんどくさそうにしてたお前がマドンナ先輩と腕組まなきゃならなかったんだよ！？」

松山兄がツバをペッと飛ばしながら風間に詰め寄る。

風間は思いっきり顔を歪めて手を左右に振って兄のツバを空中で拡散させた。

「...ったく、説明すんのも馬鹿らしいから言わないでいたけど、何だかこのままじゃブックキャストルは解散の勢いだから種明かしすっから！」

耳の穴かっぱじってよく聞きやがれっ！

...とまではさすがに言わなかったけど、べらんめえ調の遠山の金さんのような口調だった。こりゃ、風間も相当ムカついてる。

んじゃ、聞かせていただきますよう、その`種、ってやつを、風間くん！

俺たちは風間の周りに椅子を集め、じっくりと聞く体制を整えた。

風間がひとつ咳払いをして、

「マドンナを...、」

と、話し始めると、兄弟と柏木がすかさず、

「先輩をつけろ！」

と、突っ込みを入れた。風間はややムッとしてもう一度咳払いをしてから言った。

「...マドンナ、先輩...をおっかけてたのは戸島」

戸島っ！？

嘘だろ——っ！？

「詳しいことは聞かなかったけど、いろいろあったらしいぜ、マドンナと...、いや、先輩と」

「ちゃんと聞いとけよ！」

兄が眼をむいて言った。

「別に興味ねえし」

風間はクールに言う。

「マドンナはその気がないってことをはっきり言ったみたいだけど、戸島が退かないから俺にヘルプを求めてきたの。あん時、意思表示をしろって言ったのは俺だったから、ちっとは責任も感じたんで協力したってわけ」

風間が言うには、とにかくマドンナ先輩に頼まれたことをやっただけ、らしい。

あの日、部舎の前でマドンナ先輩が風間に耳打ちして言ったことは、

`今、職員室の窓から戸島がじっとこっちを見ているから、これから昇降口まで腕を組んで歩いて欲しい、ということだったらしい。

風間が職員室を見上げると、確かに戸島が立って見てたそうだった。

「彼氏のふりすればいいの？って聞いたら、そうだ、っていうから、そーゆーの好きじゃないけど、まあそれで戸島があきらめんならいいか、と思って承知してやったんだ」

で、とりあえず腕を組んで昇降口まで行って、そこでマドンナ先輩とは別れて風間は俺たち

を待っていたらしい。

「そしたら、戸島がやって来てさ、3年の下駄箱でマドンナ...先輩を捕まえたんだよ」

「捕まえた！？学校の中で！？」

何て教師だ！

そういや、あの日、コピーを使ってた戸島は俺に背を向けてたから校庭を見ていたわけだ。

で、途中で出て行った。

あの後のことか！

「捕まえたっていうか、`ちょっと話がある、なんて戸島の声が聞こえてさ、こりゃ最後まで彼氏役やんなきゃダメそうって思ったから、行ったわけ」

「彼氏の役で？」

と、兄。

「まあな...」

風間は、

「戸島センセ、何の話っすか？俺たちこれから映画観に行くんですけど、って言ってやったそうだ。

戸島はたぶん、風間はマドンナ先輩が用意した偽彼氏ってことに気がついてたんだろう。で、昇降口に確かめに行ったら案の定、マドンナ先輩はひとりだった。廊下から来て一番手前に3年の下駄箱、1年のは一番奥だから、風間がまだそこにいて俺たちを待ってるなんて思わなかったってわけだ。

「戸島はすんげえ驚いた顔してた。映画が始まっちゃうから話なら早くしてくれ、って言ったら黙っちまった」

ボーゼンとする戸島の前で、マドンナ先輩は風間の腕につかまった。そこへ、松山ブラザーズたちがやって来たんで、戸島は慌てて下駄箱から立ち去ったらしい。

「けど、あいつ、立ち去るふりしてじっとこっちを見ててさ、目が合ったから笑ってやったら引きつった顔して行っちまった」

「そういや、あの時戸島センセとすれ違った」

柏木が思い出したように言った。

「とりあえず校門を出るまではどっかで見てる可能性もあるからそのまま彼氏のふりして駅まで帰ったわけ」

「そんで、俺たちに`じゃあな、だったわけだ」

兄が納得したように言った。

「そんだけ」

風間はぶっきらぼうに言った。もう、これ以上はたたいても逆さにしても何も出てこないぞ、といった感じで。

「ほんと、そんだけ？」

弟が言った。

「ああ」

「マドンナ先輩に何かしたんじゃないーだろーな？！」

と兄。

「するかよ！年上には興味ないって言ってるだろ！」

「じゃあ何で今日、マドンナ先輩はお前を待ってたの？」

「知らねえよ」

風間はまたまたぶっきらぼうに言ってプイッと横を向いた。

種は戸島かよ…。

じゃ、権田はあん時ただ純粹に鼻クソほじってただけか？

夢中でほじってたから、右手がお留守になってボールペンが宙に浮いてたのか？

風間は、何で戸島がマドンナ先輩にまわりついてるかとか、マドンナ先輩がどーやって意思表示したのかとか、そーゆーことは何にも聞いてないらしい。本当に、ただあの日、マドンナ先輩に頼まれた彼氏役をやってそんで終わり。マドンナ先輩が何で風間にその役を頼んだのかとかにもまったく興味ないみたいだ。自分が言った意思表示をしろって言葉に責任を取っただけ。

「で、俺への疑いは晴れた？」

風間は俺たちを睨んだ。

「ま、まあ…」

柏木が曖昧に答えと、

「まあ！？」

ああん！？

と、風間はすごむ。

「俺たちは信頼関係で成り立ってんだよなあ？」

風間は俺に向かって言った。

「そ、そーだよな！？」

俺は松山兄に振る。

「ブックキャスルは解散するしかねえ…！ってか？」

「い、いや、それは…」

松山兄は弟に視線で助けを求めた。すると、風間は今度は、

「城は崩壊かあ…」

弟に流し目をくれる。

「うう…」

弟は絶句して俺に助けを求めた。

結局風間は最初から何も変わっちゃいなかったわけだ。

「悪かった！」

俺は風間に頭を下げた。

少しでもヤツを疑った自分が情けなかった。風間はちっとも裏切っちゃいなかった。勝手に疑ってヤツを裏切ってたのは俺たちの方だ。

「すまん〜！」

「ごめん！」

松山兄弟と柏木も次々と頭を下げた。

風間はしばらく俺たちを見回して睨んでいたけど、ひょいっと立ち上がって、
「ま、いいさ！お前たちの意外な一面を知れて面白かったぜ」

と、ニヤッと笑った。

ぶちきれた柏木、気が合った松山兄弟、そして....、
「女に弱い田村！マジで怒鳴りやがったもんなぁ」

く....、言われちゃった。

「女が絡むと友情は砂の城と化するんだなぁ....。いやぁ、勉強になったぜっ！」
まさにその通り。返す言葉無し....。

その時、風間のズボンのポケットから、はみ出していた紙切れのようなものがヒラヒラと舞って落ちた。それを何気なく拾って、俺はしばし凍結した。

「ダンス・ウィズ・ウルブズ...？映画の半券？おとといの日付だし....」

「あっ！！」

風間が焦ったように、その半券を俺の手からもぎ取った。

「風間...?!」

風間は俺たちの目の前で、その半券をこれでもか！ってぐらいに細かくちぎり、ゴミ箱にパラパラと捨て、

「さ、練習を再開しよーぜっ！」

涼しい顔で自分のポジションについた。

再び俺たちは風間に疑いの目を向ける。

「風間あ！」

みんなで声が揃っちゃった。

「...ったく！戸島に言った通り、一緒に映画に行っただけだよ！そんだけっ！あとは何にもしてませんっ！」

それだけで十分だろっ！

男女交際のしょっぱなは、映画鑑賞ってのが大概のお決まりじゃねーかつ！

だいたい他に何するってんだ！？

「映画ぐらい別にどーってことないだろ？一緒に映画を観たからって付き合ってるってわけじゃねーし！」

と、風間は開き直る。

確かにそうだ。

風間はただ、マドンナ先輩と一緒に『ダンス・ウィズ・ウルブズ』を観ただけだろう。それ以上でも以下でもない。ほんと、それだけ。

でも、マドンナ先輩はどーだ？

風間に彼氏役を頼んで、腕組んで、一緒に映画観て、今日は校門で風間を待ってて、そんで冷たくされてんだ。

「お前、女心わかってないっ！」

と、言うと、

「だって俺、女じゃねーし、わかるわけないだろ？！」

と切り返された。

そりゃ、ごもっとも！

しかし、しかし、しかーしっ！！

「ブックキャッスルは今日、たった今からサンドキャッスルに改名！！」

新たな火種は風間響！

女が絡むと友情は砂の城と化す――。

16 夏の日の徒然 その1

「ブックキャッスル、改め「サンドキャッスル」の練習が終わり、俺たちはいつものようにぞろぞろと音楽室を出た。これから俺たちは駅前のビリヤード場でひと遊びすることになってる。

部長代理の風間が鍵を職員室に返しに行ってる間、松山兄弟と柏木は便所、俺は水飲み場に寄った。蛇口から出る水は生ぬるくてまずかったけど、喉がカラカラだったんでゴクゴクと流し込んでると、

「臭っせえっ！誰だよ！クソして流してねえの！」

便所の中から松山弟の叫び声がした。

夏休みの、音楽室の前の便所でクソする奴なんてひとりしかいない。

「お、俺じゃねーよ...？」

裏返った兄の声。

「嘘つけ！ここにちゃんと松山太郎って名前が書いてあるぜ！」

「うそっ！？」

あっははっ！と、柏木の爆笑の声が聞こえた。

こいつら、平和だあ——。

平和すぎる——。

この間まではマドンナ先輩を巡ってあんなに大騒ぎしていたっていうのに、柏木なんてぶちぎれるほどだったっていうのに、奴らにとっちゃ、もうどうでもいいことのようにだ。

ま、そうだよな。

マドンナ先輩は俺たちのことなんて最初から眼中になかったんだし、いつまでも未練持ってちゃ戸島とおんなじだ。一時のあわ—いせつな—い憧れだった、というふうに奴らは奴らでケリつけたんだろう。

マドンナ先輩は風間にほの字。

もう、これは決定的な事実として受け入れるしかない。風間はあんな調子だけど、あれからだって俺たちの部活がある日にはマドンナ先輩はいつも学校に来ている。そりゃ、進路相談とかいろいろあるんだろうけど、それだけじゃないってことぐらい、勘のいい田村くんにはわかる。長い夏休みの間、少しでも顔が見たいって思うから、風間が学校に来る日に先輩はいるんだ。

惚れたと思ったらあっさり失恋——。

まあ、こういうことは悲しいかな、だいたいのいつものパターンなのだけど、惚れた相手の思い人が風間、ってのが少々気に入らなかったりするのだ。

「別に俺のことなんか気にしないで、惚れてるならガンガンいっちゃえば？」

なんてことを平気で言う風間。

お前のことを気にしてるんじゃないく、マドンナ先輩の気持ちを優先してるんだろーが…。自分に想いを寄せてる相手のこと、ちっとは考えてやれよ。一緒に映画観たんだろー？

風間に冷たくされて…、もちろん風間は冷たくしてるつもりはないのだろうけど…、しょんぼりとうつむくマドンナ先輩を見ると、俺の繊細な心はきゅんと痛くなるのだ。

はじめて購買部で出会った時の、俺を見上げたあの仕草、中学の時に好きだった涼子ちゃんに似ててさ…。

『田村くん、また掃除サボったでしょ？』

って、いつも腰に手を当てて俺を睨んでた涼子ちゃん。可愛かったんだ…。

でも、彼女も風間のこと想ってた。

中学の時の風間は、今よりもずっと険があった。いろんなことがあったし、あいつはいつも闘っていたからそれもしょーがないけど。だから、とっつき難い印象だったのは確かだった。けど、女の子って、案外そうゆう奴に惹かれたりするんだよな。

『風間くんって、どんな女の子が好きなのかなあ？』

って、涼子ちゃんが俺に聞いてきた時は頭ガビーンだったぜ。

『何だか怖くてうまく話せないんだあ…』

なんて顔真っ赤にしちゃってさ。

風間はきっと、涼子ちゃんのことなんて覚えてないだろう。いつも何気なくそこにいるような、たんぽぽのような女の子だったんだ。

マドンナ先輩もそんな儂い雰囲気があって、どこか放っておけなくて。

でもまあ、あっちは俺の名前さえもたぶん知らないぐらいだろうし、お付き合いしてみたいなと思ってた俺が馬鹿だった、ということであきらめるしかねえよな。

どーでもいいけど風間、頼むからマドンナ先輩を泣かしたりしないでくれよ。

なーんて、便所の中ではクソがどーのこーのもめてる声を聞きながら、ひとりで感傷にひたってた時、

「いたいた、田村くん！」

後ろから声をかけてきたのは、バスケット部のユニフォームを着た大島雪乃だった。

「よお、大島！久しぶりだなあ！」

「部活の日にち合わなかったもんねえ！ところで、松山くんたちの所在はわかってるけど、風間くんは？」

大島は、わめき声が収まらない便所を、その形よく尖った顎で指しながら言った。

「奴は職員室に鍵を返しに行ってる。昇降口に行けば会えるぜ」

「じゃあ、田村くんから言っておいて欲しいんだけどさ、来週の水曜日、みんなでプールに行か

ない？こっちは環たち誘うから」

「プールかぁ...」

「行く行く！！行きますとも！」

こーゆー話にはどんなところにいたって反応が早い松山兄がすっ飛んで来た。続いて弟や柏木も。

「でもよ？頭数が揃ってなきゃ辛いもんがあるぜ？こっちは5人、そっちは小早川女史に吉岡とお前、じゃふたりあまっちゃう！」

「ああ、それなら大丈夫！C組の高橋郁恵とD組の河本美紀も一緒に行くから」

大島が言ったふたりはバスケット部の女子で小早川たちとも仲がいいらしい。顔は知ってるけど話したことはない。

別に知らない子とプールに行くのがやだってわけじゃないけど、いまいち気分が乗らないのは何故だろう...？

「田村くん？」

返事を返さない俺に、大島は少し怪訝な顔を向けた。

「なんかまずいことある？」

「いや、べつに...」

「じゃ、決まり！風間くんにも言っておいてね！」

大島はヒラリと身を翻して階段を下りていった。

マドンナ先輩が可憐なすみれの花だとしたら、大島は華麗な薔薇だ。でも、堂々とした美貌をひけらかすわけでもなく、サバサバした性格なんで付き合いやすい。風間はきっと、あんなタイプの女の子とだったら気が合うんじゃないだろーか。見た感じもお似合いだし...。

.....なんて考えてる自分が情けない。

しょーがないだろ、マドンナ先輩は風間なんだから。

昇降口に行くと、いました、マドンナ先輩と風間くん...。

今日の風間は、いつもみたいに面倒くさそうでもなく喋ってる。もしかしたら、戸島でもいるのか？と周りを見回したけど見当たらなかった。

「何やってたんだよ？ずいぶん遅かったんじゃないか？」

俺たちに気がついた風間が、咳払いをひとつした後に言った。

「大島がさ、来週の水曜、みんなでプールに行こうって誘ってきたんで話をつめてた」

答えたのは松山兄。

「風間にも言っておいてくれって言われたぜ。あっちは小早川たちとバスケット部の女子が一緒だとさ」

——おいおい太郎！

マドンナ先輩の前で他の女の子の話をしちゃマズイだろっ！

風間とマドンナ先輩は一瞬顔を見合わせた。
が、風間はすぐにまた俺たちを見て、
「オッケー」
と言った。

――風間あっ！

先輩の気持ち考えろよ。せっかくふたりきりで話してたところに、俺たちがぞろぞろとやって来ただけでもため息もんだろうに、好きな相手が他の女と一緒にプールに行くなんて話を目の前でされてみる、せつないだろ！？

案の定、さっきまで微笑んでいた先輩の顔が曇ってる。
「じゃ、帰るね」
しょんぼりしたまま玄関を出ようとする先輩。
俺の胸がきゅんきゅん痛む。
こーゆー時、俺だったら...、
「ちょっと待てよ。どうせ途中まで同じ帰り道なんだ。一緒に出ようぜ？またどこで戸島が見てるかわかんねえし」
そうそう。そうやって...

――え...？

風間が先輩の細い腕をつかんでいた。
先輩は嬉しそうに頬をピンク色に染めて.....。

またまた別の意味で胸が痛い田村くんだ.....。

炎天下の駅までの道は、風間と先輩が並んで歩く少し後ろを、俺たちが無言でぞろぞろとくっついて行くように歩いた。

「チッ！なんだかんだ言ってるくせに結局こーなんじゃねえか」
クサクサした顔で文句を垂れるのは兄。
「...まあしょうがないよ。先輩は風間くんに惚れてるみたいだし、風間くんはあんなこと言ってるけど、案外どーしたらいいのかわかんないだけかもしれないよ？」

という、柏木の言葉には妙に納得してしまった。

考えてみれば奴にこんな風におもむろに女が絡んできたことは俺が知る限り無い。涼子ちゃんのように、密かに風間くんが好き、って女の子は結構いたかもしれないけど。

風間ってやっぱ、女の子からしてみればとっつき難いんだよな。派手な見かけと抜群なルック

スを持ってるけど、口は悪いし女に対してクールだし、豪快な見かけの裏で何を考えてるのかわからないようにも見える。同級生の女子たちからも一歩引いた目で見られてるようで、ヤツに気軽に声をかけるのは大島ぐらい。女子受けはめっちゃめっちゃ悪いくせに、実は密かにモテている男が風間だ。

そんなだから、自分に対する好意を隠さないマドンナ先輩に戸惑ってるんだ。ヤツが吐く言葉はきっと、心と裏腹なんだ。

なんとなくわかったような気がする――。

ビリヤード場まで来た時、風間は、じゃ、とひとことだけ先輩に言ってさっさとドアを開けて行っちゃったんで、俺が代わりに先輩を誘った。

「私もいいの？」

先輩は首を傾げて訊いてきたけど、ここまで一緒に来てさよならなんて、誘う理由がないのと同じぐらい無いだろう？

ビリヤード場での先輩は、ずっと俺たちののプレイを見ているだけだった。でも、『風間くんうまいっ！』とか、『双子ちゃん頑張れっ！』なんてエールの声を出してくれたりした。

いつもの俺だったらゲームときちゃ命かけるぐらい燃えるけど、今日はやっぱり気分が乗らなくて、盛り上がってる場からさっさと下がって一人椅子に座った。

すると、マドンナ先輩も奴らから離れて俺の隣にやって来た。

「田村くん、今日は誘ってくれてありがとね」

先輩は隣に座って言った。

田村くん、なんて呼ばれたの初めてだぜ。先輩、俺の名を知ってたんだ。

sonだけで嬉しくて、

「あ、いや、そんな...」

なんて、松山兄のように声が裏返っちゃった。

「あそこでバイバイされてたら、きっと落ち込んでたな、私」

「...そうっすよね」

「さっきね、風間くんをプールに誘ったの。でも...、ね」

マドンナ先輩は、ふう...、とため息をついた。

それってまさか...、

「来週の水曜日だった、とか...？」

先輩はコクンと頷いた。

あいつ、直前に先輩から誘われてたってのに、同じ日の大島の誘いの方を先輩の目の前でオッケーしやがったのか！

「きっと、風間くんは迷惑なんだよね。でも、冷たくされればされるほど、好きになっちゃうん

だよねぇ。不思議…」

——ずんどこ。

名前を呼んでもらった感動がどっかにすっ飛んじまった。

わかってたことだけど、そうやって無邪気に言われるとさすがにへこむ。

「風間くんって、どんな女の子が好きなのかなあ…？」

まるで涼子ちゃんだ。

同じ台詞を同じように二回も聞かなきゃならない俺っていったい……。

「…風間のタイプは俺もわからないけど…」

あいつがどんな女の子が好きかなんて知らないさ。

でも…、

「あいつは先輩のこと、迷惑だなんて思ってないっすよ。ただ…、」

「ただ？」

はあ…。

やっぱ言わなきゃだよな。

「もう少し待ってやってくれないっすかね…。あいつが、少し大人になるまで」

ようするに、風間はまだ、女の子をどうやって扱ったらいいのかわからないお子様ランチなんだ。そーゆー純なところを俺たちやマドンナ先輩に知られたりするのがカッコ悪いと思ってるだけ。だから、あーゆー態度と言葉が出ちまう。

「大人かあ…。確かに、風間くん、見かけよりうんと`ガキンちょ、よね」

先輩はそう言って、俺に目配せをしながらいたずらに笑った。

「わかった。待ってみるね。あまり時間も無いけど…」

だよな。

先輩は3年だし、卒業までの間にあいつが女心を理解できるくらい成長すりゃいいけど…。

「先輩がやつを大人にしてやってください」

言ってから、しまった！と思った。

案の定先輩は、

「え！？」

と、しばらく固まってたし。

決して、決して深い意味で言ったんじゃない。何気に口から出てしまっただけだ。

「…そうだね」

先輩はくすくすと笑った。

——この人は見かけより大人だ……。

ま、俺は見事に失恋して、何故か風間と先輩の恋路の応援をする形になっちまった。
卒業するまでの間に、この田村くんにも熱い夏はあるのだろうか.....。
とりあえず、来週のプールは思いっきり楽しんでやることにした。

17 夏の日の徒然 その2

そしてプール当日。

だがいまいち気分が乗らない。

快晴の空と照りつける太陽とうだるような湿度の三拍子が揃った絶好のプール日和だということにもかかわらず。

俺たちの着替えはあっという間に終わり、今、待ち合わせをしたシャワーの前で女子たちを待っている。けど、これがやたらと長い…。もう15分は待ちぼうけだ。

「水着、水着、水着だあああ」

松山兄はさっきから、今にも鼻血を噴き出しそうな勢いで水着の女の子たちを目で追っている。弟は興味なさそうにため息なんぞついてるが、時々チラチラと盗み見してるし、柏木は背中に薔薇を背負い優雅にキリリと佇んでいる、ように見えるだけで、こいつも中身は兄と同じだということ最近のごたごたでバレている。

「うおっ、デカイっ！」

「…しびれる」

「ど、ど、とれどれ？」

通過するDカップのおねーさんたちを、遠慮なくじろじろと見てるこいつらはやっぱり同類項…。

で…、ここに、もうひとりいるはずの男だけど…。

『風間、お前はくんなよ！』

先週、ビリヤードのあと、風間に言ってやったさ。

ちきしょう、何で俺がこんなこと…って思ったけど、マドンナ先輩にあんなこと言っちゃった手前、風間のお子様ランチをせめて日替わりランチぐらいまでには昇格させといてやらないとっていう変な責任感が沸き…。

『何で俺が行っちゃいけないんだよ！？』

風間はぶーたれてたけど、

『行くなら先に誘われたマドンナ先輩と行くのが筋だろ？』

と突っ込むと、返す言葉もなく詰まっていた。

まったく…。

ここまで突っ込んでやらないとわかんないわけ？ほんと、お子様だ。

こーなると、あいつが今までとっていたポーズ全てが滑稽に思えてしまう。ま、可愛いってや

つだよな。

このあと、奴がどんなアクションを起こしたかは知らない。マドンナ先輩の誘いを受けたのか、家でくさってるか、そこまではさすがに面倒見きれないけど、そういうことで今日は風間は欠席。

「何で風間くん、来ないの～？田村くん、ちゃんと誘ってくれたの～？」

大島にはさんざん文句を言われた。

「女子がひとり余っちゃうねえ～。俺、両手でもいいぜ？」

と、いう兄に、

「別に、あんたたちの誰かとカップルになろうなんて最初から思っていないわよ！」

憎々しげに言い放ったのは、もちろんうるわしの小早川女史。

「お、俺だって、別に...！」

一応硬派の自己主張を試みた弟だけど、

「無理すんなよ、な！」

兄に肩を叩かれて、あっさりと前言を取り下げたようだ。かなりうきうきした感じで着替えていた。

男子4人に女子5人。

なにも、無理やりペアにならなくても、みんなでワーワーやればいいじゃん、というのが正直なところだ。何だか今、そういう気分にならないのだ。

しかし、夏休みのプールってのは人だらけだ。

そんで、やたらと目に付くいちゃいちゃカップル。

プールでコパトーンのなすり合いっこなんかすんなっての。オイル禁止って書いてあんだろーが。風間も今頃、どっかのプールでマドンナ先輩とあんなことしてるのかなあ、ちきしょーめ！

「お待たせ！」

浮き輪やビーチボールをやたらといっぱい抱えた女子たちが、やっと着替えを終えてやって来た。

しかしまあ...、女子のみなさん、健康体そのもののボディーです。あばら骨だらけでゴツゴツしているだけの自分の貧相な体を改めて見てしまう。夏のプールは、女の子が自分の魅力を存分にアピール出来る最高の舞台なんだろう。小早川でさえも可愛く見えるんだから。

「何、じろじろ見てんのよ」

そういう憎たらしい口さえ利かなければ、だけど。

とりあえず、女子が来るまでの間に俺たちが確保しておいた（させられた）木陰に荷物を置いて、

「さーて、どうする？」

大島が仕切ってみんなに聞くと、
「スライダーに行こうぜ。波のプールはカップルばかりだし、しょんべんプールに行ってもしょーがないし」

松山兄が提案した。

「なにそれ？」

思いっきり顔を歪めて兄を睨んだのは小早川。

「お子様プール…」

さすがの兄も、この睨みには弱い。縮こまって言い直した。

「相変わらず怖いな、小早川…。田村、頼むぜ」

兄はこそこそと俺に耳打ちをした。

頼むぜって…、なんだよ、それ。

で、スライダーに行くことに決まり、みんなで移動しようとした時だ。

「私、ここで待ってる」

D組の河本美紀が恥ずかしそうにうつむいた。

「あ、そうかあ！美紀はスライダーがダメだったんだあ～」

大島が取ってつけたように大げさなアクションを交えながら言った。

「スライダーがダメって？」

俺が聞き返すと、

「スピード&高所恐怖症なんだよねえ？」

また、不自然な言い方と言う。

「じゃあ、もしかしてジェットコースターなんかにも乗れないの？」

「え？あ、うん…」

河本は真っ赤になってうつむいた。

今どきのアクティブな女の子でスライダーやジェットコースターが怖いなんておもしれえ、と密かに思ってしまった。河本もC組の高橋もそんでもって大島も、バリバリの女子バスケット部員で活発なイメージがあるし。

「ここで荷物番してるから、みんなは行って来てよ」

「それじゃあ、せっかく来たのにつまんないじゃないのお～」

何で大島はさっきからそんな間延びした喋り方してるわけ？変だぜ、それ。

「かわいそうだから田村くん、悪いけど美紀に付き合っただけでいいよ？」

――は！？

「美紀い、田村くんと一緒に波のプールにでも行ってきなよお？」

おいおい！大島、勝手にそんなこと決めて！

それでいいのかよ！？

「うん。じゃあ、そうする」

――いいってか！？

「じゃ、そういうことで、田村くん、よろしくね！」

大島はにんまりと笑った。

俺は、てっきり小早川番に徹しなくちゃならないかと思ってたけど...、そーっと小早川を見ると怖い顔をして俺を睨んでやがる。そんで、

「いこ！」

顔を思いっきりブルンツと振って、先頭を切って歩き出した。

なんなんだよ、あれ！

そんでもって、この展開！

知ってるけど知らねえのと同じような河本と二人で、いちゃいちゃカップルがうようよの波のプールに行かなきゃなんねえなんて！

「田村くん、いこ？」

河本が言った。

頭のとっぺん近くで結わいてあるポニーテールがゆさゆさっと揺れた。

「あ、ああ...。あのさ？」

「なーに？」

「俺でいいわけ？」

バカみたいなこと聞いちゃった。

でも、喋ったこともないような俺と波のプールに行くよりも、まだ大島や小早川といた方が楽しいんじゃないかと思うわけで。

そーだよ。

大島のやつ、かわいそうなんて思うんなら、自分が一緒にいてやりゃあいいじゃん。いや、決して河本と一緒にるのが嫌だってわけじゃないけど、何か変だし不自然だろ？

「別にいいよ、田村くん」

別にいいよ、ね...。

まあ、深く考えすぎだな、俺も。

「じゃ、行こうか。けど...、スライダーが怖いなんて、おもしれえなあ」

思わず笑ったら、

「面白いかな？」

河本も白い歯を見せて笑った。

ふーん、結構可愛いじゃん。

ちょっとラッキーだったかも、って思った時だ。

向こうからひとりで歩いてくる女の子に何気なく目がいて、その後俺は固まっちゃった。だってそれは....、

「涼子ちゃん」

ほんの何ヶ月会わなかっただけなのに、ずいぶん大人っぽく綺麗になって、水着のセンスもスタイルもよくて...、ってのは余計だけど、とにかく、それは中学の時に好きだった涼子ちゃんだったからだ。

「田村くん！」

涼子ちゃんも俺に気がついたようだ。

「久しぶりだね？あれ？彼女〜？」

涼子ちゃんは、横にいた河本を見て俺のひじをツンツンつついた。

「いや、彼女じゃないさ。相変わらず非モテの田村くんです...」

これは事実。

「またまた、非モテだなんて！」

涼子ちゃんは、変わらない可愛い声でくすくすと笑った。

河本が横でたいくつそうに足を揺らし始めたんで、

「あ、中学の時の同級生なんだ...」

俺だって今日がはじめてのようなものの河本に説明をするのも変な気がしたけど、一応涼子ちゃんを紹介した。河本は涼子ちゃんに簡単なあいさつをすると、

「私はあっちで待ってるね」

プールサイドのベンチへ歩き出した。

「あれ？いいの？」

涼子ちゃんは気にしたみたいだけど、

「本当は今、松山兄弟たちも来てるんだよ。みんなスライダーに行っていてさ、彼女はスライダーが苦手だって言うからお付き合い」

と、説明した。

涼子ちゃんとは久しぶりだし、やっぱもうちょっと話したいって思ったし、河本の行動は俺にとっちゃありがたかった。

「相変わらず優しい田村くんだね」

「そうよ？優しい田村くんなのよ？」

なのに、何故かもてない...。

「風間くんも来てるの？」

そら来た。

やっぱ、涼子ちゃんが気になるそこだよな。

「いや、奴は今日は来てないぜ」

理由はさすがに言えないけど…。

「松山くんたちは元気？」

案外あっさりと風間から話題を変えた涼子ちゃんだ。ちょっと驚いた。

「あいつらは元気っていうか、バカっていうか、変わってないぜ」

「そっか。相変わらずなんだね」

目をニコニコマークの形にして笑う顔は昔と同じ。

毎日この顔を見ていた中学の頃がなつかしい。

「で、涼子ちゃんはひとりってわけじゃないだろ？」

さすがに、プールにひとりで来やしねえよな？友達がどっかにいるんだろう。

「ひとりだって言ったら、田村くん一緒にいてくれる？」

え！？

マジ！？

ひとりなわけ？！

「そりゃあ、あったり前だろ」

だって、涼子ちゃんだもん！！

「あの子がいるのに？」

あ、そうだ。

河本がいたんだよな。

でも、大島たちがスライダーから戻って来るまでの間だけだし、そんなの何とかなるだろう。

…って、もう、涼子ちゃんとプールを楽しむ気にいる田村くんです。

「彼女のことなら全然気にしないでだいじょーぶ」

「ほんと？嬉しいなっ！私ね、」

涼子ちゃんは、昔よくしていたように、微かに首を横に傾けて、

「中学の時、ずっと田村くんのこと好きだったんだよ！」

と、笑った。

「私ね、中学の時、ずっと田村くんが好きだったんだよ！」

.....は？今、なんて.....？

耳の中に水でも入ったんじゃないだろうか、と、俺は耳を下にして片足ケンケン飛びをしてみた。

けど、考えてみたらまだプールに飛び込んでもいないし一滴の水も出てきやしない。

「田村くん、どうしたの？」

涼子ちゃんは俺の奇行を不思議そうな顔で見つめて言う。

「いや...、今なんかとんでもねえことが聞こえた気がしたから」

「私が中学の時に田村くんが好きだったってこと？」

「そうそう.....って！？マジっすか！？」

「マジっす」

あ〜、なんて可愛い言い方...、なんて惚れ惚れしてる場合じゃないんだってば！

「.....ま、まったく、お、男の子を、から、からかかっちゃいけません！」

きっと俺の顔はゆでだこのように赤くなっているだろう。実際、洗濯板のような体は熱湯につかったみたいに真っ赤になってた。

「田村くん...、本当に気がついてくれてなかったんだね」

寂しそうに目を伏せる涼子ちゃん。

――ああああ、田村くんはそういう顔に弱いんだよお.....！

中学の時の涼子ちゃんはよくそんな顔をしてたっけ。

風間くん、どんな女の子が好きなのかな、とか、

風間くんに話しかけたけど無視されちゃった、とか、

そういうことを俺に話す時なんかに。

「だって、涼子ちゃんはずっと風間を...」

だから俺、言わずに諦めたんだぜ？

「それはね、そう言って田村くんの気を引きたかっただけなんだよ」

――はあ〜〜！？

「じゃあ、風間のことは全然...？」

「うん、全然！」

それは罪な話だぜ……。

涼子ちゃんはずっと風間オンリーだっと思ってたから、あん時だって自分の気持ちに蓋している
ろいろ応援してたんだぜ、今のうちに…。

「何でそんなこと……」

かなりマジにへこんだ。

「田村くんにやきもちを妬いて欲しかったから」

……そこまで言ってくれるなら、なんであの時に…。

と、大きなため息をついた俺に、

「怒っちゃった……？」

涼子ちゃんは心配気に言った。

「いや、怒ってなんかないぜ。涼子ちゃんに想われてたなんて嬉しいなあ、とかみしめてる
だけ」

「…そういうこと、中学の時に言って欲しかったな」

それはお互い様でしょ！？

……でも、どうしてあん時に互いに言えなかったことが、今こうやって言えるんだろう？中学
を卒業してからたった4ヶ月しか経っていないっていうのに。お互いに少しは大人になったって
いうことなんだろうか。

まあ、何にしても俺と涼子ちゃんは両思いだったってことだ！

俺にもようやく、春をすっ飛ばしていきなり熱い夏がやって来たってことか！？そのパートナ
ーが涼子ちゃんとかくりゃあ、願ったり叶ったり！今から中学の時の分まで取り返せばいいじゃん
！

……と、急上昇した時だ。

「おせーぞ、涼子」

野太い声がした方に顔を向けると、見知らぬ男が立っていた。

「あ、ごめん。中学の時の同級生に会ったからちょっとしゃべってた」

ふたりの言葉の発し方でわかったさ。こいつは涼子ちゃんの……、

「彼なの」

ええ。聞かなくてもわかります…。

なるほどね。

今は彼氏がいて余裕があるから、昔のことも`思い出、として語れたってわけだ。

「じゃあ、田村くんまたね！」

涼子ちゃんは、彼氏と手を繋いで行っちゃった。

急降下――。

中学の時に涼子ちゃんの想いに気づけなかった自分にムカついてしょーがない。
あん時気づいてりゃ、今、涼子ちゃんと手を繋いでだのは俺だったはずだから。

「あ、河本...」

ベンチで待ってるはずの河本の存在を思い出し、見回したけどどこにもいない。波のプールもざっと見てみたけどやっぱりない。

ずいぶん待たせてたからたいくつして戻っちまったのかもしれないと、木陰のシートに戻って見たけどここにもいない。

ま、ここにいればそのうち戻ってくるだろうから、俺はシートに寝転がって待つことにした。

それにしても逃した魚はでかかった...。

涼子ちゃんと両想いだったっていうのに付き合えなかったなんて。

ふつつと悔しさが募る。

.....なんてことを考えながら、たぶん俺は眠っちまったんだな。

ムギュッと踏んづけられて、

「痛て！」

飛び起きたらみんなが帰って来ていた。河本もいる。

「あ、悪い、見えなかった」

俺をふんづけたのはどうやら松山弟だったらしい。

「あと2、3回踏んでやって！」

なんて暴言を吐いたのは小早川...、だと思ったら何故か大島がおっかない顔をして俺を睨んでいる。

俺、大島になんかしたか？

「ちょっと田村くん、こっちに来て！」

大島に腕を引っ張られて立ち上がり、連れて行かれるままの木陰の隅に行った。

「おいおい、なんだっての？」

寝起きだから生あくびが出ちまった。

「田村くんッ！」

俺の腕を引っ張ってツカツカと前を歩いていた大島が、クルッと振り返って怒鳴った。その顔の怖いこと怖いこと。華麗な薔薇にトゲがあるってのは本当だ。

「はい！？」

「美紀を放っておいて、女の子と一緒にいたって本当なの！？」

あ...、それで怒ってるわけかあ。

けど、そんなに目を吊り上げて怒ることかあ？

だいたい、スライダーがダメっていう河本を勝手に俺に押し付けたのは大島じゃん。俺だってスライダーやりたかったのにさ。

...でもまあ、そのおかげで涼子ちゃんに会えたんだけど...

.....。

また思いだしちゃった。

涼子ちゃん...

はあ.....。

「田村くん、聞いているの！？」

「ああ、まあな...。中学の時の同級生に会ったから」

「もう、おバカ！」

おバカ！？

何で俺が大島に「お」までつけられたバカよばわりされなきゃならないわけよ？

「美紀はね、田村くんが好きだったんだよ？」

.....。

.....うそだろ？

「だから、今日のプールは美紀のために計画したようなもんなのに」

形よく尖った顎を突き出して大島は言う。

「だ、だって、そんなこと俺知らねえし...」

最初からそう言ってくれりゃあ、俺だってちょっとは態度考えたさ。

がしかし、河本が俺のこと好きだって話、本当に本当なのか？だって、今日の今日まで喋ったこともないんだぜ？

にわかに信じがたい。

最近ついてねえから、何か落とし穴があるような気がしないでもない。

女子揃って純情な田村くんをからかってるのかもしれない.....。

「美紀、田村くんが女の子とずっと喋ってて相手にしてくれない、ってベソかいてたよ」

「...ふーん」

ちょいと牽制。

「ふーんって...、それだけ？」

大島は呆れたって顔をして俺を見た。

「だってさ、涼子ちゃんとは中学ん時にずっと同級生だったけど、河本とは今日初めて遊んだようなもんだし……」

どっちを優先するかっていったらやっぱ…。

「は！田村くんってそんな奴だったわけ？」

そんな奴って…、

俺が言ってることって正当…だろ？

「美紀のこと、何とも思わないんだ？」

「ちょっと待てよ…、何とも思わないとか思うとかわかんねえよ。さっきから言ってるように河本とは今日まで喋ったこともなかったんだぜ？いきなりそんなこと言われたって困るってもんだ」

ちょいと風間っぽくいい男ぶってみた。

本当は別に困らないけど、本気にする方がバカみたいな話だし、これ。

河本のことは確かにさっきは一瞬だけ可愛って思ったさ。でも、それは単純に『可愛い』って思っただけで、マドンナ先輩の時みたいに胸が『ずきゅん！』って感じじゃなかった。

……ていうか、俺だってそうじゃん。

喋ったこともないマドンナ先輩に一目で惚れたじゃん。

……ってことはやっぱ河本が俺のこと好きってのは……、

バシン！！

いきなり、顔にビーチボールが当たった。

「痛て！」

「あ、悪い、手がすべっちゃった」

ビーチボールを投げたのは松山弟だった。

「もう4、5回ぶつけてやって！」

と、大島はまた言う。

さっきは2、3回だったのに数が増えてるってことはそうとう怒らせちゃったようだ。

「だから、ふたりだけになる時間をわざわざ作ったんじゃないの、鈍感！」

鈍感――。

この言葉は今日の俺には身にしみる……。

涼子ちゃんの想いに気づいてやれなかった俺。

大島の意図に気がつかなかった俺。

そうだよな。

こんな風に鈍感な俺だから、いつまでたっても非モテライフから抜け脱せないんだ。

「...んじゃ、もう一回みんなでスライダーに行けよ。今度はちゃんと河本番すっから」
いつまでもマドンナ先輩や涼子ちゃんへの失った恋に沈んでいてもしょうがない。

男田村優作、前向きに生きなくては！

「その必要はもうないみたいだわ」

大島はサラリと言った。

「は？」

「後ろ、見てみなよ？」

大島に言われて振り向くと.....、

——うそだろ！？

河本と松山弟がふたりして波のプールに向かっていく後姿が見えた。

なんか、すごいいい雰囲気で。

「なんで次郎？！」

あいつ、一応硬派だぜ？

それがどうして河本とツーショット？

「松山くんはずっと美紀と一緒にいてくれたの。どこかの誰かさんとは大違い」

弟があ！？

兄の間違いじゃん？それ？

.....その兄は、吉岡桂子と並んで売店の方に歩いていき、柏木もクラスが同じ高橋郁恵といい
雰囲気で喋っている。

いつの間にかみんなツーショット。

俺と大島と小早川を除いて.....。

「なにがどーなってんだか...」

と、俺が言いかけると、

「さてと...、環い、もう一回スライダー行ってこよう？」

言いたいことだけ言った大島は、一方的に話を終わらせて小早川と一緒に引っしまった。

「じゃ、私たちも行こうよ？」

高橋と柏木も去った。

弟と河本はいちゃいちゃカップルうようよの波のプールで仲よさげに楽しんでる。

兄は売店のパラソルの下で吉岡と仲良がかき氷を食ってる.....。

——俺ひとりじゃん.....。

暑いのに寒い。

なんて寒いんだ。

涼子ちゃんに河本、すぐそこまで来ていた俺の熱い夏が――。

ものすごい脱力感に襲われてふらふら～っとよろけたとき、べちゃっとした冷たいものが背中に当たった。

「今度は何！？」

振り向くと……、

「風間！？」

「た、田村あ！？」

ふたつのアイスクリームを手にした風間が電信柱みたいに突っ立っていた。俺の背中にくっついたのはアイスクリーム。風間の手のそれが見事につぶれてる。

「お、お前たちもここだったのか…？」

お前たちも、ってことはと一ぜん風間は…、

「風間く～ん！」

可愛い声を出しながらこっちに走ってくるのは、水色の水着姿のマドンナ先輩。

なんだかんだ言って、結局風間はこーなったってわけか……。

ちきしょう、あの水着姿を独り占めしやがって。

……別にいいけど、今の俺にしてみりゃ踏んだり蹴ったりって感じだぜ…。

「なにやってんだ、ひとりで？」

「ほっとけ…」

あ～あ、と言いながら風間は俺の背中にくっついたアイスを恨めしそうに覗き込む。

「きゃっ！」

小さな叫び声がしたと思ったら、いきなり顔にオレンジ色の水が降ってきた。

ツンとした柑橘の匂いと甘い味。

「あ～あ……」

風間がため息を吐いた。

マドンナ先輩がつまづいて転びそうになり、両手に持ってたオレンジスカッシュの紙コップが俺に向かって飛んできたってわけだ。

ひりひりする目をそっと開けると、転ぶ直前を助けた風間と助けられた先輩がしっかりと抱き合いながら、顔からオレンジの雫を滴らせる俺を見ていた。

「田村、OK……？」

「……」

躓いて転んでその上から踏みつけられたような気分…。

しばらく立ち上がれそうもない、夏のある日の田村くんでした。

19 恋愛ブラザーズ

新学期が始まって一週間。

相変わらずの学校生活と相変わらずじゃない松山兄弟。

「太郎くん、行こう」

昼休みになると、毎日のように兄を誘う吉岡。

ふたりは仲良く弁当を持って中庭の木陰に消えていく――。

それだけじゃなく、

「次郎くん、行こう」

わざわざD組から弟を誘いに来るのは河本。

「おお」

カッコつけて出て行く弟。

こっちは校庭の隅の梅の木の下が定位置になっているようだ。

――信じられねえっっっ！！

って最初はもちろんぶっとんだ。

やつら、あのプール以来、夏休みの間も何回も誘い合って映画に行ったり海に行ったり、熱い夏を過ごしたらしい。

で、新学期初日の下校時、兄と吉岡、弟と河本は当たり前のように一緒に帰って行きやがった。

「どーなってんの、あれ？」

状況が分かっていない風間が首を傾げたのも無理ない。

俺だってその時は はてな？ だったわけだから。

次の日ふたりに突っ込んで、

「信じられねえっっっ！！」

風間とふたりでぶっとんだ。

しかももっと信じられないのが、`つきあって、の言葉を最初に発したのはそれぞれ吉岡と河本だっていうんだから、悪夢か天変地異かノストラダムスの予言的中の前触れじゃないかと思う。

河本が俺のこと好きだったという大島の話、ありややっぱ冗談だったんだな。非モテの俺がほいほいひっかかるんじゃないか。じゃなかったとしたら、女の変わり身のすばやさにはた

ただただ感心するしかない。

しかし、よりによって松山ブラザーズが兄弟揃って彼女持ちだなんて、目の前で現実を見てたって今だに信じられない。いや、信じたくない。

「太郎くん、次郎くんかぁ。いいねえ〜」

風間が半分小ばかにしたように言った。目は完全に`ぷっ、と吹きだしている。けど、
「このクソ暑い中、何もわざわざ直射日光の下で昼メシ食わなくたっていいのになぁ」
という、風間の意見には強く同意したい俺だ。

男4人が教室の窓際を陣取って弁当食うのもなんだけど、風間とふたりってのはもっとんな気がしないでもない。が、しょーがない。いつもの場所に移動してふたり寂しく弁当箱を広げようとした時だ。

「響く一ん！」

教室の後ろのドアから風間を呼んだのはもちろんマドンナ先輩だった。

「...響く一ん、ねえ...」

思わず言葉に出ちまった。

まあ、プールにだってふたりで来てたし、な。

風間はバツが悪そうに俺を見て、咳払いをひとつ落とすと、
「なに？」

ぶっきらぼうに返事を返した。

「お弁当作って来たよ。屋上で一緒に食べよう？」

風間は俺をチラッと見る。

奴が次にマドンナ先輩に発する言葉を瞬時に悟った俺は、風間が口を開く前に、
「行けよ」

と言ってやった。

先輩のしょんぼりした顔を見るのはつらいし。

風間は、

「...しょーがねえなぁ」

と、呟いてマドンナ先輩について行った。

――なーにが、しょーがねえなぁ、だよ、ぼけっ！！

しょーがねえのはお前だろお！

響く一ん、なんて呼ばれてるこの期に及んでまーだ素直になれないってかっ！

……と、心の中で叫んだら、はあはあしちまった。

松山兄弟に風間も消え、いつもの窓際には俺ひとり。

風間とふたりで弁当ってのもなんだったけど、ひとりはもっとなんだ。

ふと、視線を感じた方に目を向けると、そこでは大島と小早川がふたり無言で弁当を食べていた。

そうか。

こいつらもいつも一緒にいた吉岡が抜けちまったんでちょっとアレなんだな。大島なんて妙にむしゃくしゃした感じだし。

「田村くん、ひとりになっちゃったねえ。一緒にお弁当食べる？」

信じられないほどの優しい口調で俺を誘ってくれた小早川だけど、また非モテの俺をからかってるだけなんだろう。余計に情けなくなった。

「仲間の幸せはボクの幸せ！」

心にもないことを言い放ち、俺は弁当箱持参で教室を出た。

C組を覗くといいた柏木くん。

本を片手にひとりでランチしている。

何故か心底ほっとして、柏木の目の前の席にどかっと座り込み、

「邪魔するぜい」

さっさと弁当箱を開いた。

柏木は本に伏せていた目をチラッと上げ、

「俺たちだけになっちゃったねえ。風間くんはともかくとして、松山くんたちまでも彼女ができちゃってさ」

と、言いながらパタリと本を閉じた。

「とかなんとか言いながら、柏木だって高橋といい感じなんじゃねえの？」

プールでは松山兄弟に負けずと劣らずのらぶらぶぶりを展開していたし。みんなそうやって俺を裏切っていくんだ。

「いや？高橋さんとは別に何でもないよ？」

あら、意外。

「奴らはあの後からも誘い合っているいろいろやってみたいだぜ？」

てっきり、そこに柏木もまざっているんだと思ってたけど柏木は首を振った。

「なんか、毎日会ってたみたいだね、松山くんたちと彼女たち」

マジッ！？

「部屋に呼んだとか呼ばないとか…」

おいおいっ！

「どっちにしても、この夏はいろいろ忙しかったって言ってたよ」

.....。

予鈴が鳴って教室に戻ると、兄と吉岡は窓際の机を挟んで仲良く喋っていた。弟の方はまだ帰ってきてないし、ちょうど今戻ってきた風間は俺に目を合わせないようにしてさっさと自分の席に着く。

恋愛街道まっしぐら――。

ちょっと前の俺たちにはまったく無縁な言葉だったけど、今じゃ俺を除いた奴ら三人はまさにこの言葉がピッタリって感じだな。俺はそこに乗り遅れたってどこか...

まあ別にいいけど、正直言って.....、

――めっちゃ、悔しい！

こいつら恋愛ブラザーズに囲まれた俺は、これからどーすりゃいいのさ...

そして、部活終了後の下校時――。

「んじゃな、田村くんたちっ！」

松山兄は「田村くん、」を強調して言いながら、吉岡が待っている部舎前の花壇に向かった。そして、弟もD組の河本を迎えに消え、音楽室には俺と風間と柏木が残った。

「やっぱ信じられねえ状況だよなあ...」

風間は残された俺たち3人を見回した。

けど、風間だって校門まで行きゃマドンナ先輩が待ってるに決まっている。

「風間くんも行きなよ。先輩を待たせてるんでしょ？」

気を利かせた柏木が言うと、

「俺？待たせてなんかないぜ？」

風間はいつものようにサラリと答えた。

...そーだろうけど先輩は「勝手に待ってる、んだろーがあ。」

「柏木さあ、今日ちょっと付き合えよ」

俺は柏木を引っ張って音楽室を出た。

風間は鍵を職員室に返しに行くはずだし、その間に先に帰っちまえ。ちきしょうめ。

「おい、待てよ田村！俺も付き合うって！」

風間は俺たちを追いかけてきたけど無視。

こいつは少し松山兄弟を見習って自分に素直になるべきだ。

「おいおい、田村あ」

階段の踊り場で、職員室に向かわなきゃならない風間は立ち止まった。

「また明日な！」

「また明日！」

俺と柏木は風間をそこに残したまま階段を下りてきちまった。

で、校門を出るとやっぱりマドンナ先輩がひとりで立っていた。

「風間もすぐに来ますから」

と、声をかけると、

「ありがとう」

にっこり笑う先輩。

今までのような不安な目はなく、どこか余裕がある笑顔だ。風間とはうまくいってるんだろう。まあ...、`風間くん、`がいきなり`響くん、`にもならないだろうから、この夏休み中にそれにふたりは進展したってことだよな。

「んじゃ、失礼します」

風間がやってこないうちにさっさとその場を去った。

非モテの田村くんにとっちゃ、やっぱ目の毒には当たりたくねえし。

いつもは5人でぞろぞろ歩いてたこの道も、柏木とふたりだと妙に広く感じる。

これからきっと毎日こうなんだろーなあ。どっちなかに彼女ができるまで。じゃなきゃ、奴らの誰かが彼女と別れるまで.....。

「で、どこに付き合えばいいの？」

いきなり柏木が聞いてきた。

「あ、あれは...」

ただそう言っただけ。

じゃないと、校門で待ってるマドンナ先輩と風間の、またいつもの展開を見る羽目になると思ったし。俺たちがいちゃ、あいつ絶対にカッコつけるからな....。

「ゲーセンでも行く？」

「あ？だってお前はゲーム音痴じゃん」

「だから、`付き合う、って」

じい〜ん。

柏木っていい奴。

こいつがいてくれてよかった、と、今心の底から救われた気がした。

悔しいけど、羨ましいけど、せつないけどしょーがない。

しばらくは、奴ら恋愛ブラザーズの行く末を生温かく見守ってやるぜ。ちきしょーめ。

「ナオヤー！！」

女の子の黄色い歓声を浴びて華麗なリズムの稲妻を走らせているのは、我がブックキャッスルのドラマー柏木直弥。

と言っても、今は『KING』ってバンドのドラマー `ナオヤ、` だけど。

KINGは柏木の兄貴が引っ張ってる、地元じゃかなり名が通ったアマチュアバンドで、今日は地元コミュニティホールでの単独ライブ。柏木の夏休みは週2回の部活日以外は全て、このステージのための練習に費やされたらしい。KINGはプロを目指して活動しているバンドなんでさすがにレベルが違う。柏木の叩くドラムも俺たちとやってる時より間違いなくキレてる。キャーキャーと、羨ましいほどの声援の中でスポットを浴びてるナオヤはもろ稲妻を呼ぶ男だ。

俺と風間は春の公民館ライブを見たけど、松山兄弟は初めて見る柏木のアナザーフェイスを、口を開けて呆然として見つめている。兄なんかは瞬きするのも忘れていたようで、演奏が終わった後、しきりに目をこすっていた。

「ほお～、こりゃ噂通りスゲエや...」

弟が呟くと、

「.....すげえよ...。女の子のファンがいっぱいいて...」

と、兄は頷いた。

.....そっちかい！

...けど、俺はさっきからどうも気になってる。

柏木の顔にいつもの笑いが無いってこと。

真剣なのはもちろんわかってる。

でも、なんていうか...、機械的...。

「なんかあったのかな、あいつ...」

風間も同じことを感じたらしい。

じっと柏木を見つめて呟いた。

◇

ステージが終了したあと、俺たちは揃って柏木がいるバンド控え室に行った。

柏木以外のメンバーは、スーツを着た見知らぬオッサンを取り囲んで何やら真剣な顔で話を聞いていた。

が、柏木はメンバーたちからひとりだけ少し離れた場所で、めずらしくふてくされた様子で、ファンの子からの差し入れらしい弁当をもくもくと口に運んでいた。

俺たちがぞろぞろ入って行くとスーツを着たオッサンが、

「キミたちは？」

気取った口調で訊いてきた。

「柏木の友人です」

「あっそう。ならそのドラマーを説得してくれる？」

俺たちが柏木に何を説得すりゃいいのかはさっぱり読めなかったけど、オッサンの横柄な言い方が気に入らなかった。偉そうにふんずり返って、いったいこのオッサンは何様だ？

「プロデューサー兼社長ってとこだな...」

風間が俺に耳打ちした。

「プロデューサーって...？」

「たぶん、インディーズでアルバムなんかを制作してる事務所の社長兼任プロデューサー。KINGにプロデビューの話でも持ちかけてるんじゃないか？」

言われてみればそんな感じ。

オッサンはやたらデカイ話を、さも「俺は凄いんだ、といった感じでメンバーたちに語ってた。

地方TV局に出演してどーたらこーたら、

俺の知り合いのなんたらかんだらが地方ラジオにいるからどーたらこーたら、

俺の親友の誰々が持ってるスタジオを借りてレコーディングがあーだこーだ、

と、オッサンはデカイ声で誰でも知ってる超有名人を「俺の親友、とか言いながらKINGのメンバーたちに向かって喋ってる。メンバーたちはそれを一言も聞き漏らすものか、といった風に、俺にしてみればかなり胡散臭い話に真剣だ。けど、柏木だけはオッサンには見向きもしないで弁当を食っている。それは、思いっきり「興味ないね、という態度に見えた。

風間が、柏木が食ってる弁当箱からうさぎりんごをひょいとおつまんで、あーんと自分の口に放り込み、

「...かひわぎ、俺たちに説得されたひ？」

と、口をもごもごさせながら言った。

「あ、最後の楽しみにとっておいたうさぎりんごを...」

柏木は鋭い目で風間を睨んだ。

「あらとおいておいたの？わりいわりい...」

「...あのオッサンの言ってること、なんか信用できねえよな？やたらと話がデカイし、俺の知り合いとか俺の親友とか、結局スゲエのはそいつらで自分じゃねえんじゃない？」

今の柏木は触ると感電しそうなくらいにピリピリしている。うさぎりんご一個が元でもぶちキレそうなので、そうなる前に俺は話を戻した。

「いや、ギョーカイの人ってみんなあんな感じ。倉田さんが言ってることは全部ホントのことだよ。春の公民館ライブのあとにあの人からCD制作の話をもちかけられてさ。兄貴たちはノリ

ノリ...」

マジ...？

じゃあ、地方TVがどーのとか、地方ラジオがこーのとか、レコーディングがあーだったのは全部実現可能な話なのか。

「すげえじゃん、それ...」

松山兄が呟いた。

「何でお前は乗らないわけ？」

と、弟。

「.....」

柏木は松山兄弟をギロツと睨んだだけで答えなかった。

「それじゃ、来週から話を具体化させるから調整しといてよ。ナオヤくんも頼んだよ！」

オッサンは最後に柏木の肩をポンポン叩いて控え室を出て行った。

柏木を除いたメンバーたちは揃って控え室の出口で見送っていた。

「...頼んだよ、じゃねえんだよ...」

柏木が明らかにふてくされた言い方で呟いたとき、柏木の兄貴がツカツカとやってきて、

「ナオヤ！わがまま言うのもいいかげんにしろよッ！」

怒鳴りながら柏木の胸倉をつかんだ。

すると柏木は、

「わがままじゃねえよ！俺はやらないって言ってるだけで、兄貴たちが倉田さんの話に乗るのは別に文句言っていないじゃないか！」

と、言い返した。

「お前が叩かなくて誰がドラム叩くんだよ？！」

「あの人に探してもらえよ。プロのバンドなんてみんなそーやってメンバー集めてるだろ？とにかく、俺はプロはやんない。絶対やんない！」

柏木は兄貴の手を振り払うと、プイと顔を背けて控え室を出ていっちゃった。

「もったいねえ...。やりゃあいいのに...」

と、呟いた兄に、柏木の兄貴は、

「そうだろ？そう思うよな？だったらあいつを説得してくれないかなあ？」

さっきのオッサンと同じことを言う。

とりあえず、俺は柏木を探しに控え室を出た。田村が行きましたんで、っていう兄が答えた声の中から聞こえた。

◇

控え室を出て短い廊下を行くともうそこは玄関ロビーっていう狭いコミュニティーホール。受付にいるのもお姉さんじゃなくておばちゃんだ。

ライブをやった会場ホールは可動式の椅子をとっばらえばフラットなフロアになって、普段はここでジャズダンス教室があったりなんかの式をやったり、いろんなことに使ってるらしい。KINGのライブは去年もここで行われたらしく、今日もそうだけど会場がまあまあ一杯になるぐらいのファンが集まった。

公民館ライブは複数のバンドが出演するからそれぞれのファンたちが一度にやってくるんで一杯になる。ここは公民館のホールよりは狭いけど、単独ライブであれだけの客を集められるKINGはやっぱそれだけでも力のあるバンドだってことがわかる。

柏木は玄関ホールでファンの女の子たちに捕まっていた。

学校でのヤツは全然目立たないし、俺たちという時以外はいつもひとりで本を開いてるだけで女の子の「お」の字もないってのに、ナオヤだとこれだ。言葉遣いもまるで違う、変身仮面ドラマー、だ。

柏木は俺に気がつくのと、助かったというような顔をして、女の子たちと別れて足早にこっちに向かってきた。こーゆー時、松山兄だったらきっと、`ちっきしょう、田村の奴、いい時に来やがって、なんて思いっきり不愉快な顔を俺に向けるだろうに。

「いいのか？あの子たち、お前のこと待ってたんじゃないの？」

「うん、いいんだ。もう十分話したしね」

「ふーん……」

俺に対して冷たい視線を浴びせる彼女たち。その目が妙にしゃくにさわる。

へへん、いいだろ～。

お前たちのナオヤくんは俺がひとりじめしてやるぜ！

「で、田村くんは俺を説得しに来たわけ？」

「…あ？」

馬鹿なことと思ってた自分が急にこっぴどかしくなった。

「…い、いや。別に説得しようなんて思ってないぜ。第一俺、よくわかんねえし」

自動販売機で缶コーラを買って柏木に投げてやると、ありがとう、と笑ってそのままロビーのソファに座りこんだ。俺も自分のコーラを持ってその隣に座る。

「今日の柏木は感電しそうだったぜ？」

「…そうかもね。倉田さんの顔を見た途端になんかムカついてさ。夏休み、他のことを置いてまで練習してきたのに、またプロの話をされるのかと思ったらさあ」

「他のこと置いてまで練習したんだから、プロの話されていいようなもんじゃん？だってKINGはそれを目指してんだろ？」

「兄貴たちはね。でも俺は別にそんな夢持ってやってきたわけじゃないし」

いまいちわかんない柏木の事情。

柏木がKINGでドラムを叩き始めたのは中学1年の時って聞いたことがある。親父さんがずっと昔からドラムを叩いてる人らしく、柏木は3才の時からスティックを握り締めてきたそう。風間が絶対音感があるとしたら柏木は絶対リズム感の持ち主。なんたって、1、2、3って時計を見ないで延々と正確に秒を計れるんだからさ。

「やってみりゃいいじゃん？チャンスだろ？」

「やだ」

「...なんで？」

「学校に行けなくなる」

「...は？」

「地方のTVとかラジオでやるってなると当然地方にいなきゃならないわけ。兄貴たちはみんなフリーターだからいいけど、レコーディングするんだって学校に合わせてくれるわけじゃないし、そーなると俺は月に何日も欠席早退をしなきゃなんないでしょ？」

「...まあ、確かに」

「だからやだ」

高校生にとっちゃそれは大きな問題だってのはわかる。

わかるんだけど、もしも俺だったらそれが断る第一の理由にはならないかも...、とは思った。「兄貴たちとバンドやってきたのは俺がたまたまドラムが叩けるからってだけでさ。音楽もドラム叩くのも好きだけど、他にだってやりたいことあるから兄貴たちみたいにKINGだけに熱中してらんない。春からずっとそうやって訴えてんの兄貴はちっともわかってくれないし」

柏木はずっとそのことで兄貴たちとは揉めてたらしい。俺たちとやってる時はちっともそんなそぶり見せなかったのに。

...けど、

わかんねえ...だろうな、たぶん。

兄貴の頭の中はきっと、手が届くとこのプロへの夢でいっぱいだろうし、やっぱKINGに柏木は必要不可欠だって思うし...。

「俺にはKINGよりも大事なもんがあるし...」

「それが学校ってわけ...？」

冷めてるって言うかなんていうか...、やっぱちっと変わってる柏木くん。

「うん。もっと言えば`部活、」

.....えっ！？

「体育祭での初ステージはもう2週間後だし、その1ヵ月後には文化祭、そのあとすぐに公民館ラ

イブだよ？」

「...ああ」

「俺、そっちやってる方が10倍も100倍も楽しいんだ。やめらんないよ」

マジ...？

それが第一の理由ってわけ...？

「...プロデビューのチャンスを蹴ってまでも...？」

「あたりまえでしょ？楽しいほうを選びたいに決まってるじゃん」

...嗚呼、柏木くん！

変わってるなんて思って悪かった！

冷めてるなんて言って悪かった！

熱いぞ熱い！熱すぎるッ！

そうだよ。

俺たちにだって柏木直弥は必要不可欠なんだ。ドラマーとしてだけでなく、仲間として！

ああ、今の言葉、風間や松山ブラザーズにも聞かせてやりたかったなあ！

.....って思った時だ。

「柏木い～！お前って奴は...！」

どこからか松山兄がすっ飛んできて柏木に飛びついた。

で、後から弟も同じようにして。

まさかとは思ったけど風間までもがその後に続き。

そーなったら俺も...ってんで。

柏木ひとりに俺たち4人が次々と団子になって絡みつき、どっかのクサイ青春ドラマのワンシーンをここで再現して。案外それにマジで酔ってたりもして。

「ガキどもが...」

柏木の兄貴が呆れたように呟いた声が聞こえた。

しょーがないじゃん。

俺たちまだ本当のガキだし。

こーゆーのが何よりも素晴らしいって思ったりしてるし。

「ガキにはガキの世界があんの。兄貴たちはオトナの世界で頑張れよ！」

柏木がそう言うと、兄貴は、

「...ったく、もうお前とはやってらんねえ。ガキの世界でオママゴトしてろ」

と呟いて行っちゃった。

「うん、そーする！」

そう柏木が返すと、兄貴は背中を向けたまま右手を上げた。

俺たちは顔を見合わせてガキのように笑う。

たった今、`仮面ドラマーナオヤ、はただの柏木直弥に戻った。

変身ベルトも取り上げられて、もう`ナオヤ、には変わらない。

さっきのファンの子たちには申し訳ないけどそういうことだ。

「柏木い〜！」

何だか妙に嬉しくて馬鹿みたいに叫んでた。

玄関ロビーでいつまでも青春ごっこをやってる俺たちを、受付のおばちゃんがニコニコしながらずっと見ていた。

21 キャッスル初ステージ

いよいよ今日はブックキャッスルの初ステージ。

体育祭が終わったあとの後夜祭で全校生徒の前でのライブだ。といっても、`ライブ、ってコトバを使うとお堅いセンスたちがうるさいんで`軽音楽部(キャッスル)発表会、って後夜祭のポスターには書いてある。

一週間前、後夜祭実行委員が刷り上ったばかりのポスターを持って来た。

「発表会かよ～っ！だっせえ～っ！」

わめいたのはもちろん松山兄。

「ピアノの発表会じゃないんだから、もっとマシな打ち出しできねえのかよ？」

「仕方ないだろ？やる前にあんまり派手な打ち出ししちゃうとセンスのチェックが入るぜ？ライブそのものを中止させられるよりはいいだろ？」

実行委員はもっともなことを言った。

「こんな打ち出しで客が集まるのかよ？」

「それは大丈夫でしょ。最初から集まってるんだし…」

と、風間。

後夜祭は、体育祭のあとそのまま校庭で行われることになっているから、俺たちのライブも当然野外ステージで、というわけだ。

「生徒たちが乗るか反るかはキミたちの実力次第、ということで」

「かぁ～っ！厳しい～。発表会なんて笑われそうなりスクを背負っての初ステージかよ…」

まだぶつぶつ文句を垂れてる兄の横では柏木がポスターを不服そうな顔でじっと眺めていた。

「これさ、間違ってるよ…」

柏木が指をさした場所に顔をくっつけてみると、

「`キャッスル、じゃなくて`ブックキャッスル、。`ブック、が抜けてるよ…」

柏木は俺に訴えた。

「あれ、ほんとだ…」

「え？それは悪かったなあ…。でも、もう刷っちゃったからこれでいい？」

これでいい？

って、実行委員さん、名前間違っちゃいけないでしょう…。

名づけ親の柏木はもろ納得いかない、といった顔で実行委員を睨んだ。

「この際だからさ、このまま`キャッスル、に名前変更ってのはどう？」

なんてことを言い出したのは松山弟。

あんっ！？

と、柏木は弟に顔を向け、
「次郎くんはブックキャスルが気に入らないわけ...？」
と、鋭い睨みをきかした。

「あ、いや、そーゆうわけじゃないけど...、ほら、こないだまではサンドキャスルに一時改名状態だったしさ、ただのキャスルだけの方が面倒なくていいんじゃないかな...なんて、いえ、何でもありません...」

柏木の睨みに弟の声もだんだんと小さくなり、実行委員には刷り上ったポスターの全てに手書きで「ブック、」を入れ直すことを約束させるという細かいすったもんだはあったけど、何とか無事にこの日を迎えたってわけだ。

体育祭の方は滞りなく行われた。

昼休みの応援合戦じゃ兄が長ランを着て張り切ってたし、体育馬鹿の弟は大トリの男女混合クラス対抗リレーの選手になっていた。とにかくこのふたり、彼女の前でいい格好を見せようと、短距離もハードルもムカデ競争も二人三脚も全ての競技において目の色変えて張り切っていた。我が1年F組の敢闘賞をふたりに捧げたいくらい。単純な奴らだ。

そのおかげでかどうかはわからんけど、1年から3年までのAからFまでのクラスを縦割りにして優勝を競う体育祭でF組は見事優勝。まあ、俺もそれなりに頑張った楽しい体育祭だったさ。昼休みに弁当を持って来てくれる彼女はなかったけどな。

ちなみに風間はしっかりとマドンナ先輩と弁当食ってました...。

ということで、本当にいよいよです。

体育祭実行委員と後夜祭実行委員が手を合わせて校庭に組んだ簡易舞台櫓が俺たちが立つステージだ。

「俺、ここで歌う...の？」

紅白の幕が張ってある、まるで盆踊りの櫓の高さを低くしたようなそのステージを見て風間は呆然とした。確かにこれは、かっこつけの風間でなくてもこっばずかしい。

しかし、俺と風間が顔を見合わせている中、松山兄は例によって大はしゃぎだった。ついこの間、発表会なんて笑われる、とわめいてたことなどもうすっかり忘れてる。

「すげえじゃんこれ！よく考えたよなあ〜っ！」

「器材運ばなきゃ！ほら、風間くんも田村くんもぼっとしないで手伝ってよ！」

柏木までるんるん気分ではしゃいでる。

それからはもう大騒ぎ。

音楽室にあるドラムや音響の器材を、実行委員たちの手も借りながらステージに運んだり線を繋いだり、とにかく初めてのことをみんなしてあーだこーだと言い合いながら準備を整えた。

「くれぐれも馬鹿騒ぎはしないように」

セッティングをしている横から水を差してくるお堅いセンセもいたけれど、もうここまで来たらそんなことは無視でしょ。たんなる発表会だと思ってる奴らに俺たちの熱いステージを見せてやるっ！

.....紅白の垂れ幕の上、で。

「ところで今気がついたんだけど、俺たちジャージが衣装...？」

セッティングが全て整いあとは始まるのを待つばかり、って時になって風間が言った。

そうだよ。

体育祭の直後だから俺たちはエンジ色の学校ジャージを着たままだった。

「紅白幕の盆踊り舞台の上でエンジジャージを着た `ブックキャッスル(本城)、...。キマリ過ぎだあ。この初舞台のシチュエーションは一生思い出に残りそうだ...」

俺が呟くと、

「絶対にイヤあ〜っ！コミックバンドじゃねえんだからっ！」

風間は絶叫に近い叫び声を発し首をぶるんぶるんと振った。

「おいみんな、着替えに行くぞ！」

「着替えるって...？俺何も持ってきてねえぜ？」

「制服でいいよ制服で！ジャージよりはマシだぜ！」

「俺は別にジャージでもいいけど...」

と、柏木が言うと、

「お前は一番後ろで座ってっからいいだろ。でも、俺は前面！一番前！スタンドボーカル！」

風間はむきになってわめきながらさっさと校舎に向かって歩き出した。

「風間くんはきっとアレだね」

柏木が俺にそっと小声で言った。

「アレ？」

「マドンナ先輩が見てる前だから」

言われてみてそりゃそうだよなあ、と納得した。

「チッ！意地でもジャージのままやりたくなかった...」

「田村くんもなかなか意地悪だあねえ〜」

はい、意地悪です。

どーせ非モテの田村くんですから。

と、まあ直前までバタバタしてたけど、日も暮れてキャンプファイヤーの火が灯った頃にはすっかり準備も整った。

今、ステージの上では3年の実行委員長があいさつをしている。

これからキャンプファイヤーを囲んでフォークダンスがあり、その後はカラオケ大会や漫才なんかがあり俺たちの出番は一番最後。それまでの間はとりあえず初めての後夜祭を楽しむことにした。

目指すはもちろんキャンプファイヤーのフォークダンス！こんな時ぐらいしか女の子と堂々と手を繋ぐなんてことは出来ない非モテの田村くんなんです。

いざ、松山兄弟、風間、柏木みんな揃ってキャンプファイヤーに突っ走るか、って思いきや、「きょ〜うくんっ！」

風間を呼び止めたのはマドンナ先輩。

はい、風間くん退場です。

そーなると、やっぱ兄弟も...

「俺たちフォークダンスはパス」

...でしょうなあ。

彼女がいるのに他の女の子と手を繋ぐなんてとんでもないっすよね、やっぱ。

「いこーぜ、柏木」

「ラジャーッ！」

ボクの心の友は柏木くんだけでいい...

で、柏木とふたり、オクラホマミキサーの輪に入ろうとした時だ。

「田村くん！」

と、呼び止められて振り向くと小早川が立っていた。

「なに？」

「これから軽音楽部の発表会があるんだって？」

「発表会っていうかさあ...」

こんな時にめんどくせえ、と思いながらも小早川に軽音楽部の実態から発表会と打ち出しをされるまでのいきさつを説明している間に、いつの間にかフォークダンスタイムは...

「あれ！？もう終わり？！」

「あ、そうみたいだね。じゃあね！発表会頑張って！」

お前は俺の話を何聞いてたんだよっ！

発表会じゃなくてライブだって説明しただろーがっ！

しかも、ささやかなお楽しみタイムを邪魔しやがってっ！

「あれ？田村くん参加しなかったの？」

柏木がにこやかに帰ってきた。

「さ、そろそろスタンバイしよう！いよいよだね！」

「...ああ。いよいよだね...」

まあ、いいか。

今夜のメインはフォークダンスじゃなくライブだし。

とにかくステージを成功させなきゃ、だよな。

今、舞台上でやってる漫才に思い切りシラけてるこの生徒たちを酔わせてやるのが、今日の俺たちの使命なり！

.....けど、

素人漫才はまったく受けず、校庭にいる生徒たちも方々に散ってしまっていた。舞台の周囲にいるのはほんの一握りの生徒と、何故かくだらないところで大ウケしている年寄りセンセがふたりだけ。

この散った観客たちを、再びステージ前に集めるのは至難の業だ。しかも、奴らは発表会だって馬鹿にしてるだろーし...

「だいじょーぶだよ、田村っ！心配すんなっ！」

風間が俺の肩をぽんっと勢いよく叩いた。

「し、心配なんかしてねえよ...」

と、言いながらも不安は隠せない。

このままシラけたライブになっちまったらどうしよう？

俺って案外小心者だ。

「田村くん、リラックスリラックス！」

柏木にまで励まされた。柏木は場数を踏んでるだけあって風間よりも余裕の顔だ。

「さてさて、生徒諸君っ！いよいよ後夜祭も軽音楽部の発表会をもって終えんとなります！」

いつの間にか漫才が終わっていて、実行委員長が舞台の上でマイクを握っていた。けど、生徒たちは委員長の話なんか聞いてやしない。校庭の隅、花壇の前、部舎の前に固まって、自分たちの仲間内で盛り上がっている。

「じゃ、軽音楽部のみなさん、宜しくお願いします」

委員長はマイクを風間に手渡して舞台を降りた。

「軽音楽部？みんな1年坊主じゃん」

舞台の前にいた3年の、明らかに馬鹿にした声が聞こえた。

「みくびっちゃダメよ！上手いんだからっ！」

マドンナ先輩が陰口の3年に抗議する声も聞こえた。

風間を見ると、奴はニヤッと笑い、

「じゃ、メンバーのみんな、本城高校のみなさん、一緒に弾けよーぜ！」

俺たちと、そして校庭全体に号令をかける。

「軽音楽部発表会...改め、ブックキャスルスーパーライブッ！」

風間の掛け声を合図に、俺たちは一斉に楽器を鳴らした。

曲は今ブレイク中の歌謡曲。

方々に散ってた生徒たちが一気に舞台に注目する視線を感じた。

――よっしゃっ！

何でだかわかんないけど、一瞬でそう確信した。

1曲目が終わる頃には散ってた生徒たちの約半分が舞台の前に集まって来ていた。

こーなったらこっちのもんっ！

どうだ、これが軽音楽部の`発表会、だぜ〜っ！

練習の時とは違う、コトバじゃ言い現せない昇りつめてくような気分。

生徒たちは次々に舞台の前に集まって来る。手拍子してくれる奴、踊りだす奴、さっきのフォークダンスなんかより全然盛り上がってる！

風間の歌はピカイチ、柏木のドラムはプロ並み。松山兄弟のノリは最高！もちろん俺も！

――ブックキャスル、スゲエじゃん！

ライブってものを初めて体験した俺は、体の奥底から震えるぐらいに沸いてくる快感をかみしめた。

メジャーな歌謡曲で構成したライブだったが、最後の曲だけはオリジナルで俺たちのテーマ曲『光の城』だ。

みんなが知らない曲だから盛り下がらないかと心配したけど無用だった。お客さんは最後までノリノリで付き合ってくれた。本城高校のみなさん、最高です！

ブックキャスルの初ライブは大成功！

この高まりと感動を、今夜はこのままみんなと分かち合いたい！

...って、思ったけど...

「響くん、凄かったよ！カッコよかったよ〜っ！」

と、走ってきたマドンナ先輩に続き、

「太郎くん！」

「次郎くん！」

吉岡と河本も兄弟に駆け寄って来て。

風間はマドンナ先輩に額の汗なんかをふいてもらっちゃってるし、タロジロ兄弟はそれぞれの彼女に差し出されたスポーツドリンクをうまそうにガブ飲みしてて…。

こりゃ、奴らはこのまま彼女と仲良く流れちゃうな…。

はあ…。

こんな日はみんなで盛り上がりたかったけど…。

「ふたりで一杯やりますかぁ」

柏木が俺の肩に手を回す。

ほんっと、こいつだけがトモダチだ！

「そうっすねえ」

「どこ行く？居酒屋？カラオケバー？何処へでも付き合うよ！」

と、柏木が冗談をかました時だ。

「あの、柏木くん…」

か細い声に振り向くと、知らない女の子がひとりで立っていた。

「はい？」

どうやら柏木も知らないようだ。

エンジのジャージを着ているから1年には間違いないけど…。

何となくいや〜な予感が走った。

「これ、読んでもらえますか？」

女の子は柏木に封筒を手渡して、

「…じゃっ！」

と、真っ赤になって走り去った。

「なんだろ？」

柏木がここで封筒を開けようとしたから、

「ちょっと待て！それはあとでコッソリひとりで読めよな！」

慌ててそれを制した。

「え？なんで？」

そんなピンクのハートマークがついた封筒に入った手紙がどんな内容のものかってことぐらい

、読まなくてもわかるだろ！

「俺の前で開けるんじゃないっ！」

やっぱこいつもトモダチじゃねえ！

非モテは俺ひとりってことでいいです、もう。

最高の後にはしっかり落ち(オチ)がついてた、ブックキャスル初ステージの一日だった。

俺の前で開けるんじゃない、という言いつけを守り、後夜祭の日の柏木はもらった手紙を開けずに帰った。

けど、やっぱ、俺が気になる。

だって、柏木まで彼女持ちになっちったら俺ひとり孤独だろ…。

登下校時、仲良く彼女と歩く奴らの後ろを、ひとりでトボトボ歩いてる自分を想像しただけで涙ちょちょぎれもんだし。

で、翌日の昼休みに柏木に訊いた。

「あのさ、柏木くん？昨日のあの手紙さ…？」

「ああ、あれ」

柏木は特にいつもと変わった様子もなく返した。

「…なんだって？」

「手紙に書いてあった内容のこと？」

そーだってば！

他に何があるって言うんですか！

「あ、ああ、まあ…」

すっげえ気になってるけど、それを柏木に悟られるのは癪だったんで適当に返事をした。

「…何だかよくわかんなかった」

と、柏木は言う。

「わかんないって？」

どーゆーことだよ。

だって、ピンクのハート模様の封筒だったじゃん。

…って、俺もよくチェックしてるよなあ。

見なくていいところが見えちゃうやな性質だぜ。

「読む？」

柏木は鞆の中から封筒を取り出して俺に差し出した。

「読むかよっ！お前がもらったラブレターだろ？！」

そこまで俺、詮索好きじゃないぜ…。

…でも、気になるのは確か。

「ラブレターなのかなあ、これ…」

柏木は封筒の中から手紙を取り出して言った。

「とにかく読んでみてよ？俺、本当によくわかんないんだ」

って柏木が言うから、俺は仕方なく、本当に仕方なく手紙を開いた。

柏木直弥さま

あなたは図書室にいます。
私はあなたを見つめています。
あなたの読んだ本を手にとり、
あなたが行った世界を旅します。

トルストイは好きですか？
ゲーテ、ユゴーは好きですか？

大好きです。

言の葉を紡ぎたい。
夢も現も。

手紙にはこれだけしか書いてなかった。

「...意味不明」
「でしょ？」
「...名前もないの？」

手紙にも封筒にも差し出し名が書いてない。
書き忘れたのか、それとも同じ学年だから知ってると思っているのか....。

「書いてないね」
「うーん...」

俺は手紙を柏木に返して腕を組む。

「柏木さあ？文学少年なんだから意味わかるんじゃないの？」

トルストイもゲーテもユゴーもさっぱりな俺だけど、柏木はきっと読破してるんだろーからさ
。

「いや、わかんない...」

柏木は首を傾げる。

「こんな文章、トルストイもゲーテもユゴーも書いてないし、詩なのかなんかの引用文なのか、
全然わかんない」

柏木は両手のひらを上に向けて `Why?、のポーズを取った。

がしかし、ピンクのハートマーク封筒なんだから、これは絶対にそーゆー手紙のはずだ。

「しょーがない！俺が解読してやっから！」

もう一度柏木の手から手紙を取って俺は言った。

「ゝあなたは図書室にいます、このあなたは柏木、お前だ」

「うん」

「ってことは、ゝ私はあなたを見つめています、私は彼女、彼女はお前を見つめてるってことでしょ」

「うん」

「ゝあなたの読んだ本を手にとり、あなたが行った世界を旅します、彼女はお前が読んだ本を手にとって、お前と同じ世界に入り込んでるってこと。つまり、お前が触った本を後からそっと抱きしめてるってことだよ」

「そーかなあ...？」

「トルストイなんだからいいとして、その後のゝ大好きです、は、一見彼女もトルストイらが好きだと言いたげに見えるけど、この空いた一行がみそ！これは、お前が大好きだ、柏木くんが好きなよ、と訴えてるんだよ」

「え〜？そうかなあ？」

「そうなの！で、これが究極！ゝ言の葉を紡ぎたい。夢も現も、。お前と夢でも現実でも言葉を交わしたい、喋りたい側にいたい、ってことは、ようするに付き合いたいってことでしょ！」

我ながら完璧な解釈！

間違いない。

この手紙の意味は、ゝ柏木くん付き合ってください！、なのだ。

「うーん...」

と、柏木はうなった。

「田村くんの解釈が当たってたとしても、俺なあ...」

柏木の理想はキレイなおねーさんだもんなあ...。

「柏木は知ってるの？昨日のあの子」

「いや、知らない。顔も見たことない子だった」

俺も知らなかった。

たぶん、回廊違いの教室にいる子なんだと思う。

「もらいっぱなしってわけにはいかないでしょう？付き合うにしても断るにしても、一回ちゃんと話さないと」

何で俺がここまでアドバイスしてんだか、はっきり言って墓穴掘ってるような気がしないでもなかったけど、こんな手紙を書く女の子にちょっと興味もあった。

「行ってみようぜ？」

「どこに？」

どこに？って柏木くーん...。

「昨日の子を探しにに決まってんでしょ！」

「え〜？行くのお？」

渋々の柏木の腕を引っ張って立たせ教室を出る。とりあえずこの回廊に昨日の子はいないから、俺たちはそのまま二階に向かった。

◇

A組の教室を覗いてみたけど見当たらない。

で、B組。

昼休みだから教室の中はわぁわぁしている。弁当食ってる奴、漫画読んで笑ってる奴、仲間同士で喋ってる奴らをぐるっと見回してみたけど、

「どの子かよく覚えてないよ...」

柏木が言うように、俺も同じだった。

昨日、本当に一瞬見ただけだったし夜だったしジャージだったし。

手紙に名前さえ書いてあればすぐに探せたのになぁ、と思って帰ろうとした時だ。それまで視界を邪魔してた奴らがどき、窓際の一番前の席で本を開いてる女の子が目にとまった。

「なぁ、あの子じゃん？」

「あ、そうだ...」

柏木は目を凝らしてじーっと彼女を見つめた。

「...あれ、『アンナ・カレーナ』の中巻だ、たぶん...」

ちょうど教室から廊下に出ようとしたひとりの男子を捕まえて、

「あの窓際の一番前にいる女の子、何て名前？」

と、訊いてみた。

男子は怪訝な顔を俺たちに向けたが、

「桜谷小春(さくらだにこはる)」

と、教えてくれた。

――桜谷小春...。

なんて麗しい名なんだ。

「桜谷小春...」

柏木が横で呟いた。見るとさっきまでのやる気なさそうな顔じゃなく、真剣な目をして小春ちゃんを見つめてる。

いや、真剣っていうより...、

「いい名前だ...。詩的だ...」

一目惚れの目。

いつか、マドンナ先輩を見てた時と同じ目だ。

こりゃ、逝っちまったな、柏木くん。

年上好みだったはずなのに、理想は理想ってことで。

やっぱ俺、墓穴掘ったじゃん...。

「あ…」

小春ちゃんが俺たちに気がついてこっちを見た。

「……んじゃ、俺行くわ…」

柏木をその場に残してひとりで階段を下りる田村くんでありました。

柏木と小春ちゃん、松山兄と吉岡、弟と河本、そして風間とマドンナ先輩…。

ええ、ええ、そりやもう仲良くやってます。

5人でつつきあいながらの登下校時、たまに駅前のビリヤード場に行ってみたり構内のドトール珈琲で茶してみたりな日常生活は夏以降すっかりなくなった。

季節はもう秋も通り過ぎて、あったかいコートと手を繋ぐ相手も欲しいと思うこの頃ではあるけど、ますます非モテ街道まっしぐらな田村くん…。俺に寄ってくるのはそろそろ巷で流行り始めた風邪菌と…、

「だぁぁっくしょんっ！！」

「ちょっと田村くんっ！こっち向いてくしゃみしないでよ！！」

……相変わらずおっかない小早川環ちゃんの怒鳴り声だけ。

ま、来週は公民館ライブの初出場もあるし、そんなことどーだっていいのだ！俺はひたすらバンドに命を賭けてやる…！だぁぁっくしょんっ！！

「はぁ…。完璧に風邪ひいた…」

下を向いてなくても垂れてくる鼻水と、ひっきりなしに飛び出すくしゃみにさすがの俺もへろへろな今日。関節は痛むし悪寒はするし、こりゃ今夜あたり熱が出そうな予感。今日は早く帰ってとっとと寝よう…。

しかし、奴らは冷たい。まるで枯葉たちをくるくると舞い上がらせている木枯らしのように冷たい。

部活中から俺のこーゆー状態を見てるってのに、

「馬鹿でも風邪ひくんだなぁ」

なんて暴言を吐いたのは松山兄。

奴にだけは言われたくない台詞だったし、

「田村くん、大丈夫かい？」

と、唯一俺に優しい言葉をかけてくれた柏木も、部活が終われば小春ちゃんと待ち合わせをしている図書室にさっさと行きやがった。風間はいつものように迎えに来たマドンナ先輩と、`面倒くさそうに、消えて行ったし、どいつもこいつも悲惨な状態にいる俺をひとり残してうはうはと先に帰りやがった。

こんな時、優しい彼女が側にいれば、

「田村くん大丈夫？」

なんて、額にそっと手を当ててくれるんだろーに、自分でおでこを触って`あちい！、なんておちゃらけてなきゃならない俺…。

はあ、やな感じ…。

「ねえ、大丈夫？田村くん？」

そういや、さっきから俺の目の前にいるのは…、

「…だぁ〜っくしょん！！」

「だから、こっち向いてくしゃみしないで！伝染（うつ）っちゃうじゃないの！」

小早川だ。

「あ、悪い…。気がつかなかった」

「気がつかなかったって…、さっきから5回ぐらいくしゃみ飛ばされてるんだけど…」

あ？そう？

ヤバイ。

妄想の世界にはまり込んでいたのかもしれない。こりゃ相当熱が上がったか…。

「保健室で熱測ってくる？」

小早川は、らしくもない優しい口調で言った。

見ると、下駄箱の前で突っ立ってたらしい俺のすぐ目の前で、またらしくもなく心配気な目をして俺を見上げている小早川がいた。この位置じゃ確かにくしゃみをひっかけていたかもしれない。わりーことしちまった。

「ぼーっとしてるよ？」

と、小早川。

たぶん、かなりヤバそうに見えるんだろ、俺が。

実際、妄想の世界に行って目の前の小早川に気がつかなかったわけだし…。

でもまあ、今から保健室に行って熱を測ってきたところで何がどーなるもんでもないから、
「いいよ。もうこのまま帰って寝る…」

と、さっきから手に持ったままだったらしい靴を玄関に下ろした。

「そう？じゃ、お大事にね」

小早川も靴を下ろす。

「ああ、サンキュー。じゃあな」

そう言って玄関で小早川と別れて俺は駅に向かって歩き出した。

相変わらず鼻水は垂れるしくしゃみは出るし、枯葉をくるくる回してる木枯らしは冷たいし心もさぶい…。ひとりでこの道を歩くようになって1ヶ月。この長い道のりをいつまでひとりで歩き続けるんだろう…。

出る、出るぞ…、

「だぁ〜っくしょんっ！！」

思いっきり横を向いてくしゃみを飛ばしたとき、

「げ、小早川…」

どういうわけか隣にいらっしゃった小早川さん…。

「6回目…」

小早川は明らかにうんざりとした顔で俺を睨んだ。

「なんだよ…」

「…だって、帰る道同じなんだもん…」

そっか。

利用駅が同じなんだよな。

「そういえば、文化祭の時の田村くんたち、なかなかカッコよかったよ」

小早川はいきなりそんなことを言い出した。

先週文化祭は終わり、俺たちブックキャスルは後夜祭に続き単独ライブを行った。今度は野外ではなく学校に隣接している公民館のホールを借りてのステージだった。まあ、打ち出しはまた`軽音楽部発表会、`だったけど、後夜祭での成功があったんで俺たちが`発表会、`をやるなんて思ってる奴は最初からひとりもいなかった。

「見に来てくれてたんだ」

「雪乃とふたりで行ったよ」

「サンキュー。1年にしちゃやるだろ？俺たち」

「うん。後夜祭の時もカッコよかったけど、あの時は舞台がねえ…」

小早川はくすくす笑った。

「確かになぁ…」

紅白の垂れ幕つきの盆踊り櫓の上じゃ格好もつかなかっただろうな。

「でも、あれはあれでまたよかったよ。選曲もよかったし、最後のオリジナルもいい曲だったね」

へえ…。

結構細かいところチェックしてくれてるんじゃない。

「風間くんってどうしてあんなに歌が上手いの？驚いちゃったよ」

「奴のおふくろさんは元歌手なんだぜ」

「そうなんだ！納得〜！」

何だかいつもの小早川じゃないみたいだ。

ちょっと調子が狂ってる俺だったりもするけれど、バンドネタだとどうしても熱くなってしまう。

「来週は地元で公民館ライブに出るんだぜ」

「ほんと？見に行きたいなあ！」

「おお、来いよ！北山公民館で午後1時からだから」

「うん、絶対に行く！」

絶対に、なんて嬉しいこと言ってくれるなあ。

小早川もいい奴じゃん。5月のホームルーム合宿以来、顔をみりゃ口げんかみたいになってたけどさ。

「田村くんはいつからギターやってたの？」

「中1の時から」

「ギターって弦を押さえる場所が色々あるんでしょ？」

「コードってのが決まってるの」

「それってどうやって覚えるの？」

「ひたすら練習するのみ！」

普段はあまり訊かれないようなことまで小早川は俺に訊いて来て、俺はそれが嬉しくて小早川が納得するまで丁寧に説明したりして、長いはずの駅までの道があっという間だった。

小早川とはホームが反対。

「じゃ、またな」

「うん。風邪早く治してね！」

あ。

そういや俺、さっきからくしゃみ止まってるじゃん....。

「...サンキュ」

何だか少し照れちまった。

早く風邪治してね、なんて女の子から言われたの初めてだし。たとえ小早川さんでも嬉しいわけで。

「じゃ、来週のライブ楽しみにしてるよ！練習頑張ってるね」

「おお」

小早川はくるっと回れ右をして、軽く手を振りながらあっちのホームに走って行った。

あいつ、もしかして俺に付き添ってくれたのか...？

妄想の世界に行ったりあんだけくしゃみ飛ばしてりゃ、やっぱあぶねえと思うわな....。

あれ、また出る、出るぞ...

「だぁぁ〜っくっ……！」

くしゃみが途中で止まったのは、いきなり後ろから抱きすくめられ、冷たい手が俺の額を触ったからだ。

「……ひょんっ…」

スッキリしないくしゃみを取りあえず最後まで出して振り返り、

「田村くん、相当熱が上がってるぜ？」

そこで俺を抱きしめてる風間の顔を見て、どういうわけかほっとした俺だ。

風間の手はひんやりと冷たくて気持ちいい…、

……なんて思いにひたった自分が気持ち悪くて、

「お前、何やってんだよ？マドンナ先輩は？」

と、奴を押しのかた。

「先に帰ってもらった。とりあえず駅までは一緒に行かないとうるせーからさ…」

風間は照れくさそうに鼻の頭をかく。

うるせーからさ、ねえ…。

「で、先輩を先に帰して俺を待っててくれたわけ？」

「まあな。お前かなり調子悪そうだったし」

「調子悪かった、さっきまで。でもまあ、少しはマシになった気がする」

「小早川のおかげでか？」

――なっ！？

「いい雰囲気だったもんなぁ〜。手なんか振っちゃって」

――う。見てたのね…。

「`早く風邪治してね、`、`サンキュ、`、」

風間は裏声と地声のひとり二役を演じ、

「あいつも可愛いところあるじゃん！」

と、言った。

風間の演技は赤面ものだったけど、

「あいつ、いい奴だよ。いつもガミガミうるさいけどさ、優しいところもあるし」

「…田村くんにはな！」

風間は決まりすぎのウィンクを投げる。

そのせいかどうか、思わずふら〜つとよろけちまった。

「重症のようだねえ〜。待ってて正解だったみたいだ！」

風間は俺の鞆をサッと取り上げ、

「とっとと帰ろうぜ？寒くなってきたし」

と、先を歩き出した。

鞆をふたつ抱えた風間の背中がぼんやりと霞む、人が溢れ始めた夕方の駅。

今日はコートの襟を立てたくなるくらいの木枯らしが吹いているし、また鼻水は垂れてきたしやっぱ熱も出てきたみたいだけど、そんなことはどうでもいいと思えるような、どこかでいい感じな俺だった。

北山地区アマチュアバンドオンステージ、俗に言う公民館ライブは、出場するためにいくつかの審査を通過しなきゃならない。

まずはデモテープを主催側に送って第一次審査。それに通れば代表者、うちで言えば風間が面接審査を受け、それに通過すれば出演権が与えられるわけ。

ライブに出られるバンドは10組。応募バンドは100組。競争率は10倍！

デモテープの段階で落とされることを覚悟していた俺たちだったけれど、あらら？なくらいトントンと予選を通過して、めでたく出演権を得たわけだ。

で、12月のしょっぱなの日曜日に初めての公民館ライブに出場してきた。

とにかく緊張しまくったし、舞い上がったし、自分たちのライブがどんな風に始まってどんな風に終わったかを俺はまったく覚えてない。ただ弾けて跳んで完全燃焼してきたってことだけで。

気がついた時には、信じられないことだったけど女の子たちが俺たちを囲んでいた。1週間前からの風邪がまだ治りきってなかったのと、ライブのあとの興奮状態とで頭はぼーっとしていて、その時の自分が置かれた状態を理解したのは随分あとになってからだった。これはもったいないことをしたって思う。もっと満喫しときゃよかった。

で、そのあと、今度は同じ北山公民館で毎年行われているクリスマスライブに無条件で出られることが決まった。なんで俺たちにお声がかかったのかはよくわからないけど、とにかく公民館ライブで俺たちはずいぶん高い評価をしてもらったらしい。

クリスマスライブだから演出もクリスマスっぽく、衣装もクリスマスっぽく、そういう目で見るところにも気を使ったんがいいだろう、と言い出したのは松山兄だった。

そんなことしなくても普通にやればいいと言ったのは柏木だ。柏木は去年まで兄貴たちのバンドでクリスマスライブを経験してるんで、他のバンドがみんなド派手な演出をもってくるのを知っていた。だからブックキャスルはあえて地味に、あくまでも自然ないつものままのライブをやりたいって最後まで言っていた。

でもやっぱ俺たち初心者にしてみれば、ド派手なライブってのを経験したかったんで、柏木のその意見は却下し、全員サンタクロースの衣装を着てやった。サンタクロースになるからにはプレゼントも用意しなきゃってんで、珈琲キャンディをライブ中に会場にばら撒いたりもした。

公民館ライブでは俺たちはまったくの新人で無名だったから、約束通り来てくれた小早川や風間たちそれぞれの彼女は別として、それ以外の固定ファンなんていなかったけど、そこで俺たちを見初めてくれたらしい女の子たちが、このクリスマスライブにはかなり来てくれてた。

それが、

「ナオヤー！」

「響くーん！」
の歓声に混ざって、
「たむどーん！」

――これってどうよ？

いつの間にか「たむどん、ってニックネームがついてた田村くん…。

なんでだろう？「田村はどんくさい、って略かい？

せめて、田村くーん、とか、優作ちゃん、ぐらい呼んで欲しかったけど、まあ、今まで非モテ街道まっしぐらできてた田村くんにしてみれば、黄色い声で叫んでくれる女の子がいるってだけで、もう幸せの絶頂だった。それがたとえ「たむどーん、でも！

サンタクロースの衣装を着てたのは俺たちだけじゃなかったけど、キャンディーをばら撒いたのは俺たちだけだったんで結構盛り上がったし、まずまずの演出効果だったんじゃないか。これで固定ファンをがちりゲット。非モテライフからもようやく抜け出せるだろう！

…って考えは当然のように甘かったわけで。

明日は大晦日。明後日は正月。

初日の出や初詣を一緒に行くような女の子は相変わらずいない田村くんです。

12月30日の今日はブックキャッスルの忘年会。

学校の近くのビリヤード場に俺たち5人は久しぶりに彼女抜きで集まった。ほんと、この面子でここに来るのは何ヶ月ぶりだろう。思い返せば夏休みの前日、風間がマドンナ先輩にひとり呼び出されたことから始まった。そして、マドンナ先輩をここに連れてきた時、風間を大人にしてやってくれ、なんて心にもないことを言っちゃったのは俺で、あの直後から風間とマドンナ先輩は急接近。それで勢いがついたのかどうかは知らないけど、芋づる式に松山兄弟に彼女が出来て、最後までオトモダチだと思っていた柏木にまで。芋のつるにもつかまらなかったのは俺…。

でもまあ、今年のことはもういいさ。

けど、ブックキャッスルに関しちゃよくぞここまで来たな、って思う。

ドラマーやピアニストを探すのは大変だったし、結局ピアニストはいないままバンドやって、学校ライブも合わせりゃ4回もステージに立ったわけだから。

これはかなりの実績だぜ？

公民館ライブの審査に出したデモテープは風間が作った『光の城』だった。

アップテンポにもバラードにも、アレンジ次第でどうにでもなる曲で俺たちのテーマソングで

もある。デモを作ったのはアップテンポだったけれど、風間はこれをアコギ一本のバラードで歌うのが好きらしい。よく音楽室で歌ってる。

いつか目指そう光の城を
右も左も闇の中でも
微かな輝きひとつを頼りにしながら
そこに繋がる道を歩こう――

こんな詞がついた歌が『光の城』だ。

いつか、風邪っぴきの風間を見舞って初めてこの曲の楽譜を手渡された時、一番印象に残った詞がここだった。

微かな輝きひとつを頼りにしながら――。

たったひとつ、頼りに出来る輝きって何だろう？
俺にとっての光の城は何処にあるんだろう――？

その答えはまだまだ全然見つからない。この先見つけられるかどうかもわからない。

でも、微かな輝き、誰かの頼りになるひとつの輝きに自分がなれたら、って最近はこの曲をやるたびに思ったりする。自分がその輝きを放てた時に、俺の光の城が現れるのかもしれないな。

風間はどんな想いでこの曲を作ったんだろうか？
あいつにとっての光の城は――。

――そりゃマドンナ先輩だわな、きっと……。

「なあ、田村」

キューを置いて風間が言った。

「来年のクリスマスライブはさ、柏木が言うように普通のままのライブがいいな」

「ああ、そうだな」

サンタクロースが失敗だったわけじゃない。

キャンディーばら撒いたのだって悪くはなかった。

でも、俺もあの時柏木が言った、ブックキャッスルはあえて地味にあくまでも自然なライブを

やりたいて意味が今になってわかったような気がする。

地味だけど地味じゃない。

微かな輝きひとつを頼りにしながら光の城に繋がる道を歩いていくのがブックキャッスル。その微かな輝きに、俺たちひとりひとりがなればいいわけだ。ありのままでさ。

だから俺は非モテの田村くんがいいんだ。

非モテのままが輝きで、それが光の城に繋がる道しるべなのさ！

.....って、ちょっと違うか？

「ま、来年からも宜しく頼むよ」

風間が俺の肩をぽーんと叩いた。

「おお」

いろいろあるだろーよ、来年も。

でも、俺なりに俺の光の城を目指して歩いていくさ。

新年あけましておめでとーございます。

...っていうあいさつを交わしていたのはもうひと月も前の話で、あと2ヶ月もすりゃ俺たちも2年に進級。

で、あと1週間もすりゃ田村くんにとっちゃつらーい1日がやってくる。

風間や柏木はいつもと変らないにしても、松山兄弟たちは今からそわそわしやがって。どーせおめーらにチョコをくれる女の子なんぞ、吉岡と河本ぐらいなもんさ！

.....いるだけうらやましいってやつだ。

当日は休んぢやおうかな、俺...

外は冬枯れの2月。

教室から見る校庭も寒々しく、どこか灰色なイメージが沸いてくるような...、たぶんそれは俺の心の中なんだろうけど。

ひとりぼっちの昼休み、だしさ。

かーちゃん弁当にさっき購買で調達したチョコデニッシュ...

松山兄弟たちは毎日のように彼女さんたちとランチ。柏木はまあクラスが違うからいいとして、風間はたまにマドンナ先輩が迎えに来る時もあるけど、だいたい是一人身の俺を気遣ってくれてた。

でも、今日はマドンナ先輩に呼び出され、ふたりは昼休みと同時にどこかに消えた。外は寒いしたぶんどっかの教室か音楽室あたりでランチしてるんだろう。

ひとりでチョコデニッシュをぽそぽそ食うのもなんだかなあ...だったんで弁当だけ済ませてから体育館に向かった。あと30分もある昼休みが暇なんでバスケットにでもまぜてもらうつもりだ。こーゆー時、一人身はほんと惨め。っていうか、奴ら、ちっとは俺に気を使えってんだ。けっこう時間を潰すのだって難しいんだぜ？まあ、もう半分慣れたけど...

「ふーん...。で？それってどういう意味なわけ？」

渡り廊下を歩いていると、どこかで声が聞こえた気がしてあたりを見回したけど人影はない。空耳か？と思ってまた歩き出した時、

「...そんなふうには言わないでよ」

今度は女の子の声だ。

やっぱりどっかで誰かが喋ってる。

「だって、わけわかんないじゃん」

...待てよ？

この声は風間？

ってことは、女の子はマドンナ先輩だよな？

別に盗み聞きしたかったわけじゃないんだけど、ふたりの声のトーンがいつもと違ってどこかマイナスイメージに聞こえたんで、ふと体育館の裏を覗いてみた。渡り廊下からは死角になってる場所だ。背の高い鉄棒が二つ並んだ、その支柱に寄りかかるようにして風間が立っていた。マドンナ先輩は俺に背を向けた格好でそこにいる。風間は腕と長い脚を組んでマドンナ先輩をじっと見ている。ひゅうひゅう吹く木枯らしが奴の金色の髪をまるでこいのぼりのように空に泳がせていた。ここは風の吹き溜まりだからやたら寒い。

こんな場所で人目を避けるようにしてこのふたり、いったい何を話してるんだ？ふたりの様子から、どうも前向きな会話をしているとは思えなかった。マドンナ先輩は寒さからなのか、カタカタと震えていた。

「だから……」

と言ったきり、マドンナ先輩は黙っちまった。そのすぐ後に風間のため息と、そして、

「...ずいぶん勝手な人だな」

冷たく呟く声が聞こえた。

これって何――？

見ちゃいけないもの、聞いちゃいけないものに触れちゃったようで罪悪感が膨らんだ。木枯らしの中で震えているマドンナ先輩が哀れだった。向こう側を向いて先輩はどんな顔をしているのだろう…。

でも、これ以上俺がここにいちゃいけないよな、やっぱ…。

そっとその場から離れてそのまま体育館に行ってはみたものの、バスケなんかやる気もなくなった。今、風間とマドンナ先輩は俺がもたれかかっている壁のすぐ後ろにいるんだ。

風間とマドンナ先輩――。

すったもんだの末に付き合い始めて半年。

風間の態度は相変わらずで、俺たちの目の前じゃ松山兄弟たちのようには絶対にマドンナ先輩とベタベタしないけど、まあまあ仲良くやっている様子はわかる。`響くん、なんて呼んでもらってるしさ。下校時は毎日のようにマドンナ先輩は部活をやってる風間を待っているし…、俺たちのいないところじゃそれなりの彼氏彼女をやってるんじゃないだろーか。いちいち風間に突っ込んで聞きゃしないけど、な…。

まあ、どうせただの痴話喧嘩だろうけど、なんだか深刻だったよな、ふたりとも…。

まあ、俺には関係ない、か。

◇

教室に戻ったすぐあとに風間も帰って来た。あのあともずっと体育館裏にいたみたいで顔は蒼白、金髪も制服も凍ったように白々させ、ぶるぶる震えながら教室に飛び込んできて、そのままストーブの前にピッタリと張り付いた。

「さみい！」

風間は両手を火にかざしそこでもみ手をしながら言った。

その声も態度もいつもと同じ、別に変った様子もない。

――ずいぶん勝手な人だな…。

…冷たく呟いてたさっきの声が嘘のようだ。

「…ん？なんだよ？」

たぶん俺は奴をじっと見てたんだろう。

風間が怪訝な顔をして言った。

「…いや？なんでもねえよ？」

「じゃあ、そんなに見つめんなよ、穴あくから」

…口の悪さも健在。

「次の授業、何だっけ？」

風間はストーブの前で足踏みしながら言う。

「現国」

「楽勝！寝られるな」

ニヤッと笑う顔も普段通り。

やっぱたいしたことじゃなかったようでほっとした。

別に風間を心配してたわけじゃない。俺が心配だったのはマドンナ先輩の方だ。ふたりの仲がどーにかなって、また夏のあの頃のようにしょぼんとうつむく先輩を見るのはイヤだから。

「...まったく、こんなクソ寒いのにそんなに凍えて何やってたんだよ」

たいしたことじゃなかったってわかったから、こんな言葉が出たんだけど....、

「...さあな」

と、言い放った風間の声には妙なトゲがあった。そのあと風間は小さなため息を吐いた。

「...ため息なんてついちゃって、お前らしくもないな」

「...ま、たまには俺だってね」

笑ってはいるけれど、どこか疲れた顔してるな。

まあ、何にしたって喧嘩するってのは気分マイナスになるだろうし、しょーがねえか。

そーいやこいつ、昼飯は食ったんだろうか？ずっと体育館裏にいたんだとしたら食ってねえかもしれないな。

一番後ろの自分の席に戻って、

「風間、受け取れよっ！」

机の中にあったチョコデニッシュを風間に投げてやった。

風間は長い手を伸ばしてそれをキャッチし、

「何、これ？」

チョコデニッシュと俺の顔を見比べて言う。

「疲れた時は甘いもんに限るってことで、プレゼント！」

風間はしばらくストーブの前に突っ立ったままチョコデニッシュを見つめていた。けど、ちょうど予鈴が鳴ったんで慌てたように袋をビリビリ破りぱくりと食いつき、

「サンキュ！」

と、笑った。

その時だ。

松山兄弟がふたり揃って教室に帰って来た。

それが、一目見ただけでわかるくらいに意気消沈しガックリと肩を落としてる。それも、ふたり仲良く揃って、だ。

「...どうしたの？お前ら？」

口をもぐもぐさせながら風間が言う。

けれど、ふたりはチラッと奴を見ただけで、無言で自分たちの席についちまった。そのすぐ後に、松山兄の彼女、吉岡が帰って来たが...

泣いていた。

吉岡は兄の真横をスッと通り過ぎ、自分の席について突っ伏した。
すぐさま小早川と大島が駆け寄った。

風間が俺を見て首を傾げる。

おいおい...、いったいどーなってんの？

キミたちにとってうきうきな日が1週間後に迫ってるっていうのに、どいつもこいつも揃って陰っっちゃって...

風間もそうだけど松山ブラザーズの方がどうも深刻のようだ。なんたって吉岡さん泣いてるし...

そんなこんなしてるうちに本鈴が鳴って千田先生がやってきたんで、風間は最後の一口を口に放り込んでから自分の席に戻った。

そのあとは、吉岡は突っ伏したままで、松山兄弟は揃ってこの世の終わりのような顔をしてて、そして風間もやっぱり何か考え事をしているような5時間目だった。

26 去るもの... その1

今日の部活はさすがにテンション低い。

松山兄弟は揃ってだんまりだし、風間は普段どおりを装ってはいるけれど声に張りが全然ない。

いつか目指そう光の城を
右も左も闇の中でも
微かな輝きひとつを頼りにしながら
そこに繋がる道を歩こう――

『光の城』のこのサビ。

いつもはみんなして盛り上がっていくフレーズなのに、今日といたら松山兄は間違えるし弟はピック落とすし風間は声が裏返って音程を外すしでめちゃめちゃ。曲が終わった後なんか3人が3人とも、はぁ...と肩を下げてため息をつく始末。

「どーなってんの？」

5時間目の奴らを見ていない柏木が首を傾げたんで簡単に説明してやった。

「松山くんたちはわかるとしても、風間くんまで...？」

松山兄弟はわかるとしても、にはちょっと笑っちゃったけど、

「いや、風間より奴ら...っていうか、太郎の方が深刻っぽいんだよね...」

柏木とふたりでひそひそやってるのが気に入らなかったようだ。

松山兄弟が揃って俺たちに睨みを利かし、

「今日はこれで帰るわ...」

言葉少なに呟くとふたり揃って音楽室を出て行っちゃった。

いつもならこの後、兄は教室で待ってる吉岡を、弟はバスケ部の河本を体育館にそれぞれ迎えに行く。

が、今日はそのまま階段を降りて昇降口に向かったようだ。

「元気がない松山ブラザーズってのもたまにはいいかもなあ？」

風間がわざと茶化したように言う。

が、そういう奴だってかなり疲れているように見えた。

結局乗らない部活をいつまでもやってたってしょうがないってことになり、本日は解散と相成った。

小春ちゃんと仲良くやってる柏木はもちろん図書室に向かったし、風間もマドンナ先輩が待ってるのはいつものことなんで、俺もいつも通りにひとり昇降口に向かおうとすると、

「田村ぁ。鍵返してくるから待ってるよ」

と、ややバツが悪そうに風間が言った。

まあ...、喧嘩したらしいのはわかってたし、風間もあんまり多くを喋りたくもないだろうから、俺も、
「おお」
と、だけ答えておいた。

けど、風間より先に昇降口に行くとマドンナ先輩はちゃんと待ってるじゃん...。

「ども...」

声をかけると、先輩は驚いたように肩を震わせて振り向いて、

「あ、田村くん...」

と、呟いた。

「風間を待ってるんっすよね？」

「...うん」

なんだよ。

心配して損しちゃった。

やっぱさっきのあれはただの痴話喧嘩だったんだな。

「今、鍵返しに行ってるだけだからすぐ来ますよ」

「田村くんはいつも色々と気を使ってくれて...、本当にありがとう。ごめんね...」

え...？なによ、いきなり...。

マドンナ先輩は首を横に傾げるポーズで笑っていた。

「...どうしたんっすか？風間と何かあったんすか？」

...って、俺もしらじらしいこと聞いちゃった。

だって、マドンナ先輩の笑顔の下に涙が張り付いてるように見えて、もう忘れかけていた胸の痛みを思い出しちゃって。

先輩のこういう顔、本当に見たくない。

「ううん？風間くんとは何もないよ...」

先輩の言い方が何か不自然に感じた。

まあ、何もないんならそれでいいんだけど。

そうこうしてる間に風間が階段を下りてきた。

風間はマドンナ先輩を見ると、一瞬驚いたように立ち止まってからまたゆっくりとこっちに向かって歩いて来て、

「どうしたの？」

と、先輩に向かって言う。

「うん…。さっき途中だったから…」

俺は妙に落ち着かない気分になった。

このふたりのやりとりにはいつもハラハラしっぱなしだ。風間はとにかく俺たちの前じゃ先輩に対する言い方がつっけんどんだし、それを受け止める先輩は儂いし。

夏からずっとふたりのそんなやりとりを見てきてさっきの体育館裏でのあれだ。

――…ずいぶん勝手な人だな。

あん時の風間の冷たい声がまだ耳に残っている。このあと風間がまたマドンナ先輩を突き放すんじゃないか、そしてしょぼんとうつむくマドンナ先輩を見なきゃならないかと思うと、この場から早く立ち去りたい気持ちに駆られた。

けれど、

「…わかった」

そう頷いた風間の声はいつになく優しく、そして、

「田村悪い…」

と、俺に謝ったりする。

「いや、いいって…」

言いながら俺は心底ほっとしていた。

とにかくふたりが仲良くしててくれれば、俺がひとり寂しく帰り道をたどることなんて毎度のことなわけだから。

風間とマドンナ先輩は並んで校門を出て行った。

ただ、いつもなら風間にピッタリと寄り添うようにして歩くマドンナ先輩が、少し距離を置いていることが気になった。

なんか違うんだよな。

いったい今日はどうなっちゃったんだ？

2月の空はどんよりと曇っていて、それがグーッと下がってきそうな重さを感じる。

言葉少なだった松山兄弟に泣いていた吉岡。そして、いつもと同じようにいて違う風間とマドンナ先輩。

付き合ってる奴らにはそれなりにいろんな問題が発生するんだろうけど、非モテ街道まっしぐらな俺にはそれが何なのか想像もつかない。もしかしたら一番脳天気で幸せなのは俺なのかもしれないな、なんて思ってた時だ。

「田村くん、そこ邪魔...」

下駄箱の前に突っ立ってる俺をクイツと押しのけたのは小早川だった。

「ああ、悪い...」

ちょうどいい。吉岡のこと訊いてみるか...。

「小早川、帰るの？」

「うん」

「じゃあ駅まで一緒に行こうぜ？訊きたいことがあるんだ」

「...桂子ちゃんのこと？」

さすが小早川。察しがいい。

「まあ...」

「...いいよ」

小早川は素直に頷いた。

◇

駅まで歩く道のりだけでは足りなくて、俺は小早川を連れて構内のドトール珈琲に入った。外はめちゃめちゃ寒かったんで小早川は暖房が効いた2階席に落ち着いてもしばらくの間カタカタと震えていた。随分の間俺たちは黙って身体が温まるのを待っていたが、そのうち、

「桂子ちゃんは本当に松山くんのが好きなんだよね...」

小早川は珈琲カップを両手で包んで凍えた手を温めながら呟いた。

「それはたぶん...、太郎だって同じだと思うぜ？」

あの浮かれようだったわけだし...。

「ちょっと違うんだよね...。桂子ちゃんは心で付き合いたいののに松山くんは形で付き合ってるっていうか...。これは随分前から桂子ちゃん言ってた」

心と形？

いまいちわかんねえ。

でも、とにかく吉岡はそういうことで傷ついていたらしく、それを松山兄に訴えたそうなんだけど...、

「松山くん、わかってくれなかったみたい」

小早川はコクンと珈琲を一口飲んだ。

「それ、もしも俺が言われたとしてもわかんねえかもなあ...」

なんにしても仲良く付き合っているわけだし、何がいけなくて吉岡が傷ついたのかいまいち理解できない俺はやっぱ非モテだからなのか？

「だからね？」

小早川は俺を睨む。

「桂子ちゃんは松山くんのどういうところが好きでどういうところがイヤかってわかってるの。けど、松山くんは桂子ちゃんのどこが好きで付き合ってるのかがわかってないわけ。この意味わかる？」

「ようするに...、吉岡は松山のすべてをわかって松山太郎って人間に惚れてるってことだよな？でも松山は...、」

そうか...。

そういうことか...。

「...つき合う相手が桂子ちゃんじゃなくてもいいってこと。それを桂子ちゃんは肌で感じちゃったのよ。だから...」

そりゃ傷つくわな...。

そーゆー温度差は吉岡にとっちゃやっぱキツイだろう...。

「別れたって」

「えっ!？」

もう、そこまでいっちゃったのか!？

そりゃ性急すぎるだろ？

松山兄は確かに形で付き合ってたかもしれないけど、あいつだって一生懸命だったってのは確かだぜ。

「桂子ちゃん、ずっと悩んでたんだよ？松山くん、付き合ってるくせに全然気がつかなかったみたいだけどね」

小早川は責めるような眼差しで俺を睨んだ。

その顔の怖いこと怖いこと。まるで俺が怒られてるようでも思わず生唾を飲み込んだ。

「松山くん、かなり動揺してたらしいけど、じゃあ私のどこが好きなの？って訊いても答えられなかったんだって」

「だから吉岡は泣いてたわけか...」

何て言えばいいのか言葉が見つからなかった。

吉岡の気持ちはわからないでもない。心と形の違いもわかった。

でも、松山兄が`つき合う、`ってことに一生懸命で心を置き去りにしちまってたのもわかる。あいつだって決して不真面目な気持ちで付き合ってたわけじゃないんだ。そこんところ、女の子にはわかってもらえないのだろうか...。

「わからないよ...。女は自分だけを好きでいて欲しいっていつも思っちゃうもんだもん。心が一番なんだもん...」

小早川はそう呟いてうつむいた。

松山兄、振られたか.....。

そりゃ、意気消沈するだろう。

明日からのことを考えると心が痛い俺だ。

で、弟の方はどうしたってわけだろう？

まさかこっちも.....。

「ああ....、もうひとりの松山くんね...」

小早川はふう...と小さくため息をついた。

27 去るもの... その2

ため息をついてから俺を見た小早川はさっきまでのキツイ顔をしまいこんで、どこことなく頼りなさそうな目をして言った。

「弟くんの方はかなり哀れかも...」

「どういうことだよ？」

うん...、とうつむいて小早川はもう一度ため息をつく。

その肩の下がりようがなんだか小早川らしくない。

「いったいどうしたっての？」

「結論から言っちゃえば...、美紀が松山くんを振ったわけ」

...ああ、こっちも振られたってか...。

まあ、予想はしてたけど...。

「でもね、弟くんの方はお兄ちゃんと違って...、これは完全に美紀が悪いと思うんだ、あたし」

小早川は両手に珈琲カップを包んだまま、ちょっと顔をナナメに上げて俺を見た。その顔はまたいつものキツイ顔に戻ってて、それにくわえてどこことなく意地悪な光が隠れているように思った。

「松山くんは可哀想だよ」

「だからどういうことなんだって」

どのみち振られたんだから可哀想なんだってば。

だから早いとこその先を言いなさいって！

「美紀、OBの先輩に心変わりしちゃって、ちょっと前から松山くんと二股かけてたんだよ」

え...！？

「...ってというか、松山おに一ちゃんと同じで付き合う相手が別に松山弟くんじゃなくてもよかったって気がするな」

ああ?!マジ!?

だって、河本の方から弟に告白したわけだったろ？

「そしてこれは田村くんも悪いんだからね！」

...はい?!

「何でえ?!」

たぶん、俺は鳩が豆鉄砲食らったような顔をして小早川を見てたんだろう。
しばらく俺を睨んでた小早川が、

「...なあに、その顔...」

小さく吹き出した。
けど、俺は笑い事じゃねえっての。
何で俺のせいで河本が松山弟を振ったんだか、そこんどこちゃんと聞かねえと！

「これは私の勘だから、本当にそうかどうかはわかんないよ？」
小早川は前置きしてから言い放った。
「美紀が本当に好きだったのは田村くん！」

.....
はい...？

「美紀が松山くんに告白したのは田村くんへの当て付け！」

...い？！

「田村くんに振り向いてもらいたいがために、美紀は松山くんを利用してただけってこと！」

...ああ？！

「けど、鈍感な田村くんはいつまでたっても気がつかないから、美紀はOBの先輩に`田村くんから心変わり、したってこと！」

...なんだそりゃ！？

「だから松山くんは本当に可哀想なんだよ！何にも悪くないのにっ！」

...そりゃ可哀想だ！

「田村くん、最低...！」

っていうか、俺...？！

「どーして俺なのよ?!」

――わけわかんねえ!

松山弟と河本との付き合いに俺が関係してるなんてこと、今の今まで、いや、今だって考えられねえし。

そりゃ、夏のプールでの出来事は多少悪かったとも思うさ。

けどあれだって俺からしてみたらわけわかんねえ話だったわけだ。河本が俺のこと好きだとかなんだとか、あん時の大島は言ってたけど、それだっていきなりふって沸いたような、あまりにも現実味のない話だったわけだし。

何にしたってあれからもう半年も経ってるんだぜ?

松山弟と河本は半年も付き合ってたわけだぜ?

半年つつたら、こないだ生まれた隣んちのねーちゃんとのガキが、ばぶばぶしてるだけの赤ん坊からハイハイするようになってしまっただけ、意味のある長い時間なんだぜ?

「...河本がそう言ったのかよ?」

「だから最初に言ったでしょ?あたしの勘だって」

その勘は悪いけど外れてるぜ。

「でも、絶対当たってる。わかるもん、あたし」

小早川はそう言い切って、カップに残ってた珈琲をごくんと飲み干した。

その音につられて俺は生唾をごくんと飲み込んだ。

「...俺が悪いわけ?」

「田村くんの鈍感がすべての引き金ってだけのことで、別に悪いなんて言ってないじゃない?」

言っただろ、さっき。

田村くん、最低って.....。

「一番悪いのは美紀だよ。松山くんの純情を利用しちゃったわけだから。あたしはそこんところは許せないって思う」

松山ブラザーズ。

同じ結果でもそこにいきつく事情のこの違い。まだ吉岡が苦しくなってしまうほど想われて振られた兄の方が救われる...

弟の方は、みよ〜に後味が悪いぜ.....。

ちょっとでも自分が絡んでるからなのかもしれねえけど。

こりゃほんと、明日からが心苦しい...

一番脳天気で幸せなのは俺か?なんて思ってたけどそーでもねえじゃん。

っていうか、最悪じゃん?

「俺はどーすりゃいいんだよ?」

バカだよなあ。こんなこと小早川に訊くなんて。

でも、ほんと、どーしたらいいのかわかんなかった。

小早川が言ったことがマジな話だとしたら、俺、松山弟に恨まれちゃうじゃんかあ…。

「だからさっきから言ってるじゃない。これはあたしの勘だからって！」

だけどさっきから言ってるじゃない。

絶対に当たってる、って！

「何にしたって松山兄弟はふたりとも落ち込んでるはずだから、田村くんの立場でいえば慰めてあげるしかないでしょう？あたしの立場で言えば、おにーちゃんの方はちょっと同情できないところあるけどね」

俺からすればふたりとも哀れだぜ。

弟はもちろんだけど、兄だって…。

「あ、そうそうもうひとつね」

小早川は空いた自分と俺の珈琲カップをトレイにキレイに並べながら言った。

「美紀がスライダーがダメだっていう話、あれ大嘘だから」

…は？

「美紀、フリーフォールだってガンガン乗っちゃうぐらい高いところもスピードもOKな子。あれは田村くんの前で頼りなく可愛い女の子を演出したいが為のお芝居だったってわけ。あたしそれ、許せなかったんだよね、あの時」

小早川の顔は完全に怒っていた。

俺に対してじゃない、河本に対してだ。

仲良く見える女同士の間でも裏側には色々あるんだな…、とやや慄く…。

けど、小早川の話が本当なら、やっぱ俺はあん時あーなってて正解だったぜ。

悪いけど、嘘をついて可愛く見せようとする女の子はパスだ。ありのままの自分で俺を好きだって言ってくれる子がいいぜ…。

――なーんて偉そうに言えるほど、モテちゃいねえ俺だけだなっ！はっ！

でも、

多少小早川の私情みたいなのが入ってる気はしたけど、で、あんまり人を悪く思いたくはないけど、河本に松山弟はもったいないぜ！あいつ、運動神経しかとりえのない体育バカだけど、いいヤツなんだから！

「じゃ、そろそろ帰ろう？」

と、小早川が立ち上がったんで、俺たちはドトール珈琲を出た。

・

・

「あ...」

真正面の四角いコンクリート柱の前に風間とマドンナ先輩がいた。

「じゃあね、田村くん」

と、小早川が改札を入れて行ったのと、

パシン！

マドンナ先輩が風間の頬を打ったのが同時だった。

「痛て.....」

風間が頬を押さえて呟いたのは、打たれてからしばらく経ってからだった。

風間を打ったマドンナ先輩は、儚くも淡くも頼りなくもない、大人の顔をしていた。

「...響くん、最低」

マドンナ先輩の呟く声は冷めた諦めの色がする。

風間は頬を押さえたまま、じっとマドンナ先輩を睨みつけている――。

緊迫。

こういうシーンには出来れば出くわしたくない。

けど、昼間の体育館裏といい、どうもこのふたりとはかみ合っちゃう俺のようだ。

「...ごめん。痛かったでしょう...？」

しばらくの沈黙のあと、マドンナ先輩は言った。

そして、風間の頬に手を当てようとしたけれど、それを風間は振り払った。

「...いいよ。大丈夫だから」

風間の声は低く冷めていた。

いつもなら、風間のこういう態度に俺はハラハラしちまうんだけど、どういうわけかマドンナ先輩が哀れには見えなかった。たぶん、先輩の顔が妙に大人びているからだ。パシンとやられた頬を紅くしてマドンナ先輩を睨む風間が拗ねたガキに見える。

「...じゃ、そういうことでいいんでしょ？」

と、風間。

「...響くんがそれでいいなら」

マドンナ先輩の言い方もどこかあっさりしていて、

「...いいも悪いも、最初からそうだって思ってたから...」

いまいち話は見えてこないけれど、

「...最初からわかってただなんてあんまりよ。最低だわ...」

マドンナ先輩は涙ぐむけど、

「...いいよ、最低でも」

風間はやっぱり冷たい。

俺は直感した。

このふたり、終わりだ。

ふたりの間に通い合うものが感じられない。

マドンナ先輩も風間も、互いに向き合っているけれど互いを見ていない、それがひしひしと伝わって来た。

「...わかった。じゃあ、これで...」

マドンナ先輩はそう言って、後ろに一步下がった。

「ああ...」

風間はマドンナ先輩を見もせずに相槌を打つ。

先輩が、くるっと回れ右をして改札の方に去って行ったとき、

「あ、ちょっと待って」

風間は先輩を引き止めた。

そして、立ち止まった先輩を後ろから抱きすくめるようにして両手を前に回し、先輩の耳元で何かを囁いた。

先輩はしばらくその場に立ち尽くしていたけれど、やがて小さく頷いて改札をくぐって行った。

今まで半年間ふたりを見てきた中で、今の風間の態度に一番優しさが込められていたように感じたのは気のせいだろうか――。

俺は息をするのも忘れてずっとふたりの様子に見入ってたみたいだ。ここで苦しくなって、ぶはっ、とやっちゃった。

「田村...」

ようやく俺に気がついた風間が、

「...もしかして見てた？」

と、バツが悪そうに言った。

「パシン、とやられたところからずっと見てた...」

「...ああ、そう...」

風間は張られた頬をすりすりとさすり、

「田村にはまた怒られちゃうかもしれないけどさ...」

風間は改札の方をじっと見つめた。

けど、どこかサッパリしたような顔をしている。

少なくとも、未練のようなものはひとつも感じない。

「...別れた？」

「...別れたっていうのか、これ？」

「お付き合いしていた男女が、そのお付き合いを解消したことを、`別れた、と世間一般では言うらしいぜ？ま、俺には付き合うも別れるもカンケーねぇ言葉だけど！」

風間はニヤリと笑い、
「んじゃ、田村のいう通りでなおかつフラレタとも言うらしい」

え？！
フラレタ！？

「マドンナ先輩にふられたわけ？」
「っていうかさ、元の鞘に戻った...ってことだな」

はぁ？！
意味不明！

「求む、解説！」
「おごる？」

風間は目の前のドトール珈琲を顎で指す。
たった今、小早川にもおごったばかりで財布の中身は超寂しくなっていたけど...、
「しょーがねえ...。その代わり珈琲のみね！」
「了解！」

で、再びドトール珈琲です。
2杯の珈琲を頼んだら財布の中身はすっからかん。

「あの人、最初から俺のことなんか好きじゃなかったんだと思うぜ？」
さっきと同じ席についてから開口一番の風間の言葉には耳を疑った。
「そんなわけねえだろ？！マドンナ先輩はいつだってお前を待ってたじゃないか」
「だから、それは最初からカムフラージュ」
風間は珈琲をごくんと飲んだ。

カムフラージュ。
確かに、マドンナ先輩が風間に接近した最初の理由はこれだった。
体育教師の戸島にしつこく付きまとわれて、断るに断れなくていた先輩に意思表示をしろうと言ったのが風間だったから。
風間と付き合ってるって見せかけて戸島に諦めてもらうという作戦は成功したんだよな。あれから戸島がマドンナ先輩を追いかけることもなかったし、で、マドンナ先輩はいつの間にか偽彼氏のはずだった風間に惚れて、なんだかんだとあったけどふたりはカムフラージュが縁でらぶらぶはっぴー.....！

「.....だったんじゃないの？」

「否...」

風間は首を振った。

「あの人の本命は最初から戸島。あいつら、去年までお忍びで付き合ってたらしいぜ？」

ああ？！

「戸島が浮気でもしたんじゃないの？で、いざこざがあってあの人は戸島から離れたわけ」

風間が訊いていたのはここまでだったらしい。

けど風間は、マドンナ先輩はずっと戸島を想い続けていると思ってたようだ。

先輩が風間に惚れたのも、無理に本気になろうとしていたようだ、と。

「お前、それって最初からわかってたわけ？わかっててマドンナ先輩と付き合ってたわけ？」

「...わかってたって言うか...、感じちゃってたってことかな？あの人が俺にくっついてくるたびにそれをすごく感じたなあ...」

じゃ、風間は自らピエロやってたってことかよ？

「お前、それでよかったの？」

俺ならつらい。

感じながら付き合うなんてできねえよ、たぶん。

「だから、俺の役目はカムフラージュだから...」

あ、そうか.....。

最初から偽彼氏だったわけだ.....。

でも、それで一緒にプールに行ったり毎日一緒に登下校したり他にも彼氏彼女がやるいろんなこと、できるか？

「...戸島にプロポーズされたってさっき言われてさ、随分勝手なヤツだなんて言ってやったら、そんなふうになるって逆に怒られちゃったぜ.....」

あれ？

体育館裏でのあの話のこと？

あれってマドンナ先輩に向けた言葉じゃなく、戸島のことだったのか――？

って言うか....、

「プロポーズ！？」

ワンテンポ遅れたけど驚いた！

戸島がマドンナ先輩にプロポーズかよ！？

「俺と付き合いながら戸島を待ってたなんてこと、あの人は自分じゃ全然意識してなかったみたいだし、俺もあの人に入れ込んでたわけでもねえし....、話がちょっとややこしくなってさっきの

パシン！...本気で殴りやがった、あの人...」

で、

——最初からわかってたなんて最低。

なんて言葉が出たわけか。

結局、風間も本気で付き合ってたわけじゃないってことだもんな。

でも、それはマドンナ先輩だって.....。

「...だから、あの人は意識してなかったって。響くん好き、って何回も言われたもん、俺」

はっ！

そーですかいっ！

そん時はお前だって `マドンナ好きだぜ~、なんて、いちゃいちゃしてたんだろーが。

「まあ、その辺は臨機応変に.....」

けっ！

「さーて、そういうことだよ。まあ、色々心配かけて気をもませちまって悪かったな！ごちそーさんでした！」

と、風間は珈琲を飲み干した。

しかし...、なんというか...、コメントのしようがありません。

風間はこうやってあっけらかんとしてるけど、ただのカムフラージュでここまでは付き合えないってのはいくら非モテの田村くにでもわかるぜ。

ヤツはヤツなりにマドンナ先輩を想ってたに決まってる。

それがどれほどのもんかってのはわかんないし、松山兄が吉岡に対して想ってたのと同じようだったのかもしれねえけど、なんにしてもその一瞬は一生懸命だったってのは確かだぜ。

——マドンナ先輩...、罪な女（ひと）だ！

まあ、これも青春の1ページってヤツか？

で、後日談。

マドンナ先輩から「ちょっと田村くんいい？」と呼び出されて聞いた話だ。

あの体育館裏でのこと。

戸島にプロポーズされたってことを風間に言って、もしもヤツが引き止めていたらどうなったかわからないって。

——自分でもわからないの。どれが真実のキモチなのか…。

うつむいた先輩はいつもの儚い先輩だった。

……風間響、……罪な男だぜっ！

……けど、あの駅の改札でマドンナ先輩を後ろから抱きしめて最後にヤツが囁いた言葉は、

——幸せになれよ。

だったって。

29 非モテたちのバレンタイン

2月14日なんて日がなんであるのか、俺は毎年思うわけだ。

いや、2月14日は暦の上でなきゃならない日だからしょーがないけど、日本中の男女が盛り上がるイベントが気に入らない。

自慢じゃないが俺は甘党だ。

チョコレートなんて大好きです。

俺にくれたらきっと、その場でハートと一緒に食べつくしてあげちゃうって一のに、生まれてこのかたバレンタインチョコレートというものを、かーちゃん以外からもらったことがない。この年になってかーちゃんのハートなんか食ってもしょーがないわけで別のちゃんとしたハートが欲しいなあ〜なんて思ってた、ついこの間まで....。

けど、今となっちゃそんな自分のことよりも、この日を目の前にして揃いも揃ってフラレちゃった仲間たちを、何とか励ましてやんねえと....、なんて思っていたりするわけだ。

実際、松山兄なんか悲惨だ。

自分をフッタ彼女と同じクラスなわけだから、いやでも毎日顔を合わさなきゃならない。

しかもバカだから授業中指名されて答えられないことなんか毎日なわけで、そういう時のバツが悪い自分までおもいきりさらさなくちゃならないわけだ。

フラれた彼女の前で立たされてバカさらすのって、男にとっちゃ相当な屈辱。

かなりキツイ立場にいる松山兄。

弟の方は意外にも立ち直りが早かった。

さすがに2、3日は暗かったけど、幸い小早川が俺に言ったことには感じていないようだし、ヤツの中で河本がどれだけの存在だったかわかんねえけど、こいつは案外過去を引きずらないタイプのようだ。

で、風間。

ヤツはもう、すっかり以前と変わらない。

付き合ってた相手が、あとしばらくしたら嫁に行っちゃうかもしれないってのに。そして、今俺たちブックキャスルは1週間後の三送会でのバンド演奏のために練習してるってのに、ちっともナイーブになってねえし声の張りもいいし....。

けど、それはそれ。

やっぱ弟も風間もどっかに傷は隠してるはずだ。

半年も付き合った相手に何の情もないって方が不自然なことだろう。

顔で笑って心で泣いてるに決まってる。

とくに今日という日は一一。



放課後の音楽室。

唯一幸せ街道まっしぐらな柏木くんをのぞいた、俺を含めた4人は案の定、一個の収穫もないままこの時間を迎えた。

昼休みに呼び出され、帰って来た時にはラブリーな紙袋を持ってるクラスメートもいたさ。

放課後どこそこに来てください、なんて書いたメモを下駄箱にいれられてるヤツもいたさ。

けど、俺たち1年F組ブックキャスルにはそんな呼び出しもメモもなかったわけです。

「おっかしいなあ…。俺が非モテのはずはねえんだけどなあ…」

不適にも首を傾げたのは風間だ。

「マドンナ先輩と付き合ってるってことが有名すぎるからじゃないの？」

まともに答えてやる優しい柏木。

「…付き合っただけ。過去形なの、過去形。今は完全フリーな風間くんなのよ？世の女どもは、この期を逃しちゃいかんぞが」

相変わらず口だけは達者な男だ。

そんなこと、これっぽっちも本気で思っちゃいねえくせに。

「…どっちにしたって結果がものを言ってるってことよ。お前も俺たち同様、非モテの仲間なの！」

松山弟につっけんどんに言い放たれ、風間は、う…、と言葉を失くした。

そんな様子を、少し引いた形で黙って見てただけの松山兄が、

「…甘い食いたいなあ……」

と、ぽつりと呟いた時は、涙が出そうになっちゃったぜ。

あまりにも……、

……情けなくて。

「んじゃ、甘い食わせてやっから！」

俺はカバンの中からポチ袋を4つ取り出して松山兄弟と風間に一個ずつ投げてやった。

「何？これ？」

風間が早速中身を見て…、

「…田村？」

と、呟く。

「…非モテ男用バレンタインチョコレート。田村くんからキミたちにプレゼント」

一個の板チョコを銀紙包みごと4つに割ったひとかけらを、それぞれ正月のポチ袋に入れて持ってきてやったんだ、キミたちのために！

「うう...田村あ...。お前ってヤツは...っ！」

松山兄は袋の中から銀紙チョコを取り出して口に入れ、

「...ガーナチョコだ...」

と、言った。

「大正解！」

「...田村って、やることが可愛いよな...」

と、言いながら風間もガーナを口に放り込む。

「...ほんっと...。バカだけど見かけによらずな...」

と、弟。

バカは余計だけど...、まあここは聞き流してやるさ。

「...その一個は俺にくれるの？」

俺の手に一個残ってる袋を指差して柏木が言った。

「いーや！これは非モテ男用のチョコレートだからお前には無し！」

「ええ〜？！じゃあ、それは誰のなんだよ？」

「これは俺の！」

ヤツらにだけあげて自分のがねえってのは悲しいだろ？

なんたって俺は元祖非モテなんだから...！

「俺も甘い食べたい.....」

と、柏木はしょげた。

「お前は小春ちゃんからもらっただろーが！」

4人が思いっきり声揃った。

「...もらったけど...」

柏木はますますしょげる。

「...思いっきりビターなんだよ。...っていうか、これ砂糖入ってないみたいで...」

柏木が出したのはラブリーな袋に詰められた小春ちゃんの手作りハートチョコレートだった。

失礼な風間が袋の中から一個をつまんで口にいれ、

「にがっ！」

と、顔をゆがめた。

柏木は少しムッとした顔を風間に向けたけど、

「小春ちゃん、かなりそそっかしいから...」

と、うつむいた。

小春ちゃんがそそっかしいってのはよくわかる。

なんたって、柏木に手渡したラブレターに自分の名前を書き忘れた子だから…。

「…ま、気持ちだけ受け取るんだなっ！」

松山兄は幸せなヤツには冷たい。

「しょーがない…」

俺は自分のを半分に割って柏木にくれてやった。

「サンキュー！」

「どういたしまして！」

こうして非モテの哀しみを分かち合った俺たちは、ガーナチョコの甘さに癒されながらのバンド練習を終えて昇降口に下りてきた。

「田村くん、今帰り？」

下駄箱で会った小早川が声をかけてきた。

「ああ。今部活終わったから」

「そうなんだ。あ…これ、あまったから田村くんにあげるよ！」

小早川は俺に紙袋を押し付けた。

「あまった…って？」

「ん？義理チョコ配ってそれ1個あまっちゃったの！あまりもので悪いんだけどもったいないからもらってやって！じゃ！」

小早川は慌てたように昇降口から飛び出して行った。

……………。

袋の中には手作りらしいチョコが何個か入っていた。

義理で手作りするなんて、小早川ってマメなんだな……。

いや、そんなことはどーでもいいとして、

はじめてもらったよ。かーちゃん以外から。

たとえ義理でもあまりものでも。

小早川からでも。

——超嬉しい田村くんですっ！！！！

ふと、刺さるような視線を感じて顔を上げると、奴らがじーっと俺を睨んでる。

「…へ？」

「いこーぜ……」

と、松山兄。

「...田村にだけ、か...」

と、弟。

「裏切り者...」

と、風間。

ヤツら3人は次々にひとこと喧いて先に行っちまった。

...ありゃ...。

「田村くん、よかったじゃん。本当は非モテじゃないんじゃない？」

柏木だけはニッコリと笑ってくれた。

何にしても、またこーやってみんなで帰り道を行ける日が戻ってきた。

いいんだか、悪いんだか、だけど。

3月に入ってすぐに三送会があり、俺たちブックキャスルは送別ライブをやった。

ステージの上から見つけたマドンナ先輩はずっと風間だけに注目していた。けど風間はたぶん一回もマドンナ先輩とは目を合わさなかったんじゃないだろうか。

卒業式の日も、式が終わって卒業生が退場したあと、俺たちは名残惜しそうに写真撮ったりしている先輩らの横を素通りしてさっさと帰ってきちまったし、結局風間は最後までマドンナ先輩とはひとこともなかったってことだ。

でもまあ、別れた彼女と、しかももうすぐ人の嫁さんになっちまう人と今さら個人的にお話することもないのかもしれない。色々あったふたりだったからあっさりしすぎる気がしないでもなかったけど、きっとそんなものなんだろう。

しかし、こうも見事に1年間を非モテで通すとは思わなかった。

そういや入学した当初、一番に目をつけた女の子は小早川だった。あいつ、最初のうちはかなり猫かぶっててあれでもなかなか可愛かったんだ。けど、うるわしのマシュマロちゃんって思ってたのも束の間、いつの間にかカラーイ柿の種みたいな女の子になっちまって。

こないだ3月14日も、バレンタイン義理チョコのお返しに飴をやったら、「別にいらないよ。お返しが欲しくてあげたわけじゃないし。あれはホントにただの余りものだったし」

ときたまんだ。

せっかくコンビニでいちばん可愛いペコちゃんの包み紙にくるまってたヤツを買ってきてやったのに。

「いーから受け取れよ。一応お返しなんだからさ」

って無理やり押し付けたらやっと、

「...じゃ、一応もらっとく」

って受け取ったけど、そのあと、

「これ田村くんが買ったの!？」

って大笑いしやがった。何てヤツだよ、まったく.....。

その同じ日、

「田村くうん、ちょーっと一緒に来てくれるう？」

なんて気持ち悪い言い方で寄ってきた風間に音楽室に連行された。

待ってたのは松山ブラザーズと柏木で、風間も合わせた奴らが揃いもそろって体をくねくねしながらカマ声とお目目パチパチ、おまけにあはん、うふんとか変な声まで出しながら俺にまわりついてきた。風間のやつ....、俺を背後から抱きしめやがって怖かったぜ。マジで襲われるんじゃないかと思った。

「これえ、アタシたちからのキモチのお返しよ〜ん」

と、風間がまるで手品みたいに制服の袖口から鮮やかに取り出したのは、ペコちゃんの包み紙の、小早川にあげたのと同じ飴だった。

「...はぁ！？」

何でヤツらが俺に飴なんか...？

しかも、俺に対するそろいも揃ったらぶらぶぶり.....。

.....と、ボーゼンとしながらなおかつ驚愕してた俺に、

「ばぁ〜か、ガーナのお返しだよ！」

突然ノーマルに戻った風間に頭を小突かれた。

「本気にしやがって、やっぱ田村だよ」

と、ヤツらは大笑い。

「ガーナ...？」

そう言えば1ヶ月前、ここでフラレ組のロンリーボーイズに非モテ専用チョコをプレゼントしてやったことを思い出したけど...

「...そのお返し...？お前たちが、このラブリーなペコちゃんを？」

「おお」

「これ、誰が買ったの...？」

「俺」

と、自分を指差した風間。

うっ...と胸がつまった。

ガーナのお返しにヤツらからペコちゃん飴....。

なんて.....、

「田村くんったらぁ！感動のあまり声も出せないでいる...？」

またもやお目目パチパチしながらのヤツらが俺の顔を覗き込んだ。

なんて、なんて.....、

――気持ち悪りいんだぁ.....。

小早川も、田村くんがこんなラブリーなペコちゃん飴買うなんて気持ちわる〜〜い、って思ったんだろう。だからあんな大笑いしやがったんだ、とこの時になって分かった。

ちっさな箱にペコちゃん飴は5個しか入ってなかった。

みんなで1個ずつ食っておしまい。

でもまあ...、うるわしいぜ、俺たちブックキャッスル。

と、そんなこんなな3学期最後の学校が今日。明日からは春休み――。

「何考えてるんだよ、田村？」

ひとりでニヤニヤしたりうなったりしてた俺に風間が言った。

遠くの墨田公園、まだ桜は咲いちゃいないけどきっと今頃芽を膨らませているだろう。暖かであらうかな、春の匂いが漂う終了式が終わったあとの屋上だ。

「いや？今年も見事に非モテ街道歩いて来たなあと思って」

「俺はべつに非モテでもいいけどなあ？」

風間はポケットに手を突っ込んで呟いた。

はん！

もてたことのある人はそーかもしれませんが。

「もう女は勘弁って感じだね...」

おやおや？風間くん、今日はやけに素直じゃないの？

しかし....、

「女は勘弁、なんて台詞一度でいいから言ってみてえな」

思わず本音を呟くと、風間は、はっ！と笑った。

「なんだかんだ言って、田村は理想を追いすぎなんじゃねえの？」

「俺の理想なんかたかが知れてるだろ？なんていうかこう....、守ってあげたくなるようなマシュマロみたいな女の子ってだけの話だぜ？」

「...今時いねーよ、そんな子」

風間は鼻で笑う。

その言い方はどこか陰がある。

「女は勘弁、なんて思うようなことがマドンナ先輩との間にあったってことだな」

と、風間を見ると、

「...突っ込むなよ」

ヤツらしくもなくうつむいたりなんかして。

これはやっぱ相当ダメージきてる感じだぜ。

わざと、そのままじーっとヤツを見つめてやると、風間はうおっほんっ！と咳払いをひとつして、

「女ってさ、一個の心の中に何個もの想いを隠してるよな？」

なんてことを口にした。

「わかんねえな、俺には」

だって、そんなに女の子と親密なお付き合いをしたことねえし！

「あの人はそーだったぜ。好きなんて甘い言葉で寄ってきてベタベタして、そうお？じゃあ、ってこっちが歩み寄ろうとするとサーッと引いていく」

ふーん。

「そんじゃ勝手にすれば？って放っておくとまたベタベタくっついてくる」

あっそ〜。

「疲れた。ここが疲れた」

風間は自分の左胸を拳で叩いた。

「この人には俺じゃないよなあ...って思ってたぜ。よく言う温度差っての？そーゆーのを感じてのめり込んで行けなくてさ。いつもどこかで冷めてたな、俺」

「でもしっかりお付き合いはしてたんだろ？」

「...その辺は突っ込まないで！」

と、風間は言ってから、

「そっちがそーならこっちもそれなりに...、って気はあったぜ。確かにな」

と、呟いた。

「でも、そーゆーのも何だか疲れちまって、いいかげん、こーゆーのもマズイだろって思ってた時に戸島のこと言われたから」

深く追わなかったわけか...

「ま、ここは痛かったけど、こっちは軽くなったってのが正直なところかな」

ここは頬、こっちは胸を、風間は順番に触った。

「お前にとってマドンナ先輩って何だったんだよ？」

核心ついちまった。

やっぱ、俺もマドンナ先輩にはマジで憧れてたんだろう。なんたって一目惚れした相手だし。

この半年、自分は直接かかわっちゃいないってのに心は忙しかった。ほんと、忙しかった。だから、これはやっぱり風間に訊いておきたかった。俺が納得するために。

「うーん...、付き合ってる時はやっぱ彼女だったんだろーな。ただ、いろんな意味でちと辛（から）すぎた。俺はまだお子様ランチだからさ！」

風間はニカッと笑った。

ヤツの口から`彼女、って言葉が出て少しだけ安心した。

やっぱりその時はヤツもマドンナ先輩もともに恋愛してた、しようとしてたってことだ。

「ま、色々あったけど無駄じゃなかっただろーから、辛（から）い経験も次の恋に生かしなさい！非モテの俺に言われたかねーだろーけどな！」

と、ヤツの肩を叩いてやると、

「...俺もしばらく非モテでいいぜ。女は面倒だ」

風間は大きな伸びをした。

まあ、気持ちはわからなくもないさ。

けど、やっぱ俺にしちゃうらやましい限りだぜ。

「女は面倒...か。カッコつけやがって！」

「カッコつけてんじゃなくて、カッコイイんだからしょーがねーだろ！」

はっ！

お子様ランチのくせに。

「ようするに、」

風間は、ん？と、伸びたまま俺を見た。

「自分がとことんハマれる相手じゃないってことだろ？」

真っ直ぐに想いを向けられる相手に出会いたい。

できればそういう子とお付き合いしたい。

いや、お付き合いは次の段階として....

「そーゆー相手に惚れたいんだろ？」

自分の心を人を愛する暖かさで満たしたいって、俺は思ってたりするから。

「...かもな。けど、やっぱしばらくは女は勘弁！俺は田村くんがいいさ」

風間はまたキマリすぎのウィンクだ。そして、

「仲良くしよーぜ、田村くん！」

なんて俺の肩に手を回してくる。

風間ってこーゆースキンシップが好きな男だ。

っていうか、こいつ、マジで俺に惚れてるんじゃないだろーな？！

風間に半ば本気で迫られ、バカみてえにじゃれあってるところに、

「こんなところにいたぜ！しかもふたりでホモってるし！」

と、なだれ込んで来たのは松山兄弟と柏木。

俺と風間を冷ややかな目で見つめながら、

「とっとと帰ろうぜ？」

「今日はビリヤード半額デーだぜ？行かねえの？」

と、口々に言った。

風間は俺の首に手を回したままの状態で、

「んじゃ、勝負してくか〜！」

と、声高らかに叫んだ。

さーて。

うるわしの高校1年も今日でお終い。

まあ、2年になっても変わりようがねえような俺たちだけど、今度こそマシュマロのような女の子に出会えるかもしれねえし、非モテライフから脱却できるかもしれねえし、俺だってちっとは

期待しててもいいよな。

何か、気分明るいぜえ～！

.....その前に、

あひるの行列のような成績表をかーちゃんに見せなきゃなんないってのがガンだけどな...っ！

高校 1 年編終了

高校 2 年編へつづく

春、うららんー。

今日は高校の入学式ってやつで、俺も晴れて高校生の仲間入りだ。

長い苦しい冬を乗り越え迎えたこの春！

桜咲く路をこんな風にテクテク歩くことを、1ヶ月前はどんだけ夢見て焦がれていたことか。

ああ～

なんて気分いいんだろう～

心ウキウキ

胸トキメキ

桜咲く入学式～

「田村。何だよ、その歌は...」

「...あ？」

やべ。

心の中で喋ってたつもりが、弾む気持ちがメロディー付きで口に出ちまってたらしい。

俺の隣をチンタラと歩いている風間が、おもむろに怪訝な顔を向けて鼻で晒った。

「浮かれちゃって、田村くんは可愛いなあ」

風間は手ぶらの両手を金髪揺れる頭の後ろに組んで、ほわぁ～とやる気なし100%のあくびを出した。

「さあ！いよいよ出会いの季節！そーゆー仏頂面してんじゃねーよ、風間ぁ！」

元気に風間の背中を掌で打ったのは松山太郎。

コイツの浮かれてる理由はどこか不純なところにあるのだが。

「うるせー。俺はいつもこーゆー顔なんだよ」

こんな麗らかな入学式日のに、風間の機嫌はあまりよろしくない。

その理由ってのが昨夜からおふくろさんとバトタッチまった、という、小学生並な理由ときてるからコイツも俺に負けずとも劣らず可愛いもんだ。

「で、おふくろさんは来ないんだろ？」

「あたりまえ」

高校の入学式ってのはアッサリしたもんで、学校に繋がるこの道を父兄同伴で歩いているヤツはあんまりいない。

ま、中には我が子の晴れ姿を祝うために、我が子よりも派手に着飾ったオバちゃんが迷惑そうな顔した子にやや遠ざけられながら歩いてるけども、俺や松山ブラザーズの親に関しちゃ最初から出る気なんかさらさらなく、今朝は普通に、早く行け、と言わんばかりに追い出されて来たわけだ。

がしかし、風間のおふくろさんは、最初から今日はコイツと一緒に来る気でいたらしく、その計画を昨夜知った風間が「来るな」と強く断ったらえらいすねちゃったらしい。

で、今朝は朝メシがなかったらしく....、

「腹減った....。学食ってもう開いてんのかな」

と、ぼやいている。

「さすがに入学式の日から学食ってのもないんじゃないか？」

「だろな...？じゃ、コンビニ寄ってくか...」

がしかし。

駅前の商店街を過ぎちまってから学校までの間にそんな素敵なものはなく、風間はすきっ腹のまま入学式に出ることになった。

横でヤツの腹が鳴ってるもんだから、俺はしっかりおかわりまでして来たってのに、お付き合いで腹の虫が騒ぎ出して、式典の静肅な空気を風間のグーとか俺のキュルルーとかたまに間違えて松山兄弟どっちかのプーとか、腹だのケツだのをコミカルに鳴らして破っちまったから、俺たちは入学式早々から周りのひんしゅくを買った。式が終わって、廊下を教室に向かって歩いていく時など、他のクラスのヤツらまでも俺たちをマジマジと見ていく。

「ちと腹が鳴ったぐらいでやな感じ」

松山太郎がおもむろに振り返って見ていくヤツにガン飛ばしてぶつくさ文句を垂れた。

「おめーが鳴らしたのは腹じゃねーだろが」

弟の次郎がツッコミをいれてるあたり、間違いのプーは兄の仕業だったらしい。

「お、俺じゃねーしっ！おめーだろが！」

「はぁ？！俺じゃねーよ！人のせいにしてんじゃねー！」

廊下の真ん中で始まった兄弟バトルが、さらに注目を浴びる結果となる――。

「どっちだっていいだろ。おんなじ顔してんだから」

風間がぶっきらぼうに言い放った。

腹減りすぎて最悪だったのに、うるせーよ、とでも言いたげに。

「顔は関係ねーだろう！」

「音も臭いも違うっての！」

くすくすくすくす.....。

まだ見知らぬ女子たちが通り過ぎていく。

心ウキウキ、胸トキメキなはずの入学式が、なんだかとんでもないことに。

「だいたい、おめーが朝メシ食ってこないからこんなことになるんだ」

「そーだぜ！素直にかーちゃん呼んでやればよかったんだ」

「俺かよっ？！」

ブラザーズが協力技を発動し逆襲に入った頃には、いったい何でモメてるのか分からなくなっちまってた。

何にしても今日は入学式で、ここは廊下の真ん中で、これから初めてのホームルームがあるってのに、俺たちはいったい何をやってるんだろう。

「いいかげんやめようぜ？まだ入学して1時間も経っちゃいないのに、全1年に『鳴り物』でアピールする気かよ？」

中学の時は変な意味で目立ってたんで、高校では爽やかでカッコイイ田村くんでありたい。

グーだのプーだので有名になるのだけは勘弁だ。

腹減り極致の風間は青筋立っちゃってるが、とりあえず戦闘態勢になっていた三人は落ち着きを取り戻した。

で、さて教室に行くかって時、

「ちょっと待て、お前ら！」

背後から俺と風間の肩をグイッとつかんで来たヤツがいた。

ったく、入学早々これかよっ！

「――あんだよっ！？」

風間とふたり、応戦体勢バリバリで振り向くと、そこにいたのは予想に反し、ちょいとくたびれたようなスーツを着た若い男。

見たことないが、おそらくセンセだろう。

式典でのグーとかプーが、やっぱ入学式にふさわしくないってんでまずかったのか？このセンセはずいぶんのご立腹のようだ。

「なんスか？」

「なんスか？じゃねえだろっ」

センセは俺と風間を順番に指差した。

「お前らのその派手な頭髪！ライブハウスに行くのと間違ってるじゃねーのか？」

あ。

俺、赤メッシュ。

風間、金髪。

「それから、お前のそのシャツ！ファッションショーなら他所でやれ！」

さらに風間、オレンジシャツ着用――。

中学の時からこれが普通だったから全然気にしちやいなかった。

俺のメッシュも風間のオレンジシャツも金髪も。

「コイツの金髪は天然っすから！」

「そうそう。だからしょーがないってやつで！」

風間は髪の色をなんだかんだ言われるのをものすごく嫌う男だ。

そこはヤツの起爆装置だってのに、今はさらに腹っぺらしでいつキレるか分からない。

そういうヤツをよく知っているブラザーズは、必死こいて庇う庇う。

センセは風間の髪をじーっと見て、それには納得したのか、ただふん、と鼻を鳴らし、

「ホームルームのあと職員室の俺んところに来い！いいな、お前ら全員だ！」

と、厳しく告げた。

そして、...ったく、信じられねー1年だ、とぶつぶつ文句を言いながら廊下を去っていった。

「注目されてたのは、俺の屁じゃなくおめーらじゃんっ！」

プーの犯人はやっぱ松山兄、ということで。

説教はやたら長く、センセの前に横一列に並ばされてる俺たちの腹だのケツだのが順番に天然演奏を奏でる。

それが時々ハモッてたりして、おっ、と思ったり。

――.....。

風間の青筋はますます際立ち、けど説教は終わりそうもない。

ヤツはいつ、朝メシにありつけるのだろうか。そろそろ精神的限界が近いようで、風間の足は、方々から鳴る天然演奏に合わせるかのように小刻みにリズムを刻み始めている。

――高校ったって、中学とあんまり変わらねえじゃん。

校則がどうのこうのうるさいし、センセの説教は長いし、俺たちなんだか問題児扱いだし――。

――ま、いいか。

この本城高校で、これからどんなことが待ち受けているのやら。

できればたくさんの可愛い女の子と仲良しになりたいなあ...なんてことを、センセの説教を適

当に聞き流しながら思っていた田村くんでありました。

了

東京を出発した時は長袖のブレザーが暑くて薄いブラウス一枚がちょうどよかったのに、猪苗代湖に到着した時はブレザーを着ても寒いぐらいの気候だった。

東京との温度差がこんなにもあったなんて、知っていたらニットのセーターだって持って来たのに、これもちゃんと猪苗代のことを調べて計画を立てなかったからだ、と思わずあっちの方に固まって、さみーさみー、と足踏みをしている4人のバカボーイズを睨んでしまった。

バスの中では田村くんが何度もあたしや雪乃のご機嫌を取って話しかけてきたり、ガムや飴をくれたりしたけど、その横で松山兄くんが下品な話を連発してるもんだからどうも素直に受け取れなくて無視しちゃった。

田村くんたちの`猪苗代湖自然散策、は`猪苗代湖女の子散策、だってことはわかりきっている。

現地では別行動をしてもらうつもりだから別にどーでもいいのだけど、こーやってご機嫌を取って来る裏側でいかがわしいことを考えてる田村くんなんだよな、と思うと余計に腹も立って。

「ねえ環、本当に風間くんたちと別行動するの？」

バスが志田浜のドライブインであたしたちを降ろし、次の場所に出発してすぐに雪乃が言った。

「そうだよ？あんなおバカなヤツラと一緒に行動したってしょうがないし」

「そうかな？面白いと思うけどなあ？」

雪乃は田村くんたちとの別行動には最初からちょっと不服のようだった。

けどあたしが押し切っちゃった。

「...でも、田村くんたちがまともに散策をするとは思えないんだけど...」

と、桂子ちゃん。

「問題を起こされる前に一緒にいて監視してた方がよくない？特に松山くんは何をやらかすかわかんない感じるし...」

「そうそう。結局あとでフォローしなくちゃならなくなるのはあたしたちだよ？」

確かに雪乃や桂子ちゃんが言うことにも一理あると思う。ヤツラが何かやらかしたらその責任は班長のあたしに降りかかってくる。

だけど、今さらやっぱり一緒に散策しようなんて言いにくいし言いたくもないし。

「.....あたしたちは予定通り行こう？田村くんたちがやっぱりあたしたちと一緒に散策に行くっていうならそれは別に拒否はしないけど、あたしたちから言うことないよ。そうでしょ？」

そうよ！

何であたしがこんなところにまで来てアイツらのこと気にしてなきゃなんないのよ！

急に馬鹿らしくもなって、あたしはさっさと湖畔に向かって歩き出した。

「...せっかく風間くんと同じ班なのになぁ...」

風間くんがお気に入りな雪乃はまだぼやいているけど無視。

だいたい風間くんのどこがいいんだか、あたしにはさっぱり理解不能だわ。

まあ誰が見てもカッコイイと形容するだろう美形ってことは確か。

けど、あまりにも整いすぎて自分のルックスに、あまりにも自信がある風の態度がイケナイ。
あれは絶対に遊び人タイプよ。

決して「ヒステリー」って言われたことを根にもってるわけじゃなくて純粹に気に入らない。

――なんて思いながら、あたしたち3人は4人組の横を素通りしてきた。

風間くんと松山兄弟はちっとも気にしてない風だったけど、田村くんだけはやっぱりあたしたちを振り返って見てた。

ほんの一瞬....、

せっかく田村くんと同じ班なのになぁ....、

――と、雪乃みたいなことを思った自分がものすごく悔しかった。

同じ班だから苦労してるのよ、実際。

でもね....。

――もう、なんだかわけがわかんない！

そしてこの寒さったらいったい何！？

湖畔の遊歩道をのんびり歩きながら植物や鳥たちを観察しようっていうあたしたちの計画だったけど、ぴゅーぴゅーと吹きすさむ予定外の冷たい風のせいで続行不可能に近い。

「こんなに寒くっちゃバードウォッチングどころじゃないよ～」

雪乃が唇をカタカタと震わせながら言った。

「さっきの志田浜でバスの迎えが来るまでお茶してちゃダメなのかなあ？」

と、桂子ちゃんも言う。

ふと湖の方を見ると、一艘のボートが岸から出て行った。

遠目でよくは見えないけれどボートを漕いでるのはウチの学校の制服を着た男子。

そして、一緒に乗ってるのはたぶん女の子だ。

ボートを漕いでるの、誰だろう...？

田村くんかな……？

よりいっそう寒くなった気がして、
「…志田浜に帰ろうか…」
あたしもふたりの意見に賛成していた。

◇

ボート乗り場のあたりまで戻ってくると、バカボーイズたちは水際に体育座りをして何やら大騒ぎしていた。

湖に出て行ったボートはもう既に遠くの方に行っちゃってて乗ってる人は豆粒にしか見えない。あんな遠くまで行っちゃってもいいのかな、と一瞬思った。

バカボーイズの頭数を確認すると、一番に見えたのは田村くんの赤い髪。そして風間くんの金髪。喚きちらして大騒ぎをしているのは双子のお兄ちゃんの方だ。弟くんの姿が見えないけど、まさか、ボートに乗ってるのがあの弟くんだとも思えないから、とりあえず7班の問題児が何もやらかしてなさそうだということを確認できてちょっと安心した。

湖からは冷たい風が吹いてくる。

ただでさえ寒いのに、こんなところにいちゃ風邪を引きそう。

「環ちゃん、早く行こう？」

と、桂子ちゃん。

「こんな日にボート乗るヤツの気がしれないわ…」

と、雪乃。

「ほんとだね。早くドライブインに戻ろう」

あたしたちは砂浜を志田浜ドライブインに向かって歩き出した。

けど、ふと気が付いて立ち止まった。

あいつら、こんな寒い中、あんなとこで揃って体育座りして湖を見つめて何やってるんだろう…？

普通だったら松山お兄ちゃんなんかはきっと真っ先に、

――やってらんねえっ！茶でもしてよーぜ？！

なんて喚いてバスが来るまでお土産屋にいそうだ。

あたしたちでさえネを上げて戻って来ちゃったんだから。

「ちょっと、何やってんのよあんなたちっ！」

バカボーイズたちの背後から声をかけた。

ヤツらは揃って振り返ってあたしを見た。

目が合った田村くんがおもむろにギョッとした顔をした。

「湖を見つめながら自然の散策してるのさあ〜」

風間くんがひょうひょうとして答えたけど、そんなの信じられるわけがない。

「ひとり足りなくない？」

「あ...ヤツは今便所行っててさあ〜」

と、田村くん。

思いきり疑うわ、それ。

松山弟くんだけがトイレに行って、それを待つこいつらがマジメに湖散策だなんてありえるはずがない。

あそこでボートに乗ってるのが弟くんってわけね。

どういういきさつかは知らないけど女の子と一緒にボートに乗ってる弟くんを、この人たちは指をくわえて見てるってことね。

――バレバレ.....。

「あ、そういや、お前たち、双眼鏡持ってたよな？ちょっと貸してくれない？」

ふいに風間くんが言った。

きっと先のボートを覗きたいんでしょ。

バードウォッチング用の双眼鏡を持っていたから貸してあげようとしたら、

「はい、これ貸してあげる！」

と、すかさず雪乃。風間くんの要望には反応早いわ、やっぱり。

風間くんは、サンキュ！とスマートに言っただけじゃなく強烈なウィンクまで飛ばしてくれちゃって。

あんだ、芸能人？と突っ込んでやりたくなる。

で、双眼鏡を覗いた風間くんはいきなり「うおおお〜〜っ！」と雄たけびを上げ、そのあと、ヤバイヤバイを連発。当然田村くんや松山お兄ちゃんたちも代わる代わる覗いて大騒ぎ。三人はそこでほんとにバカみたいに騒ぎまくってた。

ボートの上で弟くんが何をしてるかなんて興味はないけど、問題を起こされちゃったら困る。班長としてあたしも状況を把握しなきゃ、と自分の双眼鏡を覗こうとしたとき、

「あ〜！あのさ！ボートでも乗んない？！」

と、田村くんがあたしの腕をつかんだ。

「...え？」

思わず双眼鏡を手にしたまま固まってしまった。

だって、田村くんがボートに誘ってくれるなんて信じられなかったし。

「いいねえ！みんなで乗ろうぜ！」

と、風間くんが言うと、雪乃は即座にオッケーを出す。

さっきはこんな寒い中ボートに乗るヤツの気がしれないわ、なんて言ってたくせに...

桂子ちゃんはちょっと躊躇してるみたい。不安な顔をしてあたしを見た。

なんか...、予想外の展開よこれ。

バカボーイズとボートに乗るなんて。

だいたい、誰が誰を乗せてくれるわけ？

あたしたち三人、バカボーイズ三人は向かい合って立ってじっと相手同士を見つめあう。

「じゃ、小早川、のろーぜ！」

一番最初に言ってくれたのは田村くんだった。

田村くん、あたしを一番に誘ってくれたー。

もしかして、出発前のことを気にして仲直りをしようとしてるのかな。

田村くんって...たぶんそういう人だー。

雪乃は風間くん、桂子ちゃんは松山お兄ちゃんとボートに乗ることになって、あたしたちはそれぞれの相手と湖に出た。

湖の上は陸よりも寒かった。

けどあたしはなんだか熱くて...

男の子とふたりでボートに乗るなんて初めてだし、目の前にいるのは田村くんだし。

田村くんだし...？

何であたしそんなこと思ってるんだろうー？

...仲直り、してもいいよね。

ーって、ちょっと素直になってみようかなって思ってたのに...

「だぁ～っさみいっ！誰だよ、ボートに乗ろうなんて言い出した奴は！」

というロマンも何もない言葉を目の前で叫ばれちゃって気分ぶち壊し。

「...田村くんでしょ」

と、冷たく返した。

ほてっていた身体も急に冷めちゃって、そしたらいきなり寒さを実感して震えが来た。やっぱり寒いわ、福島県...。

田村くんは、

「ま、色々悪かったよな。これからは仲良くやろ一ぜ」

なんてことをサラッと爽やかに言った。

憎たらしいぐらいに。

嬉しいんだか悔しいんだかよくわからない感情がぐるぐる駆け巡った。

とっさに出ちゃった言葉は、

「ばっかみたい...」

――可愛くないな、あたし.....。

田村くんは、はっ、とひとつため息をついてから、あっちの方に行っちゃってる弟くんを目指して、器用にボートを漕ぎ始めた。

◇

松山弟くんのボートは湖の上に張ってあるまあるいボールを超えた向こうの方にいた。

あのボールより向こうは行っちゃいけない場所なのに、あんなところで何をしているんだろう。

そして、田村くんは弟くんたちがいる場所をめがけてボートを進めている。

田村くんって見かけによらず器用だ。

ボートはスイスイと流れるようにして進んでいく。

あたしは自分でボートを漕いだことなんてないからわからないけれど難しそう。

オールを握る田村くんのちょっと骨ばった手の甲をぼんやり見つめながら頭の中ではそんなことを考えていたとき、ずっと自分の後方に顔を向けていた田村くんがふいにあたしの顔を見た。

「な、なによ...？」

「い、いや、別に...？」

これ以上会話は続かなかった。

田村くんはまた自分の後ろに顔を向けてしまった。

あたしと一緒にボートに乗っているのにさっきから田村くんが気にしているのは弟くんのボート。

弟くんが、乗せている女の子と何をやってるのか気になってしょうがない感じ。

早くそれを確かめたくて、田村くんは一生懸命ボートを漕いでいる。

雪乃と風間くんは会話が弾んでいるみたいで、時々雪乃の甲高い笑い声がここまで聴こえてくる。そして、最初はボートに乗るのに躊躇していた桂子ちゃんも楽しそうにしている。桂子ちゃんは優しいから松山お兄ちゃんのつまらないギャグにもちゃんと反応してあげてるんだろう。とにかく彼女たちはちゃんと相手と向かい合っている。

なのにここ、田村くんはずっと後ろを見たまんまだし、話も続かないし、あたしと一緒にいる田村くんは楽しいんだろうか？

田村くんは何で一緒にボートに乗ろうなんて言ったんだろう？

あたしは何で田村くんと一緒にボートに乗っているんだろう？

こんなに寒い湖の上で――。

「田村くん、この先は行っちゃいけない場所だよ？」

とにかく何か喋らないと何となくあたしの居場所がないような気がしたから、ボートがボールを越えようとしたところと言った。

けれど田村くんは聴こえなかったのか、返事もしないでひたすらボートを漕いでいる。

「ねえ、田村くん？」

もう一度言ってみたけど田村くんはあたしを見もしない。

「ねえったらっ！」

無視されてる、って思ったら無性に腹が立った。だいたい田村くんから誘ったくせにこの扱いってどうよ？目の前にいる女の子を無視してあっちの方で弟くんと仲良くしてる女の子が気になってるなんて失礼もいいところ！そーゆーキモチがちょっとキツイ言い方に出てしまったのだけど、

「うるさいなあ！俺を信じて黙ってついてこいよ！」

っていう、田村くんの反応にはかなり驚いた。

信じて黙ってついてこいってどーゆーこと？

信じていいんだ？田村くんのこと？

ボートはボールを越えて危険区域に入っちゃったけど、もしもここで何かあったとしても田村くんを信じてていいわけね？

——そう、解釈してもいい一言なわけね？

田村くんの骨ばった手の甲を見たままそこから顔を上げられなくて、あたしは言われたとおり、信じて黙ってついていくことにした。

湖には手が届くぐらいのところにたくさんの藻草が生えていて、さっきまでスイスイだったボートの進みもだんだん鈍くなっていた。

草はオールに絡まるみたいで田村くんは漕ぎにくそうだ。

これ、やっぱり危険なんじゃないのかなぁ？オールが草に取られちゃったらボートは動けなくなっちゃうわけでしょ？こんな寒い湖に何時間もいたら凍えちゃうし、もしも落ちたりしたら死んじゃうかもしれない。

落ちて上がってこない人のニュースとか色々あるんだよね、この湖……。

嫌な予感がして身震いした。

「もう少しなんだけど…」

「頑張ってくださいっ！」

って、弟くんと女の子は言い合いながら湖から何かを拾おうとしているみたいだった。

どうしたんだぁ？って田村くんがボートを近づけた時の弟くんは、心底ほっとしたような顔をした。

「ちょっと松山くん、何やってんのよ…」

って言ったら、

「すみません。あれを取って欲しかったんですけど、取れなくて…」

女の子が泣きそうな顔をしながら訴えた。

藻草に絡まっていたのは女の子の死んだお父さんがお母さんにプレゼントした大事なスカーフで、女の子はそれをこっそり持ち出して湖畔を歩いていたら風に飛ばされてしまい、松山くんに拾ってもらうためにボートを出してもらったと説明した。

そんなの自業自得じゃないって思ったら、

「俺にやらしてみ？」

なんて田村くんは言い出す。

そして、弟くんがやってたようにオールを伸ばしてスカーフを拾おうとしたけど、オールで触れば触るほどスカーフは沈んでいってしまう。

田村くんも弟くんも神経をスカーフに集中させて必死。

——ばかみたい…。

女の子は潤んだ目をして必死な田村くんを見つめているけれど、その前にこんな危険区域に知らない男の子を連れてきて、自分の不注意で飛ばしたスカーフを取ってもらおうなんて虫が良すぎる。可愛い顔してるけど人のことなんてどうでもいいただの自己中な女の子じゃない。こんな場所でもしも何かあったらどうするつもりなの？

そして、そーゆーことも考えないでいい格好をしようとするこのバカボーイズたちにも腹が立った。

「どうしよう...？」

儚い声で女の子は言った。

どうするもなにも諦めたらいいのよ。

自分が悪いんだから。

けど、次の瞬間、信じられないことが起こった。

「俺にまかせなさい！」

って叫んだ田村くんが、あっという間に着ていた制服を脱いで赤いチェックのパンツ一枚になって湖の中に飛び込んでしまった。

「田村くんっ！！」

こんなつめたい水の中に準備体操もしないで飛び込んじゃって、ほら見なさい！動けなくなっちゃってる！

――東京の高校生 湖に転落水死――

っていう新聞の見出しが目の前に浮かんで身体が震えた。

「田村くんっ！！」

自分でもわからないぐらいにパニックに襲われた。

気がついたら田村くんはちゃんとスカーフを握ってて、弟くんが田村くんに向かってオールを伸ばしていた。それがあまりにもまどろっこしい。早くしないと田村くんが...！

「もう、松山くんなにやってんのよっ！こっちだよ、こっち！早くっ！田村くんが死んじゃう！！」

田村くんはやっと動いてる、という状態でボートに帰ってきた。

とりあえず生きている。でも、唇は真紫になっちゃってるし身体はぶるぶる震えてる。

とにかく身体の水をふいて洋服を着せなきゃ、とそれだけしか頭になかった。持っていたタオルで田村くんをふいて制服を被せたけど震えはまだ止まらない。

当たり前だよ、ただでさえこんなに寒いのに頭からびしょ濡れになってるんだから！

「松山くんも上着を脱いで田村くんに貸しなさい！」

のん気に口開けて見てるんじゃないっての！

どうして男の子ってこうも気が利かないんだろう？

とにかく早く帰って田村くんをあっためないと風邪引いて肺炎にでもなっちゃったら大変！

あたしはオールを取ってボートを漕ごうとした。

けど、ボートは動いてくれない。

早く帰りたいのに。

田村くんが死んじゃうよ…。

焦る気持ちと思うように動かないボートと湖に飛び込んだ田村くんと女の子のスカーフと、色んなことがあたしの心をぐちゃぐちゃにかき回して泣きたくなった。

「俺が漕ぐよ。大丈夫だから…」

田村くんは骨ばった手であたしからオールを取った。

赤い髪から雫をポタポタ垂らし、ぶるぶる震えながらボートを漕ぐ田村くん。

――何でそこまでするの？知らない女の子のために…。

松山くんのボートに乗ってる女の子は黙ってうつむいて、田村くんが命がけで拾ったスカーフを握り締めていた。それ見てまた無性に腹が立った。

「何であんな無茶すんのよっ！カッコつけしいっ！」

ほんと、カッコつけもいいところ！

知らない女の子にいいカッコ見せるために自分が死んじゃってもいいわけ？

たかがあんなスカーフのために！

「小言はあとで聞くからさあ…」

と、田村くんはうるさいものを見るような目であたしを見た。

小言じゃないのに。

本当に心配したのに。

バカ田村っ！！

涙がぼろぼろ零れた。

でもいい。このまま泣いてしまおう。

「な、泣くなって…、小早川あ…」

田村くんは困ってる。

けど知らない。

キモチをどこにぶつけたらいいのかわかんない。

信じて黙ってついてったのに。

少なくともあたしの居場所はやっぱりこのボートの上にはないみたいだから。

バカ田村！

アホ田村！

おたんこなすのおっぺけペーっ！

ボートが陸に戻るまで、心の中で思い切り田村くんの悪口を言いながら泣き続けてやった。

「なにやってんだ、田村？落ちたのか？」

びしょ濡れの田村くんを見て風間くんが言った。

ただ落ちただけならまだいいわ。

「環、田村くんどうしたの？」

雪乃や桂子ちゃんも心配して言った。

けど、答える気にもならなかった。

女の子が簡単にお礼を言っただけで行っちゃって、田村くんは放心状態。

命をかけて心意気を見せたってこんなもんよ。あの子にしてみればスカーフさえ取ればそれでよかったんだから。

――ああ、腹立つ...！

「もう、ばかみたいっ！知らないっ！雪乃、桂子ちゃん、行こう！」

あたしはさっさと歩き出した。

これ以上田村くんを見てるとひっぱたいちゃいそうで。

志田浜のドライブインに戻るまでの間、雪乃は風間くんのことを喋りっぱなし。

そして桂子ちゃんまでも楽しかった湖デートの話をしてる。

あたしはとことん惨めな気分には落ち込んだ。

二階に喫茶室があるお土産屋さんに入ってあたしたちはバスが来るまで待つことにした。

心も身体も冷え切っちゃって、とにかく早く温まりたかった。

喫茶室への階段を上ろうとしたとき、

「...その4人組の中で一番純情っぽい人を選んでボートを出してもらって...」

って話し声が階段横の壁の向こうから聴こえてあたしは立ち止まった。

「環、どうしたの？」

「なんでもない。先に行ってて？」

雪乃たちを先に喫茶室に行かせてあたしはそのまま聞き耳を立てた。

「まさか湖に飛び込んだじゃうなんて思わなかったよ。その人彼女と一緒にいたのに必死にこれ取ってくれちゃって」

声はそう言いながらくすくす笑ってる。

喋ってるのはきっとさっきのあの女の子だ。

「東京の男の子も意外と単純だね。このゲームあたしの勝ち。パフェおごりなさいよね」

あたしは我が耳を疑った。

確かにあの子が言ってた死んだお父さんがどうたらって話は嘘くさいって思っていたけど、まさかこーゆーことだったなんて。

あれは確かにバカな行為だったわよ。

けど、あの時の田村くんは間違いなく[死んだお父さんがお母さんに贈った大事なスカーフ]を拾ってあげたって思ってたはずだよ。

パフェですって？

田村くんはたかがパフェ一個のために命をかけたってことなの？

田村くんたちが立てたナンパ計画がとてつもなく可愛いものに思えた。

あたしたちにバレないようにコソコソしてたあの湖畔での田村くんたちがものすごく愛しく思えた。

壁の向こうはお土産屋さんのバックヤードになっていた。女の子はこの娘だったわけね。ああやっっているいろんな土地から来る男の子をだましてからかって遊んでるってわけだ。

東京の男の子は単純――。

ええ、そうでしょう。

東京の男の子というよりは田村くんたちがバカがつくぐらいに単純なのよ。

でもね、東京の女の子は...小早川環はそうはいかないわよ。

お店とバックヤードを隔てていた薄っぺらいカーテンをサーッと引くと、女の子はあたしを見て固まった。

「ちょっといい？」

あたしは手で「おいで、」をして女の子を呼んだ。

――小早川環の心意気、見せてやろうじゃないの。

固まったまま動けないでいる女の子のそばにこっちから近づき、その少し赤いほっぺたを平手でさらに赤くしてやってから、あたしは二階の喫茶室に向かった。

了

自慢じゃないけどあたしは素敵な運動音痴。

駆け足は遅いし持久力もないし球技はチームの足を引っ張り係になっちゃうしで、体育の授業がある日は憂鬱でしょうがない。

それが男子と合同での体育測定なんていった日にはもう、このままサボって帰っちゃいたいぐらい最悪。その最悪な時間がこの後の5、6時間目に控えてる。普段女子と男子は別々に、体育館と校庭をバランスよく使い分けてやってるのに、どうして体育測定は合同じゃなきゃならないのよ。ほんと、意味不明な学校だわっ！

「環どうしたの〜？早く着替えちゃいなよ！」

自然に出てしまうため息を何度も吐きながら、ひとだまが3つぐらい頭の上にのっかっちゃってモタモタのろのろ着替えてるあたしに、妙に浮かれてハイテンションな雪乃は言った。

「またそんな暗い顔をして！ただの体育測定じゃない！」

あたしのウンチ（運痴）をよーくわかってる雪乃は簡単に言い飛ばすけど、その体育測定があたしにしてみれば地獄なのよ。

腹筋背筋握力テストぐらいならまだいいけど、50メートル走ったり走り幅跳びやったりするんだよ？

みんなの前で。

田村くんたちの前で！

今日から「怖い小早川」の他に「どんくせえ小早川」って代名詞がついちゃうよ…。

「ほらほら、予鈴が鳴っちゃった！行こう！」

まとめた髪をバレッタで留めようとしてた手を雪乃に引っ張られたから、

「あーんもう！髪バラバラになっちゃったよ！」

と、文句を言ったら、

「そんなに洒落こまなくたって、髪なんてしばっときゃいいでしょ！はい、ゴム！」

と、あしらわれた。

別に洒落こんでるわけじゃないのに、何となく雪乃に心の中を間違っで見透かされてるようで気分悪かった。更衣室から校庭に出て、そこに群がってる男子たちを見てよりいっそう気分悪くなった。

体育測定はE組F組の男女が合同で行うらしい。女子体育の高梨先生と男子体育の戸島先生がひとりひとりに測定カードを配ってた。

校庭に並んで体育座りさせられた時、

「こんなにやんの？！めんどくせえ…」

って、10項目ほど並んでるメニューを見ながら風間くんが言った。

いつもなら風間くんの発言にはキッと反応しちゃうけど、今日は激しく同意した。
走り幅跳び、腕立て伏せ、けんすい、50メートル走...。
ほんと、めんどくさい。
っていうか、キビシイ。やっぱり帰りたい。

「ぶつぶつ文句言ってるヤツは誰だ？」
タイミングよく戸島先生が怒鳴ったから思わず顔を上げてしまった。
心の中でぶつぶつ文句言っていましたから...。
「俺、俺～」
って、わざわざ手を上げて自己申告する風間くんもどうかと思うけど。
「マジメにやれ」
戸島先生は風間くんに一言クールに注意をした。

――戸島達彦先生、24才。
本城高校では一番若い、男子体育の先生でバスケット部の顧問。
カッコイイ（らしい）シワイルドな雰囲気は女子生徒には随分ウケてるけど、いくら一番若いって言ったって24才はオジンだし、女子校でもないのに先生をスターみたく偶像化する騒ぎっぷりにはついていけない。
それに、戸島先生は養護の沢渡先生といい仲なようで、保健室、体育館、中庭や屋上でやたらとふたりが一緒にいる場面を見かける。女子の間では結構噂になってることで沢渡先生に確認した子もいるらしい。先生同士が恋愛しちゃいけないなんて言わないけど仕事中に生徒に疑われるような態度はやめれば？って思う、あたしにとっては何だかなあ...、な先生だ。

その戸島先生があたしたち生徒を前にしてスマートに爽やかに体育測定の手順を説明してくれている。
そしてあたしは、測定メニューは時間内に何からはじめてもいいという説明にほっとした。だったら田村くんたちとはかち合わないようにメニューを選択していけばいいんだ。
幅跳びと50メートル走の場所はおもいっきり離れてるから、バカボーイズが50メートルやってる時はあたしは幅跳び、そしてその逆って感じで。

開始の合図があって、田村くんたちバカボーイズが行ったのは50メートル走のラインだった。
じゃあ、あたしは今のうちに幅跳びに行っちゃおうと回れ右したら、
「ねね、風間くんたちのタイム見て行こうよ？」
雪乃があたしの腕を掴んだ。
「あたしはいいよ。あっちで幅跳びやってきちゃうから」
ヤツらと入れ替わるようにして離れた場所で体育測定やっていけば「どんくせえ小早川」の代名詞は逃れられる。

あたしのささやかな自尊心を守るための大事な作戦なのよ、これは。
なのに、

「あ、田村くんたちが走るみたいだよ？」

っていう言葉にあっさり負けてしまったあたしってのもどうよ...？

スタートラインに立っていたのは風間くんと松山弟くんで、その後ろに田村くんと松山お兄ちゃんが並んでいた。

スタートした弟くんはさすが体育バカ、と言われるだけあって真剣で、走るスピードはぐんぐん増していく。

一方の風間くん。

結んだ金色の髪を上下に揺らしながらスキップしてる。

「風間くん！マジメに走ってよ〜！」

っていう雪乃の声援なんかまるで無視しちゃって、朗らかに最後までランランスキップでゴールした。

弟くんのタイムは6.0。風間くんは7.1。

「.....あんなに不真面目に走っても7.1なんだから風間くんって凄いわっ！やっぱり足の長さよね！」

好きな人のことは何でも肯定したいって雪乃の気持ちはわかるけど、スキップはどうかと思います。けど7.1には驚いた。あたしなんかマジメに走っても10秒代なのに。

――ますます帰りたい。

青い空に笛の音が響いて田村くんがスタートした。

田村くんとお兄ちゃんはほぼ同じ速さで走り、競い合ってるように見えた。っていうか、絶対に競い合ってる。それもかなりむきになって。

そして、ほぼ同時にゴールしたふたり。

「6.4！くそっ！！0.1秒負けたっ！田村にだけは負けたくなかったのにっ！」

悔しがるお兄ちゃんに、

「はっ！俺が本気になりゃこんなもんよ！」

余裕の田村くん。

「もう一回測りてえっ！」

「それはダメです」

ダダッ子のように喚くお兄ちゃんは体育委員に冷たくあしらわれ、それを笑う風間くんと弟くん。

幅跳びは負けねえ、とか、じゃ今度は俺もマジメにやるかな、とか、一番ケツ記録のヤツは放

課後みんなにアイスおごれ、とか言い合いながらバカボーイズたちは次なる走り幅跳びの砂場に移動して行った。

――平和なお子様ランチだわ…。

純粹にそう思い、しばらく呆然とヤツらを見つめてしまった。
「誰がアイスプレゼンターになるか見たくない？」
と、雪乃。

――見たい…かも…。

誘惑に負けそうだったけど、
「もういいよ。自分やらなきゃ。あたしはここで走っちゃうね」
幅跳びにヤツらが行っちゃったんで、その間にあたしはこのままここでこっそり50メートルを
走ることにした。

・
・
・

――世の中そんなに甘くはない。

50メートル走は混んでいて並んで待ってる間に幅跳びを終えたバカボーイズたちは帰ってきて
しまった。そして、しっかり見られてしまったのよ、10.4のどんくさい走りを。

一緒に走った子と3秒以上の開きがあったから、さらにどんくささも目立ってしまっただろう。
「無敵の小早川さんにも不得意分野があったのねえ」

ニヤニヤしながら言い放ったのは風間くん。

このヒトの言葉にはいつもいつも傷つきまくってるあたしだけど、戦隊ロボじゃないんだから
`無敵、`ってのはヤメテ欲しい。

さすがにへこんだ。

「まあ、完璧な人間なんていねえんだし。俺にだって得意じゃねえことあるし、そんなにへこむ
なよな！」

肩を叩いて慰めてくれたのは田村くん。

気持ちはとってもありがたかったけれど、あたしがへこんでるのはタイムじゃなくあんたたち
に見られたってこと。その辺り、ものすごく勘違いされてるのも悔しい。

「男子の一部、ふざけた態度でやってたヤツがいたがお前らは学校ってのをなめてないか？」

体育測定終了後、戸島先生が提出した測定カードをパラパラとめくりながら言った。

「学校ってところはマジメに学ぶところだ。それがたとえ体育測定でもな。今日のお前らの態度は全て内申に反映されるってこと忘れるなよ」

戸島先生の視線はバカボーイズ周辺に注がれていた。

「ふざけた態度の男子の一部、はお前らだ、とその目は冷たく言っていた。

そして戸島先生は、

「女子は運動部に入ってる生徒とそうでない生徒の力の差が激しすぎるぞ。小学生の記録より劣ってる生徒もいるし、甘いものばかり食べてないで体力つけろ」

今度はあたしに目を向けながら言った。

――戸島先生。大キライだ。

◇

どうやらアイスプレゼンターは田村くんだったようだ。

「金ないのに…。50円棒キャンディーしかおごれねえからなっ！」

「ダメ～！俺、ハッピーモナカが食いたいもーん！」

「俺は雪見だいふくがいい～」

「俺はジャイアントコーン！」

と、騒ぎながらバカボーイズたちは放課後の校門を出て行った。

戸島先生の「内申に反映、なんて言葉は全然どこにも引っかかかっていない様子で、ヤツらの頭は牛乳屋のアイスボックスに行っちゃってる。

「あたしたちもアイス食べて帰ろうよ！」

雪乃や美紀も一緒に流れていく態勢でいる。

――たまにはいいかも。今日は気分悪い一日だったし疲れたし。

そう思って下駄箱から靴を玄関に下ろしたとき、髪が前に落ちてきて気がついた。

「バレッタがない…」

さっき、更衣室で着替えをした時に落としたのかもしれない。

安物のバレッタだけど、あたしの髪に馴染んだお気に入りだったからこのままなくなっちゃったらちょっとショック。

「先に行ってて？更衣室探してくる」

雪乃たちにそう言って、あたしは渡り廊下の先の更衣室に向かった。

そして、更衣室のロッカーで無事にバレッタを見つけて部屋を出たとき、

「もうほっといて！私にかまわないで…！」

抑えたような叫び声がして体が固まった。

もう誰もいない薄暗いこんな学校の片隅でせっぱ詰まったような声をあげてるなんてただごとじゃない、ってあたしの本能が感じ取った。

「もう、あなたを信じられない...！」

ドアの陰から声ができる方を覗いてみたけど、そこには誰もなく、体育準備室があるだけ。

そして、

「だから...、それは誤解だよ。キミは誤解してるんだ」

なだめるように言う声は...戸島先生だ。

「つきあってからずっとよ？そんな言い訳が信じられると思う？」

「だから...」

「いやっ！触らないでっ！」

——ちょっとちょっと....。何の話よ、まったく....。

痴話喧嘩なら学校出てからしなさいって。

体育準備室で堂々と先生同士が....、

——でも、沢渡先生の声にしちゃ可愛すぎる声だ。

「さよならっ！」

体育準備室から飛び出して来た人影を見てあたしはとっさに更衣室の中に隠れた。

一瞬しか見えなかったけど、制服を着ていたよ？

ってことは沢渡先生じゃなく生徒だよな...？

「おい！待てよっ！」

戸島先生が慌てて追いかけていく足音がした。

——.....。

別にどうでもいいわよ。

先生と生徒の恋愛沙汰っていうのも結構あるみたいだし、戸島先生が誰と恋愛してようが誰と浮気してようがあたしには興味もなければ関係もないこと。

でも、
学校ってところをなめてないですか？
学校はマジメに学ぶところです。

――先生にも内申ってのがあれば絶対に反映されるだろうな、これって。

戸島先生の走るスリッパの音が彼方に消えてから、あたしは手に持ったままのバレッタで髪を留めて更衣室を出た。

了

年間行事の中で、最低サイアクな体育祭が迫ってて、ここのところため息ばかり出てしまう。

体育祭は1年から3年までの各クラスを縦割りにしてクラスカラーで競うらしく、F組のカラーはダサイ紫。

そんなことはどうでもいいのだけど、今日のホームルームでは各種目に出場する選手と応援団に所属する人を決めることになっていて、朝からどんより...と曇り空な環ちゃんです。

黒板には『100メートル走』とか『400メートル走』とかの種目が書かれていて、自分が出場したい場所に名前を書くようにと体育委員は言う。

けど、ズラーっと並んだそれらの中に、あたしが自分の名前を書きたい場所なんてあるわけない。

「.....小早川、出る種目あんのか？」

——と、暴言を吐いた田村くんの背中を一発はたき、ついでに他の3人も睨んでやった。

「いってえなあ！心配してやったんじゃない！」

「それはどうもありがとう！でも、心配していただかなくても大丈夫！間違ってもクラス対抗リレーとか100メートルとか400メートルには出ないから！」

田村くんはあたしが叩いた背中に手を回してスリスリ撫でながら、マジで心配してやったのに...、とぶつぶつ呟いた。

その横で松山お兄ちゃんが言ったのは、

「あったりめーじゃんっ！お前一人のためにF組壊滅させられるかってのなあ？だから小早川、くれぐれも自分相応の種目を選んでくれよな！」

という、万死に値するようなコトバだ。

「桂子ちゃん...、ちょっといい...？」

あたしは、桂子ちゃんを呼び寄せた。

一応、松山太郎は桂子ちゃんの大事なカレシだし、鉄槌を下す前にはお伺いを立てないと、と思って。

「あの男、どうにかしてもいい？」

「...太郎くん悪気はないと思うから許してあげてくれる？」

——どう考えても悪気があると思えないうんですけど...！！

「小早川が出られる種目っていったら応援合戦ぐらいじゃん？」

ほら。

「おめー、この世の終わりの的にどんくさいから百足とか障害物も無理っぽいし、幼稚園みて一なお遊戯なんてのは高校の体育祭にはねーし、だからおとなしく応援団に回れ？」

これでも悪気がないと言うんですか、桂子ちゃん。

友達がカレシに苛められているこういう場合の二者択一、あっさりカレシを取って庇ってもくれないわけだ。

「おー、それがいい」

「そうしろ、そうしろ」

「めでたし、めでたし」

繊細なあたしを傷つけて笑う松山タロジロと風間バカ。

泣きたくなくて、マジで帰ってしまおうかと思った時、

「しょーがねえから俺が面倒見てやるよ」

田村くんがスタスタと黒板まで歩いていき、『二人三脚』と種目が書かれた場所に自分とあたしの名前を書いた。

「面倒見てやるってどうゆうことよ!？」

「見りゃわかるだろ?二人三脚だぜ?まさか、二人三脚がどうゆうものかわからねえってことはないよな?」

足を片方ずつ縛った二人が一緒に走るあれでしょう?

いくらあたしでもそれぐらい知ってるわよ!

っていうか....。

え?

えっ?

えええ〜っ?!

二人三脚って、足を縛って肩を組んでピッタリくっついて走るアレだよね?!

あたしが、田村くんと!?

田村くんが、あたしと?!

いきなり、火が噴き出したのかと思うぐらいに顔が熱くなった。もしも本当に噴き出していたのならその炎を松山太郎に思いっきり浴びせてやりたいとも!

「俺がお前を引っ張ってやるってこと」

「へえ〜。お前が小早川に合わせて走ってやるってわけ?優しいねえ、田村は」

松山太郎が、信じられないとでもいうような言い方をすると、
「田村、小早川に弱みでも握られてるのか？」
と、風間バカ。
「きゃははっ！それ、最高！」
ウケまくる雪乃の笑い方はまるでオバサンの高笑いだ。
「二人三脚だってそれなりの"技"が必要なのよ？環、大丈夫？」
「もつれてスッ転んだ小早川を、そのまんま引っ張ってゴールする田村が目に見えなかった！」

どいつもこいつも、どんだけ人をバカにすれば気が済むのだろう。
こんなサイテーなオトコどもを好きだって言う桂子ちゃんや雪乃が信じられない。

「……あたし、べつに田村くんに面倒見てもらわなくたっていいよ…」

自分でも驚くぐらいの冷え切った声がコトバになって出てきた。
雪乃の高笑いが止み、松山太郎以下も黙り込み、田村くんは驚いたようにひとこと「おい…？」と呟いた。

あたしの足は勝手に黒板に向かって歩き出し、手は黒板消しを握り締めていたからだ。
「自分の面倒は自分で見られるし、あんたたちに言われなくたって自分の事はよく分かってるつもりだから」

田村くんが自分の名前の横に書いたあたしの名前をスッパリとふき取ってやった。
「おいおい。そうムキにならなくてもいいじゃん…」

呆れたような風間くんの言葉を聞きながら、あたしは黒板に書かれた項目たちに目を流し、自分が出られそうな種目を探す。

100メートル走ボツ、クラス対抗リレーボツ、400メートル走ボツ、ハードル競争ボツ、ムカデ競争…いいかもしれない。けど、やっぱりみんなの足を引っ張りそうだからボツ、障害物…もムリ——。

高校の体育祭にはないの？唯一、あたしが堂々と出られるあの競技が。
黒板に書かれた項目を、右端から順番に見て行って、そしてやっと左の端っこの方にその唯一を見つけた。

——紅白玉入れ。

ここにしっかりと自分の名前を書き、そしてついでに応援団にも名前を書いた。
これで文句ないでしょう。
あたし相応の種目をちゃんと選んだわよ。

「あのさ、環」

雪乃があたしの肩を叩いた。

ふと見ると、桂子ちゃんも申し訳なさそうな目をあたしに向けているし、松山太郎はあたしから目をそらすようにわざとそっぽを向き、風間くんまでバツが悪そうにうつむいている。

みんな、あたしを苛めたことをちょっとは気にしてくれたのかも、と思った。

無敵の小早川なんて好き勝手言ってくれているけれど、あたしはけっこう傷つきやすいんだってこと、わかってくれたのかも、と期待した。

ところがどっこい....、

「その玉入れ、教職員の種目だよ...？」

「えっ!？」

黒板を見直すと、『紅白玉入れ』と書いた右上に小さく、『教職員種目』と書かれていて、玉入れの左隣に『宝探し』も書かれていて、担任の先生がどっちに出るか名前を書く場所だった。

「小早川さん、私の代わりに出てくれますか？」

担任が半分本気な口調で言った。

出られるものならそうしたい。

けど、教職員の中にひとり混ざって玉入れをやる自分の図を想像したら、100メートル走でビリを走る自分の図よりも滑稽だったから、

「...いいえ!」

もう一度、黒板にある競技を端から端まで見直して、とりあえずのところに名前を書いた。

――借り物競争。

これは運に左右される競技だから、女神さまがあたしに微笑んでくれれば何とかなる。

よっぽど変な借り物が指定されてなければ、あたしにだって一等賞が取れる確率が高いわけだ。

「これでいいでしょ、バカボーイズ!」

思わずいつも心の中で思ってる言葉が口に出ると、バカボーイズって何だよ？と田村くん一同は無然とした。

「もしかして、俺たちのこと？俺たちバカボーイズ？」

「素敵ボーイズの間違いだろう」

太郎兄と風間バカがそんなことを言い合っている傍で、田村くんは、
「...素直に二人三脚やりゃあいいのに...」

と、つぶやいた。

田村くんと二人三脚....、

確かに、帳消しにしたのはちょっと残念だった気もした。

◇

応援合戦は、各クラスから出る応援団がクラスカラーで団結し、趣向を凝らした応援を競い合うらしい。

一個の競技として得点にも反映されるらしく、昼休みとか放課後とか、それぞれの応援団が集まって練習している。

あたしも一応、その中のひとりで、雪乃も桂子ちゃんも一緒だ。

F組の応援団は、［めちゃめちゃ音頭］（某人気アニメのエンディングテーマ曲）を女子は浴衣、男子はハッピーを着て踊る...って内容に3年生たちが決めたらしい。

体育祭の応援合戦で盆踊りってのはどうなの...？と思わないでもないけれど、文句は言えないから素直に従う。

男子のハッピーは問題ないけれど、女子は浴衣を自分で着られなければならないため、今日は家庭科室に集められて着付けの特訓を受けた。

1時間ほど先輩や家庭科の先生に教えてもらいながら練習して、帯も蝶々結びなら何とか自分で出来るようになった。

出来るようになった人から解散していいと先輩に言われて、あたしがそそくさと着替えようとしていると、

「せっかく着たのにもったいないじゃない！ちょっとこの恰好のまま歩いて来ようよ！」

雪乃が、今にも帯を解こうとしているあたしの手を掴んだ。

「いやだ。あたしは脱ぐ」

どうせ、廊下続きの音楽室の前にでも行って、風間くんに浴衣姿を見せようって魂胆でしょ。

雪乃の浴衣は流行りのデザイナーズで、原色の鮮やかなグリーン地に、真っ黒な幾何模様が散りばめられている...、シンプルなデザインのわりにはやたらとド派手な浴衣だ。雪乃にはとてもよく似合っているし、風間くんに見せたいと思う気持ちも分からないではない。

ちなみにあたしの浴衣は、濃紺地に紫陽花が咲いているどこにでもある普通の浴衣だ。

ていうか、雪乃以外、3年生たちだってみんな普通の浴衣だけど。

「つまんない子だね、環～。浴衣なんてめったに着るもんじゃないのに」

「体育祭の時に着るじゃない。明日からだって盆踊りの練習の時は着るよ？」

「盆踊りっていうの、やめなよ。一応、応援合戦でこれも種目のうちなんだから」

雪乃には、おもいきりため息をつかれてしまった。

「だって、盆踊りじゃない」

可愛くないなあ...、と雪乃。

ごもっともだと自分でも思うー。

「私、太郎くんに見てもらって来よう…」

――はいっ？！

「そう来なくっちゃ！じゃ、あたしも！」

あっという間もなく、桂子ちゃんと雪乃はふたりで家庭科室を出て行ってしまった。

恋をすると、人は変わるものなのね…。

最近の桂子ちゃんを見てて、心の底からそれがわかった。

ふたりがなかなか帰ってこないから、あたしは元の制服に着替えてから家庭科室を出た。

そして、開いている音楽室のドアから中をそっと覗いてみた。

桂子ちゃんと太郎兄、雪乃と風間くんたちが、ピアノの方に固まって楽しそうに話をしていた。

雪乃も桂子ちゃんも、バカボーイズたちにすっかり溶け込んでいる。

田村くんも楽しそうに雪乃たちと話をしている。

「……」

あたしってつくづくどうしようもない。

こんなところで覗いてるぐらいなら、素直にあの中にいればいいのに。

素直に二人三脚やればいいのに、と田村くんも呆れていたじゃない。

自分でも素直になればって思うのに、本当の気持ちに従おうとすると何かがキュッと合図してくるから、こんな可愛くない小早川環が出来上がってしまう。

――なんでだろ。

思わずため息が出たとき、

「環ちゃん？何してるの？」

背中から声をかけてきたのは、小春ちゃんだった。

「べ、べつに？ドアが開いていたからちょっと覗いてたの。雪乃と桂子ちゃんがあそこにいる」

小春ちゃんは、雪乃と桂子ちゃんの方に目を向けて、浴衣？と首をかしげたから、応援合戦でやる内容を話してあげた。

「私たちのB組は、ロックンロールを踊るの…」

小春ちゃんは、サブバックの中から派手な水玉模様のフレアミニスカートと、同じ模様のリボ

ンを出して見せてくれた。

「...これ、小春ちゃんが着るの？しかもロックンロール踊るって...」

全然小春ちゃんのイメージと合っていない。

「うん...。今日、練習したんだけどどうまくノリについていけなかった...」

小春ちゃんは、ふうと息をついた。

「でも...、がんばってみようかと思って」

小春ちゃんの視線はピアノからちょっと離れたところにあるドラムの方に注がれていた。

そこにいるのは当然、煩くて暑苦しいバカボーイズの中ではオアシスのような存在の柏木くんだ。

そういえば、柏木くんがドラムを叩いてるっていうのも、あの涼やかな見かけとイメージからはあまり想像できない。ドラムっていうのはやっぱり、ムサイ男が汗を飛び散らせて叩きまくる、っていうイメージがある。それは、あの柏木くんとはまったくの対極にあるものだ。

「柏木くんのドラム...、すごいんだよ？」

「小春ちゃん、聴いたことあるの？」

「うん。中学の時から柏木くんのこと知ってるの。公民館でライブ、毎年やってて...、ほんとすごい」

へえ...。

あの柏木くんが、そんなすごいドラムを叩くんだ。

「あ、柏木くんは私のことなんて知らないんだよ？中学も違ったし、クラスも違うし...」

頬を少し赤くして小さなため息を吐く小春ちゃん。

柏木くんが読んだ同じ本を、大事に手にしていた小春ちゃん。

もしかして、柏木くんのこと...？

「そういえば、環ちゃんはどうして雪乃ちゃんたちとこないの？一緒に応援団やるんだよね？」

小春ちゃんが、柏木くんからバカボーイズたちの中にいる浴衣姿の雪乃と桂子ちゃんに視線を移し、雪乃ちゃん綺麗だね、とうっとりしたようなため息をついている。

あたしが、あの中にいないのは...、

「...それはね、小春ちゃん。あたしがあまのじゃくだから、なんだ」

小春ちゃんは、え？という目をしてあたしを見た。そして、

「そっか...。環ちゃんはあまのじゃくなのか」

ほっこりと笑った。

了

赤い髪と紫のハチマキ

今日という日に降る雨を、一週間前からいろんなカミサマに祈ってきた。

空のカミサマ、雨のカミサマ、雷のカミサマ、ついでにあまのじゃくのカミサマにまで、どうか、体育祭の日には土砂降りの雨を降らせてくださいって。

自慢の浴衣を見せびらかしたい雪乃とか、

太郎バカと一緒に走る二人三脚を楽しみにしている桂子ちゃんとか、

後夜祭で軽音楽部（キャッスル）の発表会をやるっていう田村くんたちの事情なんかは全部無視して、小早川環ちゃんのためだけに、大雨がどしゃーっと降って体育祭が中止になってくれないかと。

けど、そんな薄情が災いして――。

「えー、本日は晴天なりー。あ、あ、ただ今マイクのテスト中、ただ今マイクのテスト中」

体育祭実行委員長が朝礼台の上で言ってるとおり、晴天もいいところで暑いくらいの体育祭日和になってしまった。

「テストテストスッ、ただ今マイクのテスト中、本日は晴天なりー、本日は晴天なりー」

うざったい。

あの実行委員長、ひっぱたいていいでしょーか――。

開会式が終わって、すぐさま競技が始まった。

雪乃はハードル競争と400メートル競争とムカデ競争と混合リレーに、桂子ちゃんは100メートル走と二人三脚とムカデ競争と障害物競走に出場する。

で、あたしは、足を引っ張る競技には出るな、という1年F組のみなさん、とりわけバカボーイズたちからの強い要望によって、競技に出るのは借り物競走のみ。

ひとり最低三種目は出なきゃならない競技の残りの二種目は、雪乃と桂子ちゃんがそれぞれ引き受けてくれてるという情けなさ。

体育祭なんて、キライー。

「ま、適当に頑張れよ、小早川！」

背中をポンと叩いて激励してくれた田村くんを、思わずキッとにらみつけてしまった。

「頑張るもなにも、借り物競争は運で決まるから！」

そーい捨てる、あたしはくるりと回れ右。

何怒ってんだよ...とつぶやきながら、田村くんはこれから出場する男子100メートル走の待機場所に歩いていった。

ちなみに、田村くんの出場種目は100メートル走と二人三脚とムカデ競争で、6人一組で走るムカデ競争のメンバーはバカボーイズの4人と雪乃と桂子ちゃん...。

体育祭なんて、キライ.....。

男子100メートル走が始まった。

ひょろっとして赤メッシュヘアの田村くんは、あたしが言うのもなんだけど、どう見たって体育万能には見えない。

100メートル走は足の速い人が出る種目なんだろうけど、田村くんで大丈夫なんだろうかーと、スタートラインに立ってストレッチをしている田村くんを見て思った。

けど。

鉄砲が鳴った瞬間、誰よりも早くスタートを切ったのは田村くんだった。

最初の一步がものすごく大きかったのか、それとも瞬発力があるのか、予想に反して田村くんは後続の人をぐんぐん引き離して一番前を走っていく。

赤い髪と紫のハチマキが絡み合うようにして風に泳いでる光景は、ちょっと綺麗だ。

「田村くーん！！」

雪乃と桂子ちゃんが、ゴールの脇に立って大きな声援を送っていた。

ゴールの脇に立って。

ゴールのー。

ーあっ。

あたし、何でこんな遠くでひとりで見ているんだろう？！

F組のみんなは競技フィールドの傍に行って応援しているのに！

慌てて雪乃たちの所まで走ったけれど、あたしがそこに合流出来た時は、田村くんはもう既にゴールして、雪乃や桂子ちゃんたち応援団にガッツポーズを送っていた。

田村くんが白いテープを切る一等賞の瞬間、見逃したー。

「しっかり応援、頼むわよ、環！」

いっちに、いっちにと12本の足で足踏みをしているのは、これからムカデに出るバカボーイズと雪乃たちだ。

松山次郎を先頭に、桂子ちゃん、太郎、風間くん、雪乃、田村くんと並んでいる。

雪乃がしっかりと風間くんの肩に手を伸ばしているのは当たり前だけど、田村くんが雪乃の肩にしっかりと手を伸ばしているのを見るのが、なんとなくイヤだと思った。

「松山くん桂子ちゃん松山くん風間くん雪乃田村くんみんながんばってね」

とりあえず、激励の言葉をかけてみたけれど、

「ずいぶん棒読みだなあ…。もしかして機嫌悪い？」

と、田村くんが顔をしかめた。

そして、

「あららん。小早川さんの機嫌の悪さはいつものことでしょう？」

「まあ、ヒステリーになってないだけいいけどな」

「あんまり言うと、鉄拳が飛んでくるからやめとけ？」

松山太郎、風間バカ、松山次郎の順に続く。

機嫌はもちろん朝からすこぶる悪いです。

雨が降らなかったことから始まって、実行委員長のテスッテスッでイラつき、役立たずの自分が情けないと落ち込み。

けど、朝のそれと今のこれじゃ、不機嫌の原因が違っている。

でも、それは全部自分が悪い。

田村くんの一等賞が見られなかったのも、ムカデの中に自分がいないのも、あまのじゃくなあたしが悪いんだ。

あまのじゃくやってイジケてちゃ話にならない。

つくづく自分がいやになる。

「……じゃ、あたしはあっちで応援してるから」

くるっと回れ右をして、12本のムカデ足から離れたとき、

「あれ？鉄拳なかったなあ？」

「悪いものでも食ったか？」

「失恋でもしたかー」

次郎、風間バカ、太郎がこそこそ言い合う、`大きな声、が聴こえた。

——バカボーイズ、キライ…。

絶妙なチームワークと意気込みのおかげで、F組のムカデは一等賞。得点に大きく貢献した…ようだ。

そして、二人三脚。

トップの松山太郎と桂子ちゃんコンビは、さすがにぴったりと息を合わせてトラックを走り、二等でタスキを次の田村くんの首にかけた

田村くんは、コンビで走る清川さんの腰に手を回し、清川さんも田村くんにピッタリとくっついてスタートした。

いっちに、いっちにと声を掛け合って、絶対に離れないようにくっつき合いながら走る田村くんたち。

「赤抜かすぞー！清川いいかー？」

「オッケー！大丈夫だよ！」

ふたりは息を合わせてピッチを上げ、先頭を走っていたA組の赤を追い越した。

よっしゃ、いいぞ！田村、清川！と、応援団が歓声を上げる。

もしも、黒板の名前を消さなければ、あたしが田村くんとああやって走っていたんだらうか。ありえないよね。

きっと、もたついて転んで歓声どころかブーイングが飛んでいたに決まっている——。

風に泳ぐ田村くんの赤い髪と紫のハチマキ。

その隣で同じようにして泳いでいる清川さんのハチマキ。

触れ合ってる肩と、寄せ合っている身体。

さっき、雪乃の肩に手を置く田村くんを見た時よりもイヤな気分沈む。

もうこれ以上見たくないって思った。

——体育祭なんて、大ッキライッ。

◇

お昼休みが終わって午後の競技に入る前に、応援合戦が行われた。

あたしたちF組は、はじめに長ラン応援団がフレーフレーってやつをやった後に、浴衣とハッピーで[めちゃめちゃ音頭]をめちゃめちゃに踊った。練習時間もあまりなかったから仕方ないといえど仕方ない。

けど、浴衣とハッピーというコスチュームは案外好印象だったらしく、音頭がめっちゃめっちゃだったわりには最高得点がいただけた。

小春ちゃんたちB組のロックンロールは、統率もとれていたし踊りも上手だったのに最低得点だった。ちなみに、審査員は校長先生教頭先生と各学年主任の先生たちだから、音頭はOKだけどロックはNGだったんだろう。内容を決めた先輩たちがそこら辺をちゃんと見通していたかいなかで、この応援合戦の得点は決まったわけね。

「おー、小早川〜。馬子にも衣装ってヤツだなー？」

着替えに校舎に入ろうとした渡り廊下に、田村くんたちバカボーイズがぞろぞろとやってきた。

長ラン応援団をやった松山太郎に桂子ちゃんとのツーショットを撮れと言われていたらしく、田村くんがカメラをふたりに向けている。

「ついでに小早川も撮ってやるからそこに立てよ？」

「あたしはいいよ」

いつものように、速攻で口から出たのはこんな否定的文句だ。

田村くんもそんなあたしに慣れっこになっちゃってるのか、やれやれって顔をしてから、
「じゃ、みんなで撮ろうぜ？記念写真！」

風間くんや雪乃たちもここに呼び寄せて、今ツーショットを撮った桂子ちゃんたちも並ばせた。

「田村は入らねーでいいの？」

「だって俺、カメラマンだし...、フィルムも一枚しか残ってねーし」

シャッターを押してくれる人、誰かいなかと周りを見たけれど、こーゆー時に限って適当に手が空いている人がいない。

「じゃ、あたしが撮るから田村くん入りなよ」

あたしは田村くんからカメラを取った。

「いいって。たまにそーゆー可愛い格好してるんだから、記念に撮ってやるよ」

田村くんはあたしからカメラを取り返す。

「いいってば！あたしが撮ってあげるから！」

強く言っちゃってから、しまった、と思ったけど遅い。

田村くんはむすっとして、仕方なく雪乃の隣に入り、松山太郎は、まったく小早川だぜ...、とぶつぶつ言っている。

ーだって...、このメンバーの記念写真なら、あたしがいるより田村くんがいた方がいいに決まってるじゃない。

カシャッと、シャッターが切れる音がむなしく感じた。

・
・
・

さて、いよいよ小早川環ちゃん、最初で最後の競技出場です。

幸運の女神さま。

どうかどうか、あたしがとる借り物は、`ジャージを着てる人、とか、`運動靴をはいてる人、
、というような簡単なものにしてください。

そして、一等賞をください。

みんなのお荷物にはなりたくないし、これ以上みじめな思いもしたくないです。

だから、お願い。

天邪鬼のカミサマは、今だけどっか行っちゃってください。

ヨーイ、パン！と鉄砲が鳴った。

借り物が書いてある封筒まで行くのに、既にビリ。

あたしがそこに着いたときは、最後の一枚しかなかった。

でも、残り物には福があるものよ！

『赤いもの』

封筒の中には`赤いもの、と書かれた紙が入っていた。

「小早川！中身はなんだ？！」

トラックのすぐ傍まで来ていた応援団の中から田村くんの声が聴こえた。

「赤いもの！！」

赤、赤、とあたしも応援団たちも周囲を見回す。

けど、これがなかなか見つからない。あたしたちが着ているジャージはエンジ色だ。

「赤、赤！」

そのとき、頭にふっと過ぎったイメージがあった。

さっき、風に泳いでいたのは...紫のハチマキと赤い....、

「赤い....、赤いハチマキ誰か貸して——！！」

近くにいる赤ハチマキの人たちに頼んだけど、みんなF組得点の協力なんてしてくれない。
ハチマキをしっかりと手で押さえて首を振る。

「うそー！」

泣きそうになって、別の何かを探そうと振り返ったとき、そこにいたのは田村くん。

赤....、赤....、

「田村くん！髪の毛何本かちょうだいっ！！」

「はあ？！」

あたしは田村くんの髪の毛に手を伸ばして、赤メッシュの部分をむしりとりようとした。もう、これしかない。他に赤いものが見当たらないんだもの。

まだ他のクラスの人たちも借り物を探していて誰もゴールには行ってない。田村くんの赤メッシュ髪を数本握っていけば、あたしは一等賞になれるっ！

「いててて！止めろ、小早川～！」

「協力しなさいよ！F組がビリになってもいいの？！」

「...うっ」

田村くんは観念したようだ。急におとなしくなって、わかったよ！と投げやりに言った。

そして、

「だけど、大事なメッシュをむしられるのは勘弁！このまま一緒に走って行ってやる！」

あたしの手を握ってトラックの中に飛び込んで行った。

「え？！ちょっと！？田村くん？！」

「赤いもの持ってりゃいいんだろーが！俺が頭突き出せばいいんだろ？！」

「そ、そうかもしれないけど.....っ」

――めっちゃめっちゃ速いんですけどっ！足が田村くんが走る速度についていけないの！！

後ろからグリーンのはちマキが追ってきた。

このままだと追いつかれてしまう。

「小早川！諦めずにそのまま走れ！いっちに、いっちに！」

田村くんの掛け声にあわせて何とか足を交互に前に出す。

だんだん速くなっていくけれど、掛け声があるからついて行かれる。

夢中でゴールに飛び込んだ。

そして、紙と`借り物、を担当者の先輩に見せる。

「赤いもの...って、これ？」

担当者は田村くんを指差して首をかしげた。

「これこれ、ここにあるでしょ、赤いモノ！」

田村くんが突き出した頭に、担当者は困惑している。

これで失格とか言われたらあたしも泣くに泣けないから、

「あと、この人赤点が得意だし、このメッシュだけじゃなくてもう、全部がいろいろと赤なんです！！」

と、訴えた。

「……まあ、そう言うんなら。ここには赤いものって書いてあるだけだから、ゴールってことにします」

担当者はあたしに一等の紙を手渡し、そして一等の旗の下に連れて行ってくれた。

「やったな、小早川！」

田村くんは、握っていたあたしの手を放してその手でポン、とあたしの頭を叩いた。

「赤点が得意ってのはちょっとアレだったけど、まあ、それも役に立ったんなら良しってことにしとくぜ！」

じゃあな、と言って田村くんは応援席の方に帰っていく。

今まであった感触がなくなって、ふと寂しく思ったところを見て、たちまち顔が熱くなった。

――田村くんと、手、ずっと繋いでいた？！

走ってる時も、ここで担当者ともめていた時もずっと！

カーッと顔が赤くなっていくのが分かった。

きっと、田村くんのメッシュよりも、赤点なんかよりも、今のあたしの顔が一番自然な赤を発していると思う。

でも。

田村くんのおかげで一等賞取れた。

――体育祭、ちょっと好きになったかも…。

幸運の女神さま、ありがとう。

天邪鬼のカミサマは、もう少しどっかに行っててください。

今は、素直に喜んでいたいから。

背中を向けてる田村くんの上で、赤メッシュと紫のハチマキがひらひらと綺麗に泳ぐのを見ながら、そう思った。

了

田村くんのうるわしきスクールデイズ 1

<http://p.booklog.jp/book/70134>

著者：笹竹颯夜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/souya610/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70134>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70134>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ